第一章　今は只、闇。

　復讐はあった。
　多分、幼少の頃なのだと思う。
　何で、こんなに世界が汚いのだろうと思った。
　醜いモノ、おかしいモノ。何で、この世界はこんなに間違っているのだろうと。
　ああ。神様なんていないんだなあと感じた。
　そんな世界でしか生きていけない自分。
　強く、恨んだ。
　汚い世界において、神はいなかった。
　悪魔でも現れてくれれば、むしろ救いだったのだろうか。

†

「ねえ、コロンゾン。貴方の事、“ニコライ”って呼んでいい？」
　私はコロンゾンの背中に寄り添う。
　彼はいつも無口で、無感情で、無感動だ。この世界の何物にも意味も価値も見出してはいない。
「ああ、構わないよ」
　冷淡な口調で、抑揚の無い声だった。
　住んでいた場所、経験した物事、あらゆるものが違っていたけれども、私達を結ぶものは、あった。
　それは、“虚無”というもうどうしようもないもの。
　彼はこの世界に絶望している。私が生きていたような悲惨な世界に生を受け、そこでミュージシャンとして伸し上がろうとした。けれども、彼が所属していたバンドのメンバーは、彼以外、皆、その世界の独裁者が放つ『能力者』の刺客によって殺されてしまった。
　元々、彼は虚無主義、ニヒリズムを歌うミュージシャンだった。
　絶望、悲哀、無意味さ、苦悩、怒り。そして、その先にある空虚を。
　おそらくは、私と類似した闇を抱えている彼。
　だからこそ、私は旅に同行させた。
　私は彼に言った。
「私はこれから世界を滅ぼそうと思っているんだけれども、協力してくれない？　この世界の不条理を赦せない」
　彼は肯定でも否定でもなく、只、私に付いてきてくれた。
　彼の人生を、私に明け渡してくれたようなものだ。
　きっと、私の行き着く先は無でしかないのだろう。
　それだけは分かっている。

青い悪魔を殺して。
私がこの世界の一番の災厄になる。
今は、それだけしか考えられないし、私はこの世界に復讐する事ばかりを糧にして生きてきた。救われる事は赦されない。
私は悪。
そのシンプルさがいい。
彼はそんな悪でしかない私に付いてきてくれるというのだ。
何も無くても、未来なんて無くても。
きっと、亡びる事しか未来には無くても。
「ねえ、コロンゾン。私の妄想に付き合ってくれないかな？　幼い少女の私がずっと抱えていた観念の世界。ドストエフスキーの小説しか救ってくれなかった世界。聖書の言葉なんて一つも信じていなかった世界。私は『悪霊』の登場人物であるニコライ・スタヴローギンに恋をした。初恋だった。彼を崇拝するテロリストの親玉であるピョートル・ヴェルホベンスキーと私は重なった。この世界を破壊してやりたい。その何もかもを」
文学の話に彼は興味無い。
けれども、それでいいと思う。私の妄想に付き合ってくれるだけれで、とても嬉しい。
私は彼の事が好きなのだろうか？
けれども、私は人を愛するという事がどういう事なのかまるで知らない。
かつて、私と仕事上のパートナーに近い位置にいた『ブラック・スペル』。私はそいつが死ぬ程、大嫌いだった。
そいつの視線、そいつの声音、そいつの顔立ち、あらゆるものが大嫌いだった。
あいつは、私にとって歪んだ鏡像そのものだ。
決して、認めるわけにはいかない。
けれども、そいつと完全な対極であるかのように。
コロンゾンは私の側にいる。
優しいとか。
暖かいとか。
きっと、こういう事なのかもしれないなあ、と思った。
彼は息を吸い込んで、小さな子守唄を私に歌って聴かせる。
歌声は響いて、反響し、世界に亀裂を生んだ。
彼の『能力』が発動した。
発動しても音は無かった。
何かが起きた、という現象が最初は見受けられない。
しかし、それはこの世界に現れる。
部屋の隅の空間が歪んでいく。それは最初、無色透明だったが、暗い漆黒になり、あらゆる明かりを呑み込んでいく。そこには、ぽっかりと開いた、歪な孔が生まれた。
私が彼の“血”から読み取った情報によれば。

　彼の能力『エグリゴリ』は、彼の歌声によって発動し、この世界に存在している何物の存在をも否定し、赦さず、消滅させる孔を生み出す、絶対無の空間を作り出す。
　彼が狙いを定めた場所は、たとえどんな素粒子だろうが、存在する事が出来なくなる。
　酸素だろうが、二酸化炭素だろうが、電子だろうが、クォークだろうが、ニュートリノだろうが消滅させ。どんな熱量もベクトルもエネルギーも停止し、死へと至る。
　あるいは、どんな魔力も能力も存在する事を赦さない。
　おそらくは、神が彼の前に立ち、そこに存在するのならば、神ですらも消滅させる。
　おそらくは、あらゆる次元、あらゆる高位存在の最上位に立ち、只、消滅させるという一点のみの破壊ですらない、否定の創造を執り行う。
　私は知っている。
　彼の能力はまだまだ進化の途中である事を。
　この先、この能力が成長し切れば。
　きっと、世界そのものすらも消滅させられるかもしれない。
　私はずっと、それに期待している。
　やがて、その絶対無によって作り出された空間は閉じて消滅する。
　そこには光が戻り、後には歪に歪んだ部屋の破壊だけが残った。その空間に、酸素や窒素がまた存在する事が赦された。
　私はコロンゾンの横顔を見る。
　彼は私にとっての太陽、強い陽光の日差しのように思えた。
　私の他人の能力を借りる事の出来る『シャドー・フレア』なら。
　もし、彼の能力を十二分に生かす事の出来る能力者の能力と掛け合わせて、発動させる事が出来れば。
　たとえ、青い悪魔だって殺す事が出来る。

†

「もう、だいぶ良くなったから、そろそろ出て行くよ」
　ブラッド・フォースはそう言った。
　レイアに付けられた傷は、薬草などを練り込んだ為、思いの他、治りが早かった。
　バキバキにへし折れた骨は、何とか全部、くっ付いたみたいだった。その傷を負わした本人は、平然とした顔で、この部屋で読書に耽っていた。
　それに。……。
「『クラシック・ホラー』が完全に使えなくなったんだろう？　外に出ていっていいのか？　君を狙ってくる奴らが沢山いる。それは絶対に避けるべきだ」
　そう、この次元の狭間の空間ならば、狙ってくる敵は誰もいない。
　此処は、オレが許可した者以外は決して入れはしないのだから。
「……君は優しいんだね。でも、忘れたのかい？　僕は殺人鬼なんだよ？　一体、僕の能力

のせいで、どれくらいの人間が死んだのだろう？　だからもし、僕を殺す人間が現れたとすれば、それは僕への裁きなんだろう」
　ブラッドは、淡々と言った。
　そして、何処か毅然としていた。
　なら。
「なら、何でお前だけが？　デス・ウィングは？　ウォーター・ハウスは？　奴らの方が先だ。お前が納得しても、オレが納得出来ない。腹が立つんだ」
　レイアはクスクスと笑った。
「やっぱり、甘名。貴方って最高に歪んでいるわよねぇ。本当は何とも思っていないんでしょう？　大切な人間じゃなければ、何人死んだって構わないんじゃないの？」
　彼女は悪意に満ちた顔をする。
　確かにそうだ。
　多分、オレは正義の側にはいない。
　それは確かだ。
　ブラッドは扉の方へと向かう。
「此処から出してくれないかな？」
　オレは溜め息を吐いた。
　そして、彼の腕を握り締める。
　すると、奇妙な事に気付いた。
　オレは彼の青い服の袖を捲る。
　すると。
　沢山の黒い模様。
　まるで、硝子の破片のように沢山の模様が浮かんでいる。
　それは、全身に巡っていた。
　……ハーデスの能力の後遺症だろうか。
　オレは舌打ちする。

†

　今は、只、闇だ。
　ああ、何かまた、どうしようもないくらいに孤独だ。
　孤独の中、その質量に押し潰されそうになる。
　コロンゾンと離れて、私は情報収集に向かう事にした。
　散らばった情報、その一つ一つを集めて、どうすればこの世界に勝利出来るかを考えている。
　そう、私は未だ、“自由”ではない。
　私には、“檻”が見えている。
　この世界を破壊したいと考えている。

　それは次元砂漠『アイス・エイジ』にいた頃から考えていた事だ。
　けれども、私の能力では、青い悪魔やデス・ウィングのような本当に世界を破壊しかねない程の威力なんて無い。
それが悔しくて仕方が無い。
　この世界は、多様な空間、次元によって成立っている。
　更に言えば、もしかしたら惑星の外側には、多様な惑星があり、多様な生物が住んでいるかもしれない。全宇宙、全次元、全ての世界を滅ぼす事など可能なのだろうか。
　けれども、私はこの世界を滅ぼしたいし、この世界に終焉を齎したい。
　聖書の黙示録のように。
　神話の神々の戦いのように。
　ずっと、そんなファンタジーに憧れを抱いて大人になった。
　いや、私は大人になりきれなかった子供だ。
　きっと、どれ程の知性や言語を習得しても、この世界において大人なるものとして存在出来ない。仮に、大人という存在が、この世界の許容という意味合いを含むものだとするのならば。
　……私は悪夢を見る。
　悪夢は踊るように、私の前に現れる。
　手足の無い、“炎猫”は夢の中で笑う。
　お前はまだ、辿り着けない。お前はまだ自由にはなれない、と。
　アイス・エイジは、世界中のゴミ捨て場だった。
　色々なものが廃棄された場所。
　手足の無い王であって、炎猫という女が、私の精神を今もなお蝕んでいる。
　私の過去を呪縛する、呪い、烙印そのものだ。
　……。
　炎猫は死んだ。
　何が起きたのか、全ての自体を理解したわけではないが、死んだ。
　あれほど、殺してやりたかったあの女が死んだ。
　青い悪魔の『クラシック・ホラー』によって、全身を貫かれて。
　その後で、何かを発動させて。
　その後、彼女は死んでいった。
　分かっているのは。
　この世界の外側の世界。
　その世界から、何かを召喚して彼女は死へと至ったのだ。
　重力に対する斥力。
　熱に対する冷気。
　光に対する闇。
　あるいは、善に対する悪があるように。
　存在に対する非存在がきっとあるように。

……。
もっとも神に近いものはいた。
このアジトの外に出て、そいつは私の前へと現れた。
今、私はそいつに会っていた。
そいつが私に会いに来たのか。
それとも、これはあくまでも何の韜晦も無い偶然に過ぎないのか。
そいつは、腰まで伸びる捩れたような髪型をした、黒いドレスを身に付けていた。
私は息を飲んだ。
彼女、フォルムは女性のそれなので、彼女と呼ぶか、彼女は、まるで私など存在していないかのように、そこを通り過ぎる。
私は彼女に問うた。
「お前は“何”？」
彼女は私を黙殺していた。
しつこく私は話し掛ける。
「そうか、お前は知る権利はあるかもね」
彼女は倣岸でもなく、無感動でもなく、まるで私自身の感情を投影したかのような声音で告げる。
「研究者が何かに至った。それから老人が。お前の主だったアイス・エイジの支配者が至ったものに至った。“混沌”なんだろうな。お前が私に会った、という事はきっとそれは必然なのだろう。私自身ですら私が何者なのか分からないが。仮に私は世界の凍結と考えている『リフリジレイター』と呼んでいる。リフリジレイターの存在は、たとえばドーンの一部の者達も知っている。世界を破壊する可能性、それをどうやら、停止させる為に、私は創造されたらしい。私自身ですらも、私が何者か分からない……」
「へえ、私には知る権利があると？」
「ああ、何故ならば、お前の同行者。それが“可能性”を持っているからだ、冷凍装置を召喚する可能性を」
彼女は意味の分からない事を言う。
しかし、それが指しているのは、他でも無いコロンゾンの事であるのは分かる。
私は訊ねた。
「メビウス・リング。お前は一体なんだ？」
「私はきっと対極だ。混沌に対する“秩序”。この世界の停止を止める秩序だ」
「そう、じゃあ何故、青い悪魔やデス・ウィングは止めない？」
「彼らは至らないからだ。至らない者達は、この世界を崩壊させる力ではない」
「たとえ、それは全人類を皆殺しに出来る程の力を持っている者達でも？　青い悪魔とデス・ウィングの二人は、少なくとも、それくらいの能力を持っているんじゃないの？」
「いや、多分、私がこの世界に降ろされたのは。人類の為じゃない、この世界の可能性の為だ。この世界の可能性として、その二人がたとえ人類を全て殺したとしても、私は動くつもりはない

。しかし、世界自体の可能性を否定する可能性が現れたときに、私は動かなければならない。そして、その可能性が現れるのは、おそらくは私と同じモノ、君達が、所謂、『神』と呼んでいるものだろう」
　神、と口にする時のイントネーションが。
　何処か、酷く自嘲的に聞こえた。
　馬鹿馬鹿しいとでも、言うかのように。
　神が自らが神である事を否定する。
「そうだね。少しだけ教えよう。君が私と会えたのは、君の同伴者に関係しているのかもしれない。君の同伴者はきっと、この世界の可能性を破壊出来る存在に為り得る可能性なのかもしれない。君が見込んだ通り、彼の能力は強力だ。でも、彼はきっと至らないだろう、混沌には。何故なら、彼は空虚なのだから」
「そう、コロンゾンか」
　私と同行している男。
　私の故郷であるアイス・エイジのような場所だった、荒廃した街。
　ろくでもない権力者に支配された街。
　その街を滅ぼして、私とコロンゾンは此処にいる。
　コロンゾンは無口な男だ。
「コロンゾン、というのか。……お前の上司であった炎猫がリフリジレイターと同化してしまったように。お前の大切な仲間であるコロンゾン、彼もまたその可能性を抱えている。その時は、私は彼を始末しなければならない。コロンゾン、彼の能力の行き着く先は、絶対無そのものだ」
「ふうん、リフリジレイターと同化する条件ってあるのか？　未だに、炎猫がどうやって、リフリジレイターと同化したのかが分からない」
　メビウス・リングは少し考えるように言った。
　それは、この世界にある言語では現せない、何かを言語化させる為なのだろうと。
「そうだな。それは“虚無”なんじゃないかと考えている。何も生み出さず、何もかもを破壊し、その破壊に何の意味も有さない。それに至る条件、可能性、それがリフリジレイターという冷凍装置、停止を召喚する。私はそれを倒す為に作られた。それはかつて、その脅威が現れた時に、世界の危機を救う為に私を“降ろした”、名も無い人形師によって、私は自分が何者か分からないが、それでいい。私の存在はドーンの皆が知っている。認識してくれれば、いい。私の事を」

†

「冥王。お前は一体、何を守りたかったんだ？」
　オレは虚空に訊ねた。
　何を守りたかったのか。
　何か、守りたかったのか。
　何処にも存在しない、異空間の部屋。

　そこで、ドアを開けて、暗い虚空に向かってオレは呟いていた。
　オレには、何も分からない。
　この先、どうするべきなのだろうか。
　隣には、おそらくはハーデスの能力の影響を受け、全身に黒い痣が生まれている青い悪魔がいる。やはり、この前の戦いの傷も完治してはおらず、傷が開いて為、包帯を新しくした。結局、オレは彼を引き止める事が出来たらしい。
そして、永劫の少女もいる。
　二人とも、オレとはきっと別の苦悩を抱えている。
　そうやって、この世界との帳尻が分からず生きて、存在している。
「私は一体、何なのだろうか？」
　レイアは壁にもたれながら呟く。
　彼女はブエルの件で、アサイラムの副署長チェラブの脳内に潜って、『神』の世界を覗き見たらしい。そして脱出してきた。
　脱出の方法は、エタン・ローズという能力を限界ギリギリまで使って、自分自身の新しい可能性に賭けてみたという。そうしたら、発動したのだと。
『神』を“視認”し、『神』に“視認”される行為が。
　すると、神はレイアを見失い、レイアは神の眼の裏側に回ったのだと。
「甘名。私はこの世界に本当に存在しているのか？　いや、そもそも存在とは何？　私は私という存在そのものが、貴方の能力の一部なの？　貴方の能力『フェンリル』の一部が、私であり、私の能力も全てが貴方の力の一端でしかないの？」
　感情は読み取れない。しかし。
　レイアの眼は真剣だった。
　オレは答えに窮する。
「どうなんだろうな、それはオレにも分からない」
　レイアはまるで、気楽な口調で言った。
「私には興味がある。もし、今言った事が正しければ、貴方が私の『神』という事になる。ならば、神を殺害してみるのはどうだろうかと。貴方の死と同時に私は消滅するのか？　それとも、そのまま私はこの世界に存在し続けるのか。純粋な好奇心もあって試してみたい」
「冗談だろ？　……」
　オレは苦笑した。
　レイアは、オレのイマジネーションによって書いていた小説が、実は遠い次元に存在している世界をそのまま映し出していて。世界中の、あらゆる創作物、あらゆる物語は、実は別世界の可能性、まだ見ぬ世界を召喚しているのだろうという結論に達している。
　集合無意識だか何だか知らないが、そういうものだろう、と割り切っている。レイアを此処に呼び寄せられるのは、オレとレイアは、まるで同じ性格の合わせ鏡の光と影のようなもので、男女を別にしたような存在だから。互いが互いの影のような存在として存在しているからこそ、召喚出来たのだと。

　少なくとも、オレはそういう理解の仕方をしている。
「なのだけれども、試してみたいと思った。この世界にいて、私は時折、本当に自分は貴方の創った創作物の人物でしかないのではないかと。貴方を殺したら、私の見ている夢は終わるの？」
「……少し、変だぞ」
　オレは呆れ顔で、いつものように二人分のアップル・ティーを淹れると、砂糖を注ぎ込む。
　レイアはそれを口にする。
「エタン・ローズの先にある能力は『亡びの光』と名付けた。いや、更にその先があるのかもしれない。神とは一体、何なのか」
　先、か。
　彼女は上昇意欲が強い。
　それは彼女は遠く、遠く、この世界の何物でもない更なる何かになりたいのだろう。
　たとえば、オレと出会ったように。
「甘名。私は、この世界に何か干渉するのは間違っているのかもしれないわね。私は、閉ざす者だ。何にも汚されず、何にも犯されず、誰も届かない。永遠の少女。処女。私は私のいた世界にいた時よりも、今の方がずっと生きている。たとえ、私は貴方の創作物でしかなかったとしても、それは仕方の無い事なんでしょうね」
　レイアの眼は、極めて理知的で、冷静だった。
　諦観しているわけでも、憎悪しているわけでも、動転しているわけでもない。いつもの彼女だ。いつもの、傲慢でナルシストで、ペシミストで、強い意志を持つ、レイアだ。
「つまり、私が言いたいのは、甘名。貴方の能力『フェンリル』は、空間を移動する能力は、本当の能力の一端、一欠片でしかないんじゃないかって。この際、私の存在が何なのかはもうどうでもいい。貴方はきっと、この世界を覆す、神に近い可能性を所有しているかもしれない」
「買い被り過ぎだ、あんまりオレを褒めても仕方無いぞ？」
　確かにね、と彼女は苦笑した。
「まあ、もし仮に私が貴方の創作物でしかなかったとしても、私は貴方すらも“飛び越えて”更なる神の裏側に回る存在を目指すように、能力を鍛錬させる事にするわ」
　レイアはアップル・ティーを飲み干して、笑った。
　オレもつられて、笑った。
「しかし、情けないわ。本来なら、私は『神』という言葉は嫌いなんだけれどもね」
「嫌いなのか？」
「人間が作り出した概念の中で、もっとも汚らわしいものの一つかもしれないんじゃないかしら？　神の使われ方にもよるけどね。人間は支配される事を自ら望んでいる」
「そういうものなのか？」
「私が神なんて言い出すのは。……ブエルの影響だわ。……奴はこの世界の外側の神を求めている。科学者ってのは何ていうか、科学を極めれば極める程、世界の整合性と不整合性に悩み、この世界を作り出した何かがいるのではないかと考えるらしい」
　ろくでもない頭脳の使い方ね、と彼女は言った。

「ところで、ひょっとすると、神が汚れているのではなく、人間自体が汚れているのかもしれないわね。だからこそ、世界に不幸はある。しかし、卵と鶏、どちらが先かのように。神が先なのか、人間が先なのか。あるいは、外部が先なのか。それとも内部が先なのか。世界が意思を回しているのか、意思が世界を回しているのか」
「汚れている、不幸は人間が勝手に決めるんだろう？　神じゃない」
「確かに、そうね」
　オレは嘆息する。
「分からないが、……見当違いだろうが。キリスト教をどう思う？　仏教は？」
「どうも思わない。でも、キリスト教の場合、自分は神に支配されたい。仏教は自分自身が神になる、なんじゃない？　前者の場合、他人に依存し。後者の場合、他人に依存されたい。物凄く、間違った解釈の仕方かもしれないけれども、私はどっちも余り興味が無いから。そういう認識の仕方しかしてないわ」
「なるほど、レイア、君にとっての神ってのは何だ？」
「この世界の外にいる者だ。それに、私にとってじゃない。確かに存在している、そいつは存在していて、私達を嘲笑っている」
　彼女は苦々しげに言った。
「だからこそ、私はこの世界に影響を及ぼしたくない」
　と、彼女は何か不快そうな顔をする。
「影響を及ぼしてしまった時点で、私は神に支配されていて。影響を及ぼしたという意思すらも、上位の世界からの神の意思であり、私は神の操り人形でしかなかったとしたら、それはとても屈辱的な事だと思うわ。そんなものの存在は見たくない」
　いわく、困難に対して運命を切り開く、という事すらも運命の内に入っているのではないかという疑問と思考。苦悩。
「人間は何かを神格化せずにはいられない。それが概念だったり、他人や生き物、時には自分自身だったり。認識している以上の絶対的な存在。大いなる存在。何かが在るんだという切望。神が意思を創ったのか、それとも意思が神を作ったのか。その意思の裏側に回り込む事が出来るのが、私の能力なのだとすれば。私はむしろ神の側で、……しかし、私は神を嫌っていて。だからこそ、私は孤独の繭に閉じ篭もる、それが私の存在そのものであり、意志そのものね」
　それぞれ、カルマ・タワー、自由に死を。の世界から抜け出してきた後。
　この世界にはもうどうしようもない程に、わけのわからないものが存在している。
　わけのわからない概念が存在している。
　それは一体、何なのか。
　そういった議論だった。
　……。

第二章　デス・パロール

　アサイラムを脱走した四名の逃亡者のうち、アイレスとカコ・デーモンの死亡が報道されていた。誰が殺したのか、アサイラム側はそれを気にしていたが、確認する術が無い。
　ボニヴァールに会いに、隠れ家である『楽園』に向かおうと考えていた。
　また会う約束はしていなかったが、何気なく向かった。
　結局、討伐隊のメンバーはデス・ウィングどころかアヌビスすらも倒せていない。
　カルマ・タワーから脱出して以来、ケルベロスは酷く落ち込んでいた。
　ケルベロスいわく、ルサールカが行方不明らしい。
　楽園に向かう前に、オレは何気なくドーンの指名手配リストを見ていた。
　ボニヴァールの名前を検索する。
　そして、オレは驚いた。
　彼は死亡、とされている。
　時期は、二週間ほど前だ。
　オレは楽園へと向かう事にした。
　苔生した谷へと向かう。
　隠れ家へと辿り着く。
　オレはまたもや、驚いた。
　隠れ家が、廃墟と化していた。
　地下室を刳り貫いた場所は、炎に包まれて、破壊されたのだろう。
　何者かが現れて、彼らを襲撃したのか。
「やっと現れたわね」
　背後から、よく通る、本人の性格がまるで分からない、笑っているのか、怒っているのか、悲しんでいるのか、あらゆる感情を混合させたような声が聞こえた。
「念の為に言っておくけれども、私がやったんじゃないわよ？」
　聞き覚えのある声。
　もう、半年くらい前になるのだろうか。
　そいつは、そこにいた。
「おそらくは、彼らのうちの一人が戻ってこないから、彼ら自身がこの隠れ家に火を放ったんじゃないかしら？」
　そいつは、汚い布地を身に纏っている。
　こんな場所で会ったのは偶然なのか。
　あるいは、必然なのか。
　会ってみて、漠然と戦う事になるかと思っていたが、どうもその気にはなれない。あちらの方も、そういった感じだった。
「久しぶりだな。フレイム・タン」
　オレは味気ない再会に、溜め息を吐く。

　アイス・エイジ以来だ。
　友人の大鎌使いの少女の能力を借りて、一時的に不死になり、生き延びた少女。
　他人の血液を奪う事によって、一時的に能力を借りる事の出来る能力者。
　彼女は以前よりも、邪悪さが増したような雰囲気を纏わせて、瓦礫の山の上に腰掛けていた。
　思えば、ドーン、アサイラムに関わったのは、元々は彼女を探すという目的の為。
　こうして再会してみると、特に何の感慨も生まれなかった。
「お前は、何をしている？」
「この世界を滅ぼそうという計画を進行している」
　淡々と彼女は答えた。
　オレは溜め息を吐いた。
「そんな奴にまた会ってな。そいつが隠れている場所を探しているんだ。今、お前と関わっても仕方が無い事を理解した。もうオレはお前には興味が無いんだよ」
「そう、私は貴方が来るのを此処で待っていたのだけれど」
　と、彼女は何かの襤褸切れを取り出す。
　どうやら、彼女と出会ったのは偶然ではなく必然らしい。
　彼女は布切れをオレに向かって、放り投げた。
　そこには、ドス黒く変色しているが、血液らしきもので書かれた地図と場所が記されていた。それから、フレイム・タンがどうやらオレの事を嗅ぎ回っている事も書かれていた。
　しかし、彼女はオレの言葉を待つ前に。
「いや、貴方自身には興味無いのよ」
　と、断言した。
　そして、問うた。
「青い悪魔は何処にいる？」
　冷え切った、鋭利な刃物のような声音で彼女は聞く。
　彼女は一体、何処まで知っているのか。
「お前は今、何をしているんだ？　って聞きたそうな顔ね」
　と、彼女はオレの心でも読んだかのように告げた。
「一つ一つ、この世界に散らばっている要素を収束しようと考えている。アサイラム、ウォーター・ハウス、青い悪魔、神と呼ばれるメビウス・リング。一体、彼らを継ぎ足していったら、何が現れるのか」
　こいつ、一体、何を考えているのだろうか。
「覚えている？　炎猫の事。彼女が呼び寄せようとした何か。メビウス・リングが提唱した、『リフリジレイター』という現象。能力者の限界突破によって出現する、この世界に混沌を呼び寄せる現象を」
　思い出す。
　不死の少女と青い悪魔と一緒に放り込まれた。
「ああ、覚えている。宇宙空間の中に放り込まれた。あるいは宇宙空間を模した世界か。まるで

夢の世界で、記憶が断片的だが、それでブラッド・フォースは両手をへし折られて、負傷して、何とかオレ達は生き延びたんだっけ」
「炎猫は何をしていた？　神と同化しようとしていたのか？」
　答えは無い。
『リフリジレイター』現象の全貌は分からない。
　ただ、この世界の外側にある何かを召喚した。
　それでしかない。
「処で、ハーデスは何の為に死んだ？　彼は何をしようとしていた？　アサイラムでは、今、一体、何が起こっているの？」
　オレは少し、驚く。
「その事まで嗅ぎまわっているのか？」
「アサイラムの場所を教えてくれない？」
　沈黙。
　先ほどの問い掛けとは違う、まるで牽制するかのような問い。
「青い悪魔とアサイラム、随分と一方的だな。それでオレは何の得をするんだ？」
　と考えて。
「アサイラムの場所くらいだったらいいぜ」
　とオレは投げやりに言った。
　ブラッド・フォースは決して売れない。
　しかし、オレはアサイラムはどうでもいい。そこで彼女がどういう行動に移すのか、正直、興味がある。
　そしておそらくは。
　彼女は既に、アサイラムの場所くらいは何らかの手段で突き止めている。
　そもそも、ドーンの情報を漁り続けていれば、アサイラムの場所など簡単に突き止める事が出来る。
　それよりも。
『例の部屋』の中で、今も休み続けているブラッドだけは、決して売れない。
　フレイム・タンは、にやにやとチェシャ猫のような顔で此方の表情を伺っている。
「いや、やっぱり止めておくわ。貴方から情報を引き出すのは」
「いいのか？」
　彼女は何かを考えているみたいだった。
　何かを突き止めたい。
　そう思っているのか。
「そうね、……ウォーター・ハウスは何者なの？」
「かつて、ドーン指名手配、Ｂランクの大量殺人犯だったらしいが、ハーデスに倒されて、バウンティ・ハンター側に付いていたが。いつもハーデスの寝首をかこうとしていたらしい。
　ふん、とフレイム・タンは鼻を鳴らす。

「そう、分かったわ。私には関係が無いな」
　それは意外な答えだった。
「これから、何処へ向かうんだ？」
「アサイラムへ行く。貴方には関係が無い事ですよ」

†

「あれがフレイム・タン？」
　いつの間にか、レイアはオレの隣にいた。
「ああ、そうそうちなみに」
　レイアはどうでもよさそうな声音で言った。
「誰かに見られていたわよ」
　オレは無視出来ないその発言に対して、彼女は何処吹く風といったところだった。
　彼女が危険性を見出していないのだろう。
　だから、オレはそんな彼女の態度を信用する事にした。
「二日後、ウォーター・ハウスのいる場所へと乗り込む」
「……それに何を求めるの？」
　レイアは素朴に問うた。
「きっと、オレも彼の気持ちが分かるかもしれないからだろうか」
「そう」
　レイアは興味が無さそうだった。
　永劫の少女は、何処かへと消えた。
　やはり、彼女は気紛れな性格だ。
　オレはウォーター・ハウスのいるであろうルートの地図を印刷したものを広げる。
　裏・新宿世界。苔生した谷からそう遠くない。
　苔生した谷から数十キロ地点の街にいた形跡もある。
　その街で彼は捨てられた古城を買ったらしい。
　その古城の方角は、山脈の中にあり、今は時期的に雪が降り積もっているだろう。
　今や彼はＡランク賞金首だ。
　更に、アサイラム襲撃犯人という事で様々なハンターが彼を探している。
　オレが彼を追わなくとも、いずれ誰かが彼の元へとすぐに辿り着くであろう、杜撰な隠れ方だ。
　オレは考える。
　ひょっとすると、彼は罠を張り巡らせているかもしれない。
　あるいは、自身の能力にそれほどまでに自信があるというのか。
　いずれにせよ、決着を付けなければならない。

†

　ルサールカからの襲撃に合って、皆、憔悴していた。
　イリスはショックで、ベッドの中に寝込んでしまった。
　精神的なショックだろう、とウォーター・ハウスは呟いた。
　モニカとホーリィも、血の気が失せた顔で無言のままだ。
「しかし、みんなよくやってくれた」
　ウォーターは労いの言葉を放つ。
「イリスさんは、よくならないんですか？」
　ホーリィは訊ねる。
「外傷は治した。しかし、精神的なショックだろうな。それは俺じゃ治せない」
　イリスは魘されながら、何度も、子供の事を口にしていた。
　それほどに、彼女にとって深い傷だったのだろう。
「ルサールカ。あれはおそらくまた襲ってくるぞ。何処かに隠れたみたいだが。今の処、倒す有効な手段が思い付かない。俺もこの辺りの地理を全て把握しているわけじゃないからな。でも、モニカが頑張ってくれたらしい」
　モニカはちょこん、と頷いた。
「すまんな、モニカ。お前自身は能力に無自覚だろうが、夜が開けたら、なるべく門の辺りにいてくれ、お前は門番なんだ。この城に敵を寄せ付けない為の」
　モニカはとても重要な役目を負っている。
　ウォーター・ハウスはそう告げた。
「敵、なんですね」
　ホーリィは言った。
「ああ、そうだ。今回のような時の為に、お前らを集めた。お前らを引き取ったのは、お前らが三人とも能力者の素質がある事に気付いたからだ。アサイラムを出た後、まず俺が考えた事だが、しばらくの間、誰かを殺す気も戦う気もおこらないと。……だから、俺の代わりに戦ってくれる奴らを集めた。お前らを選んだのは、まあ、ドーンに頼れる友人がいなかったからだが」
　ドーン、アサイラム、彼女達の知らない単語を出す。
　それでも、ホーリィは真剣に彼の話を聞いた。
「甘かったな。自分自身にだ。人間の心など持ち合わせていないと思っていたが。アサイラムの専属ハンターをしていて、自分が甘過ぎる性格になっていたらしい。昔のように、生きられない。今の俺は安息を求めている。闘争を求めていない。困ったものだ」
　彼は相変わらず、掴み所の無い不思議な表情をする。
　未だ、自分で一体、何を求めているのか分からないといったような。
　あるいは、だからこそ、優しくもなれるし、冷酷にもなれるのだろう、と。
　アンヴィバレントだ。
「私達、三名の力を全部、知っているんですか？」

　ホーリィは訊ねた。
　ウォーター・ハウスは首を横に振る。
「いや、分からん。只、俺は才能を見抜く直感のようなものがある、思い込みかもしれないが。でも、お前らの素質を見抜くのは簡単だった。人体を一目見て、そいつの病気が分かるように、俺は普通の人間と能力者の区別が付くんだ。お前らを一目見て、きっと俺の役に立ってくれるだろう、と直感で思った」
　それは、確かな信頼の声だった。
　ウォーター・ハウスは、三名を強く信頼しているみたいだった。
　しかし、その信頼は、最初の頃には無く、二ヶ月もの間、時間を重ねるうちに、培ってきたのだと、ホーリィは理解する。
「ホーリィ、イリスに付いていてくれ。俺は他人の痛みなんて分からない。だから、彼女の痛みも分からない。すまん、お前らが襲われたら、すぐ助けに来るから」
　そう言って、ウォーター・ハウスは部屋から出ていった。
　後には、三人だけが残った。
　イリスはまた、苦しそうに寝言を言った。
　ホーリィは本当に不安な顔をしている。
　敵の怖さ。
　あの敵の、圧倒的なまでの冷酷さが目に焼き付いている。
「あの、私、彼を見てきます」
　と、モニカはいつにも増して、不安そうな顔をしていた。
　彼女は席を立つと、ウォーターの向かった部屋へと行く。
　ウォーター・ハウスは、書斎で一人、窓の外を眺めていた。
　沈黙が、数分間ほど、続いた。
「あの二人には黙っていたが、実を言うと、あいつらはお前のオマケみたいなもんだ」
　そう断言する。
　しかし。
「……だったんだがな……今となっては、どうも違うらしい……」
　彼は複雑そうな顔をしていた。
　今と、出会った頃のズレ。
「モニカ、お前の力の名前を俺は名付けたのな」
　モニカは頷く。
　忘れてしまったが、何だかの神話に登場する怪物の名前。
「お前の能力は『ヨルムンガンド』と言う。一方的に付けさせて貰ったが、そうとしか名付けられないんだよ。一目お前を見た時、お前は無自覚のうちに能力を使っていた。お前の周囲では、まるで世界を跨ぐトグロを巻いた蛇のようなものが見えるんだ。モニカ、お前は怖ろしいくらいに強い。そしてそれはお前自身が気付いていない。しかし、比較が出来ないんだ。お前が一体、どのくらい強いのか。まるで分からない、未知数なんだ」

　まるでとても信頼しているような。
　あるいは、畏れているかのような。
　そんなアンバランスな、不可思議な顔で、彼は彼女を見つめていた。
「何故、お前に無理して男装を勧めたか分かるか？」
　ウォーター・ハウスは言った。
「男のな。攻撃性、持った方がいいぞ。お前は何ていうか、弱いんだ。その弱さが、お前自身を傷付けるし、取り返しの付かない破壊を齎す可能性もある。だから、なあ」
　彼は少し口の中で、もごもごとする。
「まあ、何だ。すまんな、……俺の人形にしてしまって」
　彼女は困惑した顔になる。
　彼は謝罪しているのだろうか？
「……俺は、久しく、人との接し方を忘れていたのかもしれん……いや、元々、分からなかったのかもな。すまんな」
　すまんな、とまた口にする。
　何を謝ればいいのか。
　何故、謝ればいいのか。
　彼には分からないからこそ、それ自体を謝っているかのような。
「モニカ、教えてくれ、お前の事。それからイリスやホーリィとも、ちゃんと話さなければな……」
　窓の外を見ると、もうじき、夜が明ける処だった。

†

　ボニヴァールからの情報によれば、ウォーター・ハウスの居城は、苔生した谷から数千キロ程、北東に行った場所にあった。そこは人が余り近付かない山脈ばかりが連なっている。
　冬には、余りの寒さに、息も凍る程だと言う。
　大量のスノー・モンスターに囲まれた場所だ。
　大地の上に雪が降り積もり、マイナス１０，２０度くらいには達しているのだろうか。
　幸い、晴れており、空からは太陽が姿を現している。
　レイアだけは相変わらず、平然と、いつもの服装で寒空の下を歩いていた。
　オレはいつものゴシック・ロリィタの服装の上から、コートを羽織っている。
　地図を見ながら、瞬間移動の能力で一番、早く付けるルートを探す。
　早ければ、三十分ほどで辿り着けるだろう。
　それにしても、ウォーター・ハウスはこんな辺鄙な場所に住む事に決めて、頭がおかしいんじゃないかと思った。
「甘名、やっぱり尾行されているわ」
　レイアは言う。

瞬間移動で突き放すか？　とオレは問うた。
それがいいわ、とレイアが言うと、携帯電話が振動する。
オレは電話に出る。
何処かで聞き覚えのある声だった。
「フェンリル、貴方。ウォーター・ハウスの居場所を突き止めたのよね？」
オレは思い出す。
確か、ドーン専用のバーにて出会った女だ。
確か、能力は『カクテル・パーティー』。
頭に羊の角を生やした女。
「尾行者はお前か？」
オレは訊ねた。
声は沈黙する。
そして、十数秒後、電話越しの声は答えた。
「フレイム・タンとかいう奴のやり取りも聞いていたわよ」
レイアは不機嫌そうな顔をする。
「意味が無いし、何か考えているかもしれないから。その電話越しの女とは関わらない方がいいわ」
レイアはオレに、タロットの大アルカナの不安を暗示する月のカードを、ぺらぺらと見せる。
オレも正直、あんまりいい印象を抱いていない。
今、現在いる位置は丘陵になっている。
所々に崖が並んでおり、坂道になっている。
道らしき道も無い。
まともに歩いていけば、敵の古城に辿り着く前に遭難は確実だ。
さて、携帯電話の通信者は、一体、何処から電話を掛けているのだろうか？
すぐ、近くの場所にいるのか。
「お前は今、何処にいる？」
素朴な疑問を訊ねた。
「そうね、貴方達と合流したいんだけれども」
通話相手はけらけらと楽しそうな声音を漏らす。
「今、何処にいる？　オレ達はこれからウォーター・ハウスを倒しに行くんだが、確か、お前は弟の仇で奴を倒したいんだろう？　態度次第によっては仲間に加えてもいい」
直感的に危ない相手だと考えている女。
しかし、相手の態度次第では有力な味方に出来るかもしれない。
正直、オレとレイアの二人でウォーター・ハウスを倒せるかどうか。
オレは以前、戦ってあのザマだったし。レイアに至っても、彼女の能力の性質上、ウォーター・ハウスを倒せるかどうか。
レイアの肉体は、幽霊に近く。本来はこの世界に存在しない物質で構成されているのか。この

寒冷地でも平気なように。普通の人間の縛りが無い。
　酸素を吸う必要も無い為、更に重力にも影響を受けない為か、真空、深海でも自由に動ける。更に、火の海や溶岩の中でも自由に活動出来る。
　おそらくは宇宙空間でも生存可能かもしれないと本人は言っている。
　勿論、自然界に属する細菌や微生物、ウイルスも効果が無い。
　放射線や放射能の類も影響を受けない。
　問題は。
　レイアの場合、能力者の能力など、明確な敵意、害意、殺意などの意志を持った攻撃の影響下は受ける。能力者の能力に限らず、意志を介在させたもの、剣や拳銃、爆弾などによってもダメージは受ける。レイアを毒殺しようとして、毒を食事に盛った場合、その影響も受けてしまう為、案外、脆い部分も多々ある。
　だから、本来はウイルスなど効かないレイアでも、ウォーター・ハウスの作り出す殺人ウイルスの影響下は受けるだろう。
　更にウォーター・ハウスの殺人ウイルスの効果は無差別攻撃だ。
　無差別攻撃である以上、彼女の敵の認識外につねに存在し続ける『リュミエール』が通じなくなる上に、ブラッドや水月相手に善戦した速度や攻撃力を相手と同程度まで跳ね上げる『エクスターズ・ワールド』もウイルス相手には通じないだろうという結論だ。
　だから、どう倒そうか二人で悩んでいるというのもある。
　もちろん、対処法はいくつか考えてきたし、レイアは能力の応用で対ウイルス攻撃の手段も思い付いているらしいが、いかせん、心許無い。
　実を言うと、支援してくれる味方でもいてくれないか、とも話したりもしたのだ。
「さて、処でフェンリル。ウォーター・ハウスの前に何名か能力者がいる事を知っているかしら？」
　カクテル・パーティーの能力者は言う。
「……何？」
「既に、少しずつ情報が出回っているのだけれど。先日、ある雑貨屋で彼を目撃した者達が何名かいるわ。他の能力者がたまたま彼を見つけて襲撃したのよね。その時に、彼は何名かの人間と同行しており、うち確実に一人は能力で彼を支援していた。どうやら、冷気を操るみたいなんだけれども。詳細は不明。さて、あんた達、どうせウォーター・ハウス一人にも苦戦しているんでしょう？　でも、その前にいる奴ら、何名か知らないけれども、能力者がいるのなら、私も同行させておいた方がいいんじゃないの？」
　レイアが携帯電話をひったくる。
「貴方が裏切らない、という保証は？」
「私の弟は彼のせいで死んだ」
「本当の弟なの？　その事実をどう信用させるわけ？」
「流石に、その判断までは貴方達に任せるわ」
　レイアは考えを巡らせているようだった。

　数秒の沈黙。
「分かったわ。こういう条件ならどう？　ウォーター・ハウスに賭けられている賞金は貴方に全額渡す。もし仮に奴を倒した場合、裏切る可能性があるとすれば賞金。私達はその事で裏切るつもりは無い」
「いいの？」
「ええ、以前、フリーク・リーチっていう奴を倒して賞金を貰ったんだけれども。やっぱり金に執着心は無いわ。なら、危険な要素をなるべく排除するに越した事は無い」
　ああ、あの怪物を倒したのは、貴方、と相手は相槌を打った。
　レイアはこの電話の相手に対して、かなり慎重だった。
　青い悪魔ブラッド・フォースとデス・ウィング水月を前にして、まるでひるみもしなかった彼女。
　レイアが配慮しているのは、おそらくはオレの命の危険だろう。
　彼女にとって、オレが死ねば、この世界で自由に動けなくなる筈。きっとこの世界には存在出来なくなるかもしれない。
　そういったデメリットを考えてだろうか。
　……、それとも本当に純粋にオレの生命の危険を気にしているのか。
　オレはレイアから携帯をひったくる。
「分かった、同行を許そう。えと、君の名前は何だったかな？」
「キマイラ・ヘッドよ。忘れるなんて本当に失礼ね」
　此処から、２キロ地点の森の中から電話を掛けているらしい。
　オレとレイアは瞬間移動でそこに向かった。
　針葉樹林の中だ。
　焚き火の火が燃えている。
　串刺しにされた野ウサギなどが火の周りに並んでいた。
　まるで、サタニズムの信仰者のような柄をした足元まであるローブを身に付けた女。
　彼女は豪快に、焼いた野ウサギに焼肉のタレをぶち撒けて、焼き鳥のようにして食べていた。肉の焦げる香ばしい匂い。
「一本貰う？　美味しいわよ？」
「いや、いい」
　オレとレイアは首を横に振った。
　キマイラ・ヘッドはあっという間に、串に刺さった肉を胃に収めていく。
　食後に、彼女はワインとビールを取り出して、その両方を同じコップに注いでいく。
　それは、混ざる事なく物理法則を無視して地層のように不思議な二色の液体となって、コップの中に注がれていた。
「飲む？　絶品よ」
　オレとレイアはまたも首を横に振った。
　彼女はその奇妙な飲み物を口の中に一気に注いでいく。

　そして、とても美味しそうに飲み干して、残った刺さっている野ウサギの肉を、また口の中へと放り込んだ。べちゃべちゃと下品な音を立てて食べている。
　結局、彼女はワイン二瓶と、ビール七缶を飲んで、二羽の野ウワギを丸ごと食べたのだった。
「さて、これから一緒にウォーター・ハウスを倒しに行きましょうか」
　オレとレイアは目を丸くして、しばらく返す言葉を無くしていた。

†

　私は強奪したヘリコプターを弄りながら、記された地図を眺める。
　ヘリの中には、頭を吹っ飛ばしてやった運転手二人の死体が転がっている。
　私は彼らから血液を奪うと、彼らの運転技能を一時的に“借りた”。
　私は目標の場所まで数時間掛けて向かう。
　しばらく飛んでいると、滝壺のような場所が現れて、そこをヘリで降下していく。
　更にしばらく飛ぶと、島が現れた。
　ネオ・アーカム・アサイラム、能力者専門収容所。
　ヘリは無事、着地する。
　私は大地に着地する。
　すると。
　何名かの警備員が此方へと向かってきた。
　私は面倒臭くて、彼らの頭を吹き飛ばす。
　一応、布着れで顔を隠しているが、私の素性をバラすようなヘマはしない。私の位置付けは、Ｄランクという事になっている。ランクが上がる事はそのまま面倒臭い事態に遭遇する事と直結している。私の実力はＢランクともＡランクとも呼ばれていたが、私としてはＤランクのままの方が都合がいい。Ｃ程度の実力しかないのに、虚栄心からかＡランクになりたがる馬鹿が多い。私はそんな連中の逆なんだろう。
　私は顔に、暗視ゴーグルを嵌める。これは有能な工作員の血を借りて作った奴だ。
　暗視ゴーグルといっても、暗闇の中で視覚を保てるだけではなく、たとえば、張り巡らされたトラップなども探知する事が出来る。
　暗視ゴーグルが発見したのは、幾つも物陰に隠された監視カメラだった。
　私は次々とカメラを拳銃で撃ち落していく。
　そして、アサイラムの門の前まで辿り着いた。
　数メートルはある門だ。
　私は足に装着している『ジェット・ブーツ』のスイッチを入れる。
　アイス・エイジを出てから、独自に改良したものだ。
　靴の裏から噴射音がする。
　私は大地を勢いよく蹴った。
　そして、数メートルの距離を軽々とジャンプして悠然と着地する。

　そして、次々と中庭にある監視カメラに銃弾を撃ち込んでいく。
　此処の署長に会いに行って、此処に封印されている能力者達の能力を聞き出して、その中から青い悪魔やメビウス・リングを倒す可能性のある能力を“借りる”のが私の計画だ。
　そして、あわよくば、青い悪魔の人間を皆殺しに出来る程の威力を持った『クラシック・ホラー』を借りる事が出来れば、私は無敵になれる。
　その前には、レベルアップが必要だった。
　ロールプレイングゲームではボスキャラを倒す為には経験地を稼がなければならない。そう、まずは、目標の敵を倒す為には、その敵にとって相性の悪い能力を持つ能力者を倒していく。それが私の戦い方だ。
「何をしているんだ？　お前は」
　凛とした声だった。
　身長の高い、精悍な顔をした短髪の男。
「俺の名前はケルベロスという。侵入者、お前は一体、何をしている？」
　彼は着ていたコートを脱ぎ捨てる。
　黒い肌着の上から、綺麗な形の筋肉が隆起していた。
　パワー・ファイター・タイプだろう。
「わざわざアサイラムに収容されにやってきたのか？」
「そうね」
　私は拳銃を変える。
　服の中から、秘密兵器を取り出した。
　鈍く、金色の光沢を纏う黒いデザート・イーグルだ。
　名前は熱帯に住まう怪物コオロギの名前を取って、『リオック』と名付けている。
　アイス・エイジにいた頃、炎猫の頭に撃ち込んでやろうと、密かに作り上げていた最強の拳銃だ。威力が強過ぎるので、今は少しストッパーを付けている。
「デス・ウィングを知っています？」
　ケルベロスと名乗った男は沈黙する。
「確か、デス・ウィングという能力者が、このアサイラムを自力で脱出した事があった筈。そいつはあの青い悪魔と戦って生き残った経歴があるとか。今は裏・原宿から行ける場所にひっそりと店を構えているらしいですね、私はまだお会いした事はありませんが」
「……それを聞いてどうする？　どうせバレるだろうから教えるが。今はハーデスとチェラブが死亡したのと、ウォーター・ハウスという男が職員を大量に殺してしまった為、此処の警備は手薄だ。お前のような侵入者を許してしまったのは大失態だ。だから、俺はお前を必ず始末しなければならない」
　言うなり、ケルベロスは私へ向かって突進してきた。
　即座に私はジェット・ブーツのスイッチを入れて、後方へと飛ぶ。
「貴方を始末しないとアサイラムに入れないんですね？　本当に面倒臭い」
「駆け引きは苦手だから、これも教えるが。俺がいなければもう後が無いんだよ。ミューズまで

が死亡し、ルサールカは何処かへと行ってしまった。師匠はこういう事態を想定していたのか？
　正直、俺は今、苛立っている」
　彼は腰に下げている鉄棒を取り出す。
　トンファーだ。
　そのトンファーが変形していき、ナイフの形状へと変わる。
「さて、お前を始末しなければならない」
　私は遠慮無く、リオックの弾丸をケルベロスの頭にぶち込んだ。
　辺り一面が火の海に変わる。
　銃弾というよりも察そう、小型ミサイルとでも形容した方がいい威力。
　爆発した瞬間に、更に火柱が舞い上がった。
　炎の中で。
　ケルベロスは平然と立っていた。
　彼の肉体は、燃え盛る炎の中でも平気みたいだった。
　どうやら彼は。
　肉体が常人よりも強化されているタイプの能力者だ。
　正攻法では勝てないかもしれない。
　それに。
　彼はまがりなりにも、アサイラムを死守する敵だ。
　私は彼の能力をまだ見てない。
　先ほど、棒状のトンファーが刃状へと変わったが、それは彼の能力なのか、それとも、そういう武器なのか。
　とにかく、彼の能力を確かめなければならない。
　気付くと。
　ケルベロスの刃物と化したトンファーが私の目前へと迫っていた。私は紙一重でそれを避ける。もう少しで、私の首は胴体から離れる所だった、そのまま、彼は全身を回転させて、私に回し蹴りを極めようとする。私は焦りながら、背後へと跳んだ。それも紙一重。
　接近戦に持ち込まれたらヤバイ。
　彼はどうやら、生粋のパワー・ファイターのようだ。
　あの両足も、まともにくらったら、骨の一本や二本はへし折られそうな威力だ。
　仕方ない。
　私は彼の血を奪う事に決めた。
　ケルベロスは、地面にトンファーを突き立てる。
　私は嫌な予感がして、数メートル程、距離を広げた。
　私の立っていた地面が膨れ上がり、中から大量の刃物が生え出てくる。
　まるで、地獄の針の山のような様相だ。
　こいつ。
　強い。

動きで分かる。
隙が余り見当たらない。かなり実戦経験が豊富なのだろう。
一撃で勝負を決める攻撃ばかり向けてくる。
この手の敵は、力押しで挑んでくるのだが、それにしても動きに無駄が無い。
彼は地面へと刺さり変形した右手のトンファーの握る部分を、右足で押さえる。すると、地面から刃物が次々と生え出してくる。
私はそれには当たらない。
何とか、紙一重でかわしている。
突然。
彼が右の拳を前に突き出したと思うと。
彼の右の拳が伸びたように見えて、私の元へと向かってきた。
私は穿いているジェット・ブーツの出力を、踵で引き上げて、更に後方へと飛んだ。
ケルベロスは、どうやら右手から刃物を出して私の方へと長く伸ばしたみたいだった。
足元には、相変わらず、針の山のように刃が次々と生え出ている。
どんどん、追い詰められている。
防戦一方になっている。
覚悟を決めて突進するという事は逆に拙い。敵はおそらく、私を一撃で葬れる力を持っているのだろう。そもそも、あの攻撃が直接人体に命中すればどうなる？　迂闊には近付けない。
アサイラムを覆う、鉄柵のある場所へと導かれていく。
彼は思い切ったように突撃してきた。
ケルベロスの右手が、鉄柵に触れる。
すると、鉄柵はまるで生き物のように蠢き出すと、変形していき、蛇や蛸のように私へと襲い掛かる。私は思わず、服の中に仕込んでいる爆薬を撒き散らす。
爆撃、更に、怯む事なくケルベロスは私に突撃してくる。
私はポケットから、大量の照明弾を転がしていく。
大量の閃光が一面に飛び散った。
仕方が無い。
私はアサイラムの中へと先に侵入する事に決めた。
この敵は正直、強過ぎる。
まともにやりあっては勝ち目が無い。
ケルベロスといったか。
確かに、地獄の番犬のように忠実で、やっかいだ。
しかも、私は神話のオルフェウスでも神曲のダンテでもない。
そして。
私は正直、頭を使って戦うのは得意ではない。
権謀術数で他人を誑かすのは得意だ。しかし、戦闘中の私はもっぱらいつも力押しだ。
手持ちの照明弾を次々と撒き散らしていく。

　何とかして逃れなければならない。

†

「何か変ね」
　レイアは訝しげな顔をしていた。
　彼女が変というなら、変なのだろう。
　オレは彼女の直観を信用している。何故ならば、レイアはタロット・カードを使って、分かりやすい媒介を使うが、基本的に彼女の占いは能力の一部であり、エタン・ローズの能力は未来暗示の予知や見えない危険察知も出来るからだ。
　今回の場合は、どうやら何か、現状に違和感を覚えたらしい。
　オレ達は、高い峰の頂にいる。近くには数百メートルは深い谷が広がっていた。
　大体、３キロほど先の山の頂だろうか。
　森に囲まれながら、一つの古城が佇んでいた。
　もう建てられて、何百年と立つのだろうか。
　昔のヨーロッパの城に酷似している。
　此処から、レイアと、途中で同行する事になったキマイラ・ヘッドという女を連れて、すぐにでも城の前に瞬間移動する事が出来るのだが、レイアはそれを静止する。
　レイアは双眼鏡から目を離すと、何かを考え込み始めた。
「変って何がだ？」
　オレは訊ねた。
「何が変っていうか。分からないけれども、とにかく何かが変なのよ。迂闊に近寄らない方がいい」
　レイアは断言する。
　状況判断能力なら、オレよりも彼女の方が上なので、オレは彼女の意見に従う他ない。
　レイアはキマイラに訊ねた。
「ねえ、何か遠距離の攻撃方法って持っていない？」
「ないわ」
　キマイラは何処か愉快そうに言う。
　何がそんなに楽しいのか。
　いや、彼女は何かいつも愉快そうだった。
「甘名。何か投擲するものとか持っていない？　ナイフとか」
　言われて、オレは数本のスローイング・ナイフを取り出す。
「こんなものでいいか？」
　レイアは少し考えているようだった。
　そして、おもむろに、近くの木々から小枝を折る。
「やっぱり、露骨に武器だと警戒されるから、これを」

　レイアは古城のある方角へと指先を向けた。
　オレに投げろ、と指示しているのだ。
　オレは古城へ向かって、レイアから渡された小枝を投擲する。
　小枝は一度、瞬間移動させて飛距離を延ばし、数百メートル地点を飛ぶ。そして、そのまま落下していく。
　レイアは何かを考え込んでいるようだった。
「もう少し、近付いてから様子を見た方がいいんじゃない？」
　キマイラは言った。
　彼女の情報だと、ウォーター・ハウスは何名かの能力者と共にいて、その中の一人は冷気使いらしい。という事は他の能力者の能力だろうか。
　レイアは双眼鏡を取ると、今度は森の中を見ていた。
「狐がいるわ」
「狐？」
「野生動物……、ねえ、何か変だと思わない？」
　そう言って、彼女はオレに双眼鏡を渡す。
　レイアが見ていた方向を見る。
　確かに、一匹の狐がいた。
　狐は右往左往しながら、道を駆けている。
　そして、森の中を右に、左に、移動し始める。
　特に、何かに追われている、という様子もなく、獲物を追っているという様子も無い。何かの習性なのだろうか？
　レイアは今度は、狐のいる方角に向かって小枝を勢いよく投擲する。
　オレとキマイラは驚く。
　小枝が一瞬、森の、何も無い場所に衝突したかと思うと、弾け飛んで落ちていった。
「風とかじゃない。分かったわ、見えない壁がある」
　レイアは言った。
　オレは言われて、空間把握の能力を使う。
　建造物のような場所ならばともかく、このような広い場所で使える距離は、せいぜい二百メートルといった所だ。一応、狐のいた辺りの地点には何とか届く。
　しかし、オレの空間把握の能力では、壁の存在を見抜けない。
「駄目だ。効果が能力者の能力であった場合、オレの空間把握は役に立たない」
「そう。処で疑問なんだけれども。どっちなのかしら？　透明な壁があるのか。それとも、光を屈折させて、見える景色を変えているだけか。……後者の場合、古城自体が、今、見えている場所に本当にあるのかどうか」
「どちらにせよ、迂闊に飛び込んだら、敵のいい的にされるな」
　オレは荷物の中から方位磁石を取り出す。
　先ほどまでは正確に北の位置を指していた方位磁石の針はくるくる、と行き場を失って回転し

続けている。
　オレは二人に言った。
「オレが先に偵察に行ってくる。待っていてくれないか？　一時間経って、戻ってこなかったら、二人の判断に任せる」
　彼女達は首を縦に振った。
　オレは崖を飛び降りる。
　何回も落下中に瞬間移動して、落下の衝撃も弾き飛ばしながら、無事、地面へと着陸する。
　そして、すぐに困った事態に遭遇した。
　裏・原宿やカルマ・タワーのように、空間把握が使えない。
　つまり、此処は能力者のテリトリーの内部か異空間の中、という事になる。
　オレは少しだけ雪に覆われた森の中を進む事にした。
　十数メートル先に、一際、大きな樹木があったので、取り敢えずその場所まで瞬間移動を試みてみる。
　樹木に辿り着く前に、何かに弾かれた。
　気付くと、目標の場所から数メートル離れた場所へと移動している。
　今度は、瞬間移動せずに歩いて進んでいく。
　十分ほど歩いただろうか。
　オレは絶句した。
　一際、大きな樹木と、降り立った崖の辺りをまるで移動していない。
　最初の地点へと戻ってきている。
　オレは迷わなかった。
　即座に崖をよじ登る。
　崖の壁面に、二本の剣を差し込んでいって、それを足場にしてよじ登っていく。一本目を足場にして二本目を高い場所へと突き刺す、そして二本目の剣へ飛び移る瞬間に、一本目の剣を手の中に瞬間移動させる。これを繰り返して、崖を登るつもりでいた。
　大体、五十メートルほど登った地点で、何かに弾かれた。
　敵こそいなかったが、何かに攻撃されたかのように、肉体が崖を落下していく。
　ヤバイ。
　その時、右手を掴むものがいた。
　オレの右手には、大量の棘が巻き付いている。
　そして、オレをそのまま上へと引っ張り上げていく。
　レイアだった。
　彼女は崖の途中で、エタン・ローズの棘を絡ませて、空中に静止するように浮かんでいた。エタン・ローズの光弾を何発も周囲に撒き散らしながら、そのままオレを持ち上げて、元いた崖の頂上まで引き上げていく。
「レイア、また迷路だぞ」
　オレは言った。

「また迷路なの？」
　カルマ・タワーと自由に死を。を抜け出してきたオレ達は、正直、うんざりした顔を見合わせる。
　崖の頂上では、キマイラ・ヘッドが何かを作成していた。
　大量の木の葉と、雪をかき集めている。
　更に、その中に泥も混ぜ合わせている。
　彼女の周りには、風が集まってきている。
　彼女は風を収束させていき、色々なものを混ぜ合わせた絨毯へと擦り付けていく。
「何やってるんだ？」
　オレは訊ねた。
「空飛ぶ絨毯を作っているの」
　応用が効く能力で羨ましい限りよね、とレイアは言った。
　キマイラが風や木の葉を集めて作った絨毯は、オレ達三人を充分に持ち上げて、空に浮かんだ。キマイラは指先で気流をかき混ぜて操作しながら、目的の場所へと絨毯を進めていた。
　絨毯の上は不可思議な座り心地をしていた。まるで、空気、風圧そのものの上に乗っかっているような感触だ。泥や木の葉の感触が足首や腰に当たると、軽いマッサージを受けているような感覚になる。そう、乗り心地はよかった。
　古城まで絨毯は飛んでいく。
　大体、二百メートルほどまで近付いた頃だろうか。
　キマイラ・ヘッドは、舌打ちをした。
　オレとレイアも気付く。
　キマイラは、主むろに懐から煙草を取り出すと、火を付けて吸い始める。
　煙はくるくると、回転するように下へと流れていく。
「見て、この辺り、何かおかしい。何だか知らないけれど煙が在り得ない方向へ流れていっている」
「ああ。空中じゃさっきまで空間把握が使えたが、今は使えない」
「それよりも少し、寒いわ」
　寒い、とレイアが言った。
　レイアは気温なんて感じない。
　つまり、ブエルのノース・デザートのように、意図的な攻撃として気温を操作していなければ、レイアは温度を感じない。
　という事は。
　レイアは人差し指を立てて、周囲の風の流れを見ていた。
「温度を操る能力者の可能性が高い」
　と口にしてみて、レイアは自身の発した言葉に疑問を抱いているかのようだった。
　キマイラも、そんな彼女の顔を見て、察したみたいだった。
「甘名、敵は一体、何をしていると思う？」

　オレも同感だった。
　全員の意見はこうだ。
　直感で言っている、この敵はかなりヤバイ、と。
　そして何よりも、得体が知れなさ過ぎる。
「まず、冷たいとかって現象を引き起こすってどういう事なのかよね」
　とキマイラは言った。
「この敵の能力は大気か……？」
　オレはもう、敵に気付かれているだろうと考えて、迷わず懐からナイフを取り出して放り投げた。すると、ナイフは渦を巻くように落ちていくと、途端、空中で停止した。
　オレは空中に停止したナイフを見て気が付いた。
　オレ達の乗っている絨毯は城へ向かって、飛んでいない、まるで螺旋を描くように、下へ下へと回りながら、降下していっている。
　しかも、城からも元いた崖からも間逆の方向へと向かっていっている。
「ねえ、キマイラ、この絨毯って止まらないの？」
「実はさっきから止めようとしているのよ。でも止められない、どうやら既に私達は手遅れかもしれないわね」
　少しずつ、寒さが増していっている。
　冷気に飲み込まれていく感覚。
　オレは先ほど、停止していたナイフからの移動ポイントを見ていた。
　絨毯は回転して、渦潮に飲まれたようになっている。
　オレは次々とそこら中にナイフを投げ付けた。
　瞬間移動させたナイフだ。
　数メートル先、十数メートル先と、飛ばす距離を変えて投げ付ける。
　それらのナイフは回転しながら、色々な場所へと向かっていく。
　そして、何本かのナイフは途中で空中に停止した。
「まるで、蛇のようだ。それもとぐろを巻いた大きな蛇」
　印象はそれだった。何というか、巨大な蛇に巻き付かれているかのような。
「そして、おそらく最終的に私達がどうなっていくかも分かったわ」
　レイアは言った。
　土と風と葉っぱで作った絨毯には、霜が掛かり始めている。
　そして、オレ達の全身も、吹雪に撃たれたように、強い冷気の風に覆われ始めた。
「あのナイフはおそらく、凍り付いて、空中に停止しているんだ」
　凍り付いている上に、周囲の凍った空間は余りにも怖ろしいくらいに透明だ。
「水月は……デス・ウィングは、確か大気を操る能力なのよね？　風で攻撃するのは、能力の一部でしかない」
　レイアは呟いた。
　キマイラは頷く。

「そうね。あいつの風の弾丸や、風の刃なんて脅威でも何でもないわ。たとえ、ビルを一瞬で幾つも細切れに出来ようが、そんなものは大した脅威じゃない。本当にヤバイのは、奴の肉体そのものが粒子になっても再生出来る程の不死性にある。あいつ、何でも、核爆弾を幾ら打ち込んでも倒せなかったらしいわね。……この敵がヤバイのは、凍らせる事にあるんじゃなくて、能力の正体がよく分からない事にあるわ」
　こんな攻撃をしてくる奴は始めてみたわ、とキマイラは唇を引き攣らせて言った。
「どうする？」
　レイアは訊ねた。
　瞬間移動は危険だ。
　移動した場所が凍り付いている可能性がある。
　オレの瞬間移動は、せいぜい十数メートルしか飛べない。
「レイア、君がどうにか出来ないのか？」
「難しいわね。そもそも、私自身が敵を『視認』しなければどうにもならない。今回の敵は一体、何処にいるのか、どうやって攻撃しているのかも分からない。甘名、このままだと死ぬわよ」
　いつになく、深刻そうな顔をしていた。
　レイアは周辺を窺っている。
　敵の姿を探しているのだ。
　この攻撃で、エタン・ローズのエクスターズ・ワールドとリュミエールが、どのような効果を発揮するかは分からない。しかし、両者を発動させてしまえば、何かの突破口になるかもしれない。
「修羅蓮華で分解してみる？　つまり、私が拳で殴ればいい。しかし問題は、殴った先から修羅蓮華の黒蓮の炎を纏っていない、肘から先は確実に凍り続けるだろうという事。甘名、何というか、こういう事態って、“相性が悪い”っていうのかしら？」
　オレとレイアの能力ではどうにもならない。
　というよりも。
　まるで、オレ達に対応した能力者を探してきたと考えるべきか。
　ウォーター・ハウスはレイアの事は知らなかった筈。しかし、おそらくはオレがどうしようが、とにかく、空間移動に対する対抗手段を考えた上で、この敵は攻撃しているとしか思えない。
　……空間？
　ひょっとして。
「レイア。ひょっとして」
　オレはある事を閃いた。
「ひょっとすると、この敵は……。凍らせる事は、その過程にしか過ぎないんじゃないのか？あるいは副次的な効果でしかないのかもしれない。凍らせるという事、それは、現象の一部でしかなくて、この敵は空間を操っているのか……？」
　思い付きで言った、オレの言葉に、レイアはぴんと来たものがあったみたいだった。
「もし、ウォーター・ハウスが貴方を意識しているとするなら、そう考えた方が自然ね」

ならば。
空間をどうすれば、今のような現象が起きるのだろうか？
オレは空間を移動する時、何をしている？
次元と次元を飛び越えている。
世界と世界を渡り歩いている、まるで紙を折り曲げるように。
世界の空間の一部を無視するように。そして、オレには何が出来る？　空間を飛び越えて、何が出来る？　空間の形を認識して、移動しやすいように見えていない空間の形を浮き上がらせる事も出来る。それが瞬間移動の副次効果としての、空間把握の能力。
それから、何処でも無い場所。この世界から完全に断絶した場所に、オレは部屋を作った。その中に、オレは住んでいて、中継地点のようにしていると言える。
部屋……？
「部屋か……？　……？」
レイアとキマイラは顔を見合わせる。
まだ、可能性の範囲でしかないが、ある思考に至った。
「部屋にとって必要なのは何だろう？」
レイアが即座に答える。
「壁ね。壁があるから、部屋が存在出来る」
「……おそらく、この辺りに、大量の壁があるのだろう。それは冷気の壁となっている。でも、部屋が沢山あるとすると、壁じゃない部分も沢山あって……」
「瞬間移動しましょう、あの城まで、何度も途中にあるだろう、“部屋”を渡り歩いて」
レイアは言った。
おそらく、この敵は“空間をズラす”事によって、冷気の壁を生じさせているのではないだろうか。空間をズラすと、熱を完全に遮断させた壁が生まれるのだろう。
オレは空中にナイフを投げていき、刃物が空中で停止しない場所へと、絨毯ごと瞬間移動させていく。そして、それを繰り返し続ける。
そして、移動していくうちに、すぐに気付いた。
城にまるで辿り着けない。
「やっぱり、光を屈折させてもいるのかしら？　あるいは光の一部を遮断しているのか。でも、甘名が刃物を投げた場所は、投げた場所に刃物があった」
「……大きな渦の中に、小さな渦がある。大きな部屋の中に、小さな部屋が沢山あるんじゃない？　それがどんどん回って、動き続けているとか」
キマイラは言った。
オレとレイアはなるほど、といった顔をする。
この敵のやっている事の構造は見えてきた。
問題は、解決策だ。
部屋と部屋を飛び越えるのまではよかった。
しかし、瞬間移動では届かない範囲で、この空間自体が動き続けているとするのならば、どう

打開すればいいか。
「ルービック・キューブだ」
　オレは唐突に閃いた。
「おそらく、ルービック・キューブのような形をしている。勿論、形状は四角で面が９×６ではないかもしれないが」

†

　ようやく、あの正体不明の攻撃から逃れる事が出来た。
　しかし、不時着陸、とでもいうべきか、森の真ん中くらいにいた。
　もう大体、閉じた空間の位置は把握出来るし、三名の力を合わせれば、何とか攻略は出来るだろう。
　オレ達は焚き火を囲んで、少し休んでいた。
　キマイラ・ヘッドという女。
　確かに、彼女がいてくれなければ、オレ達はこの状況を突破する事が出来なかったのだろう。
　キマイラは煙草に火を付ける。
　オレ達は携帯食糧を貪るように食べていた。
　三人とも、しばらくの間、無言だった。
　キマイラは六本目の煙草を吸い終わると、ぽつりぽつりと呟く。
「私の弟。馬鹿でさ、何故か、ウォーター・ハウスなんかを尊敬していて。金魚の糞のように付いていた。馬鹿な奴だった。図体がでかい癖に弱い奴だったから、まあ、どうしようもないっちゃどうしようもないわ」
　そんな話をする。
　それを聞いて、ふと思った。
　オレの知らない処にも物語はある。色々な人間が色々な生き方をして、影響を与えていく。オレはキマイラの事も、彼女の弟の事も知らない。はっきり言えば、興味も無い。
　しかし、キマイラにとっては自分の意志を突き動かす程の何かがあった。
　大切な弟だったのだろう。
　……、しかし、オレは彼女の弟にまるで興味が無い。
「大切な弟だったの？」
　レイアが訊ねた。
　キマイラは首を横に振る。
「いや。駄目な弟だった。でも、何だろう。いつの間にか、私は此処に来ている」
　それっきり、また話題は途絶えた。
　しばらくして、オレ達三名は焚き火を消すと、歩みを進める事にした。
　空間に氷のシャッターを置く能力は、もう位置が大体、把握出来るようになってきたので、惑わされる事も無く進む事が出来た。このまま、瞬間移動の能力とレイアの洞察力さえあれば、切

り抜けられる。
　もうすぐ、古城に辿り着く。
　その途中で、驚くべきものを見つけた。
　何週間ぶりくらいの再会か。
　オレは息を飲む。
　シャッターの中に閉じ込められるように、一人の女の凍死死体が見つかった。
　それは、樹海の中、空中に浮遊しているかのようだった。
　その女は、何度、倒しても生き返ってくる奴だった。
　しかし、今回はどう見ても、死んでいた。
　分身だとはとても思えなかった。
「ルサールカ……」
　黒いワンピース姿の、ルサールカの凍死体が、まるで蜘蛛の巣に絡まれるように、浮かんでいた。
　数百メートル先の崖の上には、ウォーター・ハウスがいるであろう古城が聳え立っていた。
　そう、もう完全に敵地なのだ。

　ぎょろ目の男。
　彼の名はライフラインと言う。
　ホーリィは殆ど、部屋から出ないこの男の前へと立った。
　二ヶ月もすると、傷は完全に治っていた。
　彼は特に何をする事もなく、物思いに耽るように天井ばかりを見つめていた。
　ホーリィは食事と飲み物を、彼の隣に置いた。
「いつも通り、お持ちしました……」
「ああ、ありがとう」
　この男は、正直、ウォーター・ハウスよりもまるで思考が分からない。
　酷い怪我で運ばれてきたらしいが、何でも、ウォーターの治療を拒んだのだと言う。
「闇の炎と戦ってな……、あの女は怖かった」
　ライフラインはぽつりと言った。
　彼はおもむろに、脇腹と左肩の包帯を解いていく。
　それはまるで、何かに引き千切られたかのような傷が、穿つように彼の脇腹と左肩の一部を削り取っていた。
「ウォーターはこの傷を興味深そうに見ていたな。俺は奴に対する不審さから、治療を拒んだんだが」
　ライフラインはぽつりぽつりと言う。
「駄目だな。ウォーターはアサイラムで反乱を起こしたとはいえ、アサイラム側の人間だったからな、未だに信用出来ないんだ」
　ホーリィはじっと、彼の話を聞く事にした。
「アサイラム……、あそこは裏の顔が結構、あって。俺は大量の薬物投与を受けた。そのせいで、治療とか医者に対する不信感が強い。というか、トラウマになっているんだろうな」
　ライフラインはしばし何かを考えていたが。
　何かを決意したかのように言う。
「アサイラムからの追っ手が来たんだろう？　此処に」
　ぎょろ目は言う。
　おもむろに、飲み干したコップを掴むと、それを放り投げた。
　コップは地面に落ちずに、ぷかぷかと空中に浮いている。
「俺も手伝う。その為にウォーター・ハウスは俺も拾ったのだろうから」
　途端、ばさっと部屋中の物が天井へと浮遊していく。
　彼が料理を食べていた皿、ベッド、本、ランプ、空中へと浮かんでいく。
「アサイラムから、他の三名も含めて、逃げる事が出来たのは俺の能力の力だ。何か、役に立てるかもしれない」

†

　ケルベロスという男に追われている。
　此処の施設には、大量の能力者が収監されている筈だ。
　彼を撃退出来る能力を、私の能力で複製しなければならない。
　だから、この施設の中にいるだろう、能力者達から、敵を倒せる能力を奪わなければならない。
　私は、大量の囚人がいる場所へと乱入した。
　彼らは私に驚いている。
　こんな事になっても、私は今もなお、素性を隠すべく、顔を布で隠していた。
　私は囚人達の首筋をなぞるように傷付けていく。
　そして、爪の奥へと血液を浸透させる。
　……ケルベロスを倒せそうにない能力ばかりだった。
　私は、囚人の一人に話しかける。
「ねえっ、此処にいる奴で、凄い奴って知らないか？」
　首を掴まれた囚人は苦しそうに言った。
「なら、あの向こう側の棟にいる彼なら、ＶＩＰ待遇だと聞いている。お前は、こんな事して……」
　私はその囚人を投げ捨てた。
　そして、言われた場所へと向かう。
　そこまで行けば、きっと私に勝機はある。……。

†

「ふむ、とすると、脱走したのはやはり、たったの四名か？」
　痩せ気味の男は感情を読み取れない顔をしていた。
　ライフラインは、肩の肉と脇腹を抉られて、シャツで傷口を縛っている。
「ああ、そうだな」
「他の四人は？」
「脱走した後、四人とも別々の人生を送る事に決めた。どの道、固まっていたら、一網打尽にされかねないし。そもそも、みんなウマが合うわけじゃあない」
「そうか、しかし、たったの四人か。何というか、……正直に言うと、がっかりしているというか、残念な気持ちだ」
　と、その男はありのままの感情を言った。
「やはり、みな、安心が欲しかったんじゃないかな？　俺は駄目だったが」
「そうか……」
　痩せ気味の男の名はウォーター・ハウスと言う。

　彼は溜め息を吐き出す。
　眼は苛立っているのか、それとも憐れんでいるのか、その中間のような色を出していた。
　彼が今まで会ってきた者の中で、このような顔付きをする人間はいなかった。
「ライフライン、この世界。人は何を欲していると思う？」
　男はそう訊ねた。
　ライフラインは答えに詰まった。
　欲望に従って生きる、と、そんな安易な事に行き着く。
　金、異性、権威。食べ物。
　そんな単純な事。
　しかし、おそらくは目の前の男はそんな答えを求めているわけじゃない。
「ウォーター・ハウス、俺はお前がハーデスとチェラブを殺したから、受動的にアサイラムを抜け出したわけじゃねえ。俺はあの場所を抜け出す事ばかり考えていたんだ」
　空高く飛び立てる、鳥のように。
　何処へでも、飛んでいけるように。
「ああそうだ、アサイラムを脱走する事が出来たのは、俺の能力のお陰だ。俺はみんなを、鳥のように変える事が出来るのさ」
　ウォーター・ハウスは彼の頭に手を置く。
　瞬間、彼の頭蓋にまで指を差し込んでいた。
　あっさりと。
　ウォーター・ハウスは、彼の頭の中に入っていた、能力の封印の枷を取り出してみせる。そして、まるで何事も無かったかのように、彼の頭の傷を塞いでしまった。
「アサイラム内でしか作用しないが、こいつがあると何かと気分が重いだろう？」
「ああ、礼を言う……」
「肩と脇腹も治してやる」
「いや」
　ライフラインは遮った。
「こいつは俺の敵だ。拳銃使いの女にやられた。まるで空間を削られたみたいだった、その攻撃でなあ。そいつに対する、恨みの為にも、此処は治さないでおいてくれ」
「そうか」
　後から、その女は、脱走者全員を狩っているのだと聞いた。
　天災や事故みたいなもんだな、と彼は直感で気付いた。
　その女がアサイラムを脱走した者達を狩る理由なんて、特にあるわけじゃないのだろう。ただ、何となく世界に何かをする事によって、自身が何かやっているんだという感覚に陥りたいだけ。
　だから、その女を恨む理由は実は酷く滑稽じみているのだと。
　今や、ライフラインはその女の事を考えたくない。
　今は、彼を助けてくれた主人の為に役に立とうと考えている。

……。
「イリスとホーリィか。それにモニカ。もう二ヶ月も暮らしているのに、ろくに名前も覚えて無かったんだなあ」
　ライフラインは苦笑した。
　ホーリィもつられて笑う。
「俺も協力したいんだ、共に襲撃者を倒そう」
　そう言って、ライフラインは倉庫へと案内した。
　そこは、植物園の近くにあり、ホーリィ達が近寄らない場所だった。
　そもそも施錠されていて、入れないようになっている。
　ライフラインはポケットから鍵を取り出して倉庫を開けた。
「これは俺が調達してきた武器なんだが」
　中にはサブマシンガンや拳銃、手榴弾などの手持ち武器が一式揃っていた。
　彼は中から、女性用のハンドガンを取り出す。
「これを使ってくれ、無いよりはマシだろ」
　そう言いながら、ライフラインは幾つか武器を物色していた。
「私が使うわ。ホーリィは敵を燃やせる」
　イリスだった。
　彼女はやつれた顔をしているが、気丈にも二人を見据えている。
「私も戦う」
　そう言って、拳銃を握り締める。
「意外に、重いわね……」
「ああ、これでも軽い方だ」
「そう、念の為、もう一つくれる？」
　彼女は、二丁の拳銃を手にした。
「見た事は何度もあるけれども、実際に触った事は無かったのよね」
　そう言って、笑った。
　モニカはウォーター・ハウスと一緒にいる。
　それにしても、昨日の夜の襲撃以来、ホーリィはあまり眠れていない。
　イリスはイリスで、かなり辛そうな顔をしていた。
　いい加減、精神的に疲れているが、まだまだ眠れそうになかった。
　もう、夕方近くになっている。
　敵の襲撃はまたあるのだろうか。

†

　城の麓にまで近付く事が出来た。
　いつの間にか、もう夜だ。

　あと、数百メートルも歩けば、城には辿り着く。
　結局の処、キマイラはかなり役に立った。オレとレイアだけだったら、氷のシャッターの薄くなっていた城の付近まで辿り着けなかったかもしれない。
　ルサールカの凍死死体を見て、オレは陰鬱な気分になった。
　彼女は返り討ちにあって、倒されたのだろう。
　あっけない末路だった。
　キマイラはにやにやとオレ達二人を笑っている。
　まるで、こうなる事態を知っていたかのように。
　ね、私はすごく役に立ったでしょう。仲間にしていてよかったでしょう、と言わんばかりに。
　レイアはそんな彼女の心を見透かすように言った。
「貴方がいなくても、私と甘名だけで何とかなったわよ」
「でも、城の付近まで絨毯で飛んでいけたのは私のおかげじゃない？」
「煩いわね。こんな能力、種が分かれば攻略なんて簡単だわ」
　オレは二人を諌める。
「しかし、今の敵は早めに倒しておきたいな。後にウォーター・ハウスが控えている。あの冷気と渦巻きを操る敵を倒さないと、とても彼は倒せないだろうな」
　調べてみると、この城は数棟に分かれていた。
　何処に敵が潜んでいるか、分からない、しかし、おそらくはオレ達全員の接近を知っているだろう。
「二手に分かれましょうか？」
　と、キマイラは提案した。
「三名の方が、危険は少ないと思うが？」
「もう此処まで来たんだから、先ほどのような攻撃は無いとは思うわ。それに、固まって、ウォーター・ハウスの殺人ウイルスで全滅してしまったら元も子もないし」
「その事なんだけれど」
　レイアは言う。
「殺人ウイルスに対する対抗手段は考えていたのよね。二人ともいいかしら？」
　と、レイアは自身の指先から薔薇の蔓を生み出す。
　そして、オレとキマイラの全身に巻き付けていく。
　その蔓は、半透明な植物として、まるでオレ達を囲む鎧のようになっていた。所々に、薔薇の花も咲いている。
「エタン・ローズの薔薇と蔓を、所謂、植物の細胞壁に見立てて作った。これで、細菌やウイルスの浸食を抑える事が出来る筈。まあ、植物の抗体を模したんだけれども。ウイルスに感染しても、纏った蔓の細胞が先に壊死していき、数分間から数十分くらいは持つとは思うわ。でも、完全に防御しているわけじゃないから気を付けて。ウイルスの細胞破壊速度にもよるし、戦いが長引いたら、完全に穴が開いちゃうから」
　決して、無効になるわけじゃないから、と、レイアは念を押して言う。

　オレ達は、キマイラの意見を呑んで、二手に分かれて行動する事にした。
　確かに、彼女の言う通り、全滅は避けたい。
「ちなみに、『リュミエール』の応用なんだけれど、蔓が見えるのは私達だけ。敵側には見えないわ。ウイルスに何故か感染していない私達を見て、敵側の動揺も拾えるかもしれないわね」
　レイアは巧妙に戦略を練っているみたいだった。

†

「此処は研究所なのか？」
　私は思わず、呟く。
　独特の電子音。
　コンピューターが稼動している音。
　そして、そこにそいつはいた。
　ベッドに横になり、点滴だけで生きている。
　近くには、介護用の道具などもあった。
　全身がほぼ動かないのだろう。
　そして、不自然な形で、パソコンのデスクトップが置かれている。
　バチッという音がして、暗い画面が色を付けていく。
　画面の中には、ベッドに横たわる男と同じ顔をした、黒斑眼鏡の顔が浮かぶ。
「やあ、こんにちは。君は何者だい？」
　私は懐から拳銃を取り出した。リオックではない、普通のベレッタだ。
「ケルベロスとかいうのに追われている。お前は、此処の施設で待遇されている犯罪者なんだろう？　お前の能力はそんなに凄いのか？」
　男は苦笑する。
「気が早いね、僕の名前はブエル。此処で、こんな姿になりながらも、此処に集められた能力者達の能力が何なのかの研究をしている。最近はやっと、その片鱗に近付く事が出来たよ」
「ああ、そう。そうですか。処で、私の話聞きました？　貴方の能力は何なんですか？　ちょっとそれを奪いたいと思うんですけれど」
　どうやら、こいつが待遇されているのは、能力の強さではなく。こいつの技術のお陰らしい。しかし、そんな事は今はどうでもいい。
　私は拳銃を床に発砲した。
「此処の施設にいる奴で、ケルベロスを倒せそうな奴っています？　それから、出来れば、なるべく強い能力者を何名か教えてくださいます？　青い悪魔に近付くくらいの奴がいてくだされば いいんですが」
　画面の人間はせせら笑っているかのようだった。
「なら、いい人材がある。ベスティアリーを見つけるといい。話の流れだと、君は他人の能力を奪う事が出来るのかな？」

　私は首を縦に振る。
　彼はベスティアリーとかいう囚人のいる房の番号を教えてくれた。
「他に強い奴は？」
「大していないよ。無駄足だったみたいだね」
「そのようね」
　私は踵を返して、部屋を出る。
　背後から声が聞こえた。
「ああ、そうそう、君は行動力が人一倍あるみたいだし、その場その場では頭の回転も早いけれども。全体的には目的がムチャクチャだろう。本当は何がやりたいかも、自分では分かっていない。だから、行動が短絡的だ。頭はいいんだ、少しはそれを生かしたらどうだい？」
　私はまた拳銃を発砲する。今度は彼のベッドの中だ。弾丸は、彼の足の近くを撃ち、煙が上がっている。
「余計なお世話ですよ」
「この前の彼女とはまるで違うね。でも、強い女の子は好きだよ」
「私は女の子って年じゃないですよ、童顔ですけれど」
　そして、この前の女の子とは何なのか、一応、聞いてみる。
「ああ。フェンリルの相棒みたいだね。彼女ほど何事にも、冷静な者は始めて見た。君が炎ならば、あの子は氷だね」
　私は少し、その女に興味を持った。
「ねえ、少し、そいつの事、話してくれない？」
　直感が言っている、そいつに会えと。
「ああ、何でも洩らしていたよ。『青い悪魔』をもう少しで倒せたのにって。それ以上の事は何も言ってくれなかったけれどもね」
　私は歓喜に震えそうになった。
　今、こいつは何を言っている？　青い悪魔？　そいつを倒せそう？
　はったりではない事が、こいつの表情から読み取れた。
　もしかすると、その女の血を“奪えば”、青い悪魔を倒し、更に青い悪魔の血を奪う事も出来るんじゃないのか？
「君には何か目的があるように見えるけれども、君はその目的の為に動いているね？」
　まるで、心を見透かしたように彼は言った。
「ああ、この腐った世界を、根こそぎ、焼き滅ぼそうと……」

†

　結局、二人は精神の限界が来てしまい、壁にもたれ掛かって意識を失っていた。
　その間、ライフラインは彼女達がいる部屋を中心に、トラップを仕掛けていた。
　家に仕掛けるタイプのブービー・トラップだ。

　ホーリィの話では、ルサールカという女は自身の分身で攻撃出来るそうだが。どうやら、分身を炎で攻撃すると、明らかにダメージを食らっている様子だった。ならば。
「おそらく、分身を倒していけば、返り討ちには出来るな。本当なら、本体を叩かなければならないのだが」
　ライフラインは、敵の能力を大体、理解する。
「もし敵が“死のエネルギー”とか言う奴で攻撃してきて、全身を拘束されたとしても、トラップで倒せばいい」
　ウォーター・ハウスから、以前、敵が来た場合は、撃退する為に城を幾ら破壊してもいいと言われている。
　彼はワイヤーや地雷を一通り、設置する。
　取り合えず、彼らが今いる棟のあらゆる場所に、トラップを仕掛けた。
　そして、ライフラインは二人の下へと戻る。
　イリスもホーリィも壁にもたれて、すっかり寝ていた。
　彼が近付くと、まるで跳ね起きるようにホーリィが目を覚ます。
「わ、私、眠って」
「ああ、睡眠は取っておくに越した事は無い。今の処は何も無いよ、俺は自分の仕事を一通り、終えた」
　つられるように、イリスも目を覚ました。
　どうやら、今の話は夢なかばだが聞こえていたらしい。
「何の仕事をしていたの？」
「昔、傭兵だったんだ。上司を殺してしまって、それ以来、落ちるに落ちたんだけどな」
　そういう彼は、何処か工作員風に、様々な作業道具を持っていた。
「ところで、鳥は好きかい？」
　ライフラインはウインクして、笑う。
「鳥？　……そうね、空飛んでいるのを見るのはいいわねえ」
「ペンギンとか、フラミンゴとか好きです」
　ライフラインは笑った。
「そうか。俺は鳥が好きでな。自由の象徴だと思っていて。戦場でもよく鳥の事ばかりを考えていた、おかげでこういった物を浮遊させる能力に目覚めちまったがな」
　と、彼は何処からか持ってきた、羽毛を飛ばす。
　それは一斉に天井へと向かっていく。
　イリスとホーリィの二人は笑った。
「ねえ、そういえば、トラップってどういう風に仕掛けたの？」
「見に行くかい？」
　と三名は部屋の外に出る。
　此処は、二階で、バルコニーから一階を見下ろせた。
　彼らがドアを開けると。

三人とも、沈黙した。
余りにも、そいつは自然にそこにいた。
距離は、数メートルも離れているが。
ライフラインは、そいつが握っているものが分かった。
いつの間に、侵入を許していたのか。
それとも、既にトラップを仕掛けているのを見られて、観察されていたのか。
まるで、羊のような角を生やした女。
全身を、足元まであるローブによって包んでいる。
イリスとホーリィも息を呑んでいた。
昨日の敵とは違う。
二人も、彼女が手に持っているものに気付いた。
ライフラインが仕掛けたであろう、地雷やワイヤーの部品だった。
既に小細工を見抜かれて、その中の幾つかを破壊されている。
そいつは、トラップの部品を投げ捨てると訊ねてきた。
「この中に、大気を凍らせる能力者はいる？　いるとすれば誰？　それから、ウォーター・ハウスは何処にいる？」
先に、動いたのはホーリィだった。
彼女は、ライフラインとイリスを押し退けて。
目の前の敵の全身を燃やしていた。
そいつは全身、火達磨になる。
しかし、彼女が触れている箇所、廊下の手すりと床はまるで燃えていない。ホーリィの能力は、燃やすものを設定して、燃やす事が出来る。
十秒近くは、炎は彼女を焼き続けていただろうか。
「なるほど、お前の能力は分かった」
と。
その事を、どうやら敵は理解したみたいだった。
一瞬だった。
数メートルの距離を縮められて。
ホーリィは、全身を弾き飛ばされたような衝撃を受ける。
しかし、イリス達の目から見ると、ホーリィはただ、立っているだけだった。
何をされたのか分からないが。
ホーリィはそのまま、床に崩れ落ちて動かなくなる。
羊の角を生やした敵は、二人を吟味するように見ていた。
「あのねえ、燃えちゃったじゃない。ウイルスの侵入を防ぐ鎧。やっぱり、自分で事前に対策を考えてきてよかったわ」
イリスが、何かを喋るが言葉にならない。
しかし、ライフラインは動いていた。

腰から拳銃を引き抜くと、それを敵の顔面目掛けて向ける。
が、敵の女は、すぐに全身を捻って、回し蹴りで彼の腕から拳銃を弾き飛ばした。
イリスの全身が、一気に跳ね上がる。
そして、半分扉から出掛かっていた全身を持ち上げられて、そのまま一階まで投げ飛ばされる。ダメージは無く、浮遊するようにゆっくりと着地した。
投げ飛ばしたのは、ライフラインだという事に彼女は気付く。
「植物園まで行け！」
彼はそう叫んでいた。
彼はイリスだけを逃がしたのだった。
羊の角を生やした女は、ぎょろ目の男をまじまじと眺めている。
「お前の能力は人間を空中に浮かせるのか？　それとも、凍らせる能力の延長でそんな事が出来るのか？」
「……何を言っているのか分からないがなあ。お前、名前を名乗れよ、俺はライフライン、アサイラムの騒動の中から逃げた脱走者の一人だよ」
「ああ、そう。私の名前はキマイラ・ヘッド。貴方達が作ったトラップ、役に立たなかったみたいね」
「そこに倒れているメイドに何をした？」
「ああ、あの炎使いの女ね、痛みのショックで気絶しているだけよ。安心して。脊髄の一部を引っこ抜いただけだから。まあ、一生、立てなくなるけど、死にはしないでしょう。それに運が良い事にウォーター・ハウスなら治療出来るじゃない」
と、キマイラは懐の中から、血に濡れた骨の破片を取り出すと、それをホーリィの下へと放り投げた。
ライフラインは蒼ざめた顔をしていた。
すでに、彼もおそらくはこのキマイラという女によって“始末”されている。
蹴りを入れられた時に、廊下の手すりに叩き付けられて、その時、何と両腕と腰が手すりに混ざるように接着されていた。
腕と腰の辺りの感覚がまったく無い。
しかし。
足の感覚はある。
「質問なんだけれども、ウォーター・ハウスは何処にいる？　私は奴さえ倒せれば、もう他はどうでもいい。答えなかった場合、質問は拷問に変わるわよ」
と、キマイラはライフラインの左足に飛び乗って、勢いよく左足の骨を砕く。
「さあ、話せ」
ライフラインは、右足の靴の裏に仕込んでいた物のスイッチを押した。
彼らの周囲は勢いよく、吹っ飛ぶ。
精神力を振り絞って、ホーリィに飛んでいく破片などを、空中へと飛ばす。破片は、ホーリィに辿り着く前に天井へと突き刺さっていく。

煙が晴れると、まるでダメージを負っていないキマイラの姿が見える。
彼はキマイラにも、自身の能力を発動させる。
既に、爆発で彼の両足は無かった。
キマイラは床に立っていられなかった。
全身が羽のように軽い、投げ飛ばされたというよりは、奇妙だが落ちていくかのような感覚。しかし、現象としては彼女の肉体は空中へと浮かんでいた。
空中へと浮遊していくキマイラの元へと、彼は隠し持っていた手榴弾を幾つも放り投げた。爆煙が舞う。粉塵。一撃で人間一人くらい簡単に四散出来る威力の爆弾だ。
確実に、死ぬ筈なのだ。
城の天井が勢いよく崩れていく。
瓦礫が降り注いでいく。
「……地獄へ落ちろ。クソ野郎！」
彼は唾を勢いよく吐いた。
煙が晴れていく。
ライフラインは最初、唖然としていたが、どういう事態が起きているのかを理解すると、その眼には絶望が浮かび始めた。
信じられない現象が起こっていたのだ。
キマイラは、自身の能力によって、周囲の気流を操作して、手榴弾の爆風を防ぎ。彼の全身全霊の攻撃を全て無意味にしていた。
やがて、空中浮遊の能力が終わり、キマイラは無傷のまま地面に降りる。
彼女は乱れた髪を手櫛で梳き始めた。
「さて、他に打つ手は無いのかしら？」

†

　キマイラと分かれた後、オレ達は城の中で一番、上へと伸びる塔が低い場所にいる。
　レイアはいつになく慎重だった。
　彼女は好戦的な部分も多いが、基本的にはいつも決して油断しない。
「この辺りに生えている植物、気を付けた方がいいわよ」
「どういう事だ？」
「勿論、動物も。何かに感染させて、触れると病原菌に侵される可能性が高い」
　オレは彼女の発言に関心しながら、歩みを進める。
　遠くで、物凄い衝撃音が響き渡っていた。
　オレとレイアはその辺りを見る。
　おそらくは、位置的に中庭だろうか。
「何があったんだ？」
「分からないわ」
「とにかく、進もうか」
　オレとレイアは、正面から向かったキマイラとは別行動で、門の周りを回って、古城の庭の中へと侵入したのだった。
　音がしたのは、おそらくキマイラのいる場所だ。何かあったのだろうか。
　しばらく、更に歩みを進めていく。
　すると。
　何かが物陰の奥で動いた。
　オレは危険を察知して、即座に瞬間移動で避ける。
　しばらく、オレがいた場所を大量の飛礫が撃ち込まれていた。
　どうやら、種を飛ばしているらしい。
　レイアは、だから言ったじゃない、といった顔をする。
　気を付ける、とオレはアイコンタクトで返した。
「見て」
　レイアは建物の一部を指差した。
　そこは一つだけランプの明かりが点いている。
「罠だと思う？」
「いや」
　彼女は首を横に振った。
「おそらく、敵はひょっとして、オレ達の侵入に気付いていないんじゃないか？」
「ええ、私もそう思うわ、でも」
　彼女は感じ取った違和感を言葉にしていく。
「それは城に辿り着いたまでだった。もう敵は私達の侵入に気付いている可能性が高い。さっきの植物のトラップがそう。甘名、あのトラップが発動したせいで、私達、完全に気付かれたわよ

。もっとも、たとえば他にも、鳥が飛んでいたりしたから、何かの媒体で気付かれていたかもしれないけれども」
　彼女はすらすらと分析し続ける。
「間違いなく、敵は私達を待ち受けているだろうけれども。着いた時までは気付いていなかった。じゃあ、おそらくあの氷の能力者は結界として、あの攻撃を張り続けていたんじゃないかしら。それにしても、本人からの追撃は無かったわ。……ひょっとして、自動で発動させている……？」
　オレは自身の空間把握能力を発動させてみる。
　やはり、台風の目のように、中心に向かうにつれて敵の能力は発動しなくなっていくらしい。
　先ほどまでは使えなかったが、今になって少しずつ、この辺りの形が頭に思い浮かぶ。
「……二人いる……、ウォーター・ハウスは気付いているな。窓からオレ達を探しているように見える。もう一人は、おそらく女かな？」
「なるほど」
「突入するか？」
「ええ」

†

　イリスは走っていた。
　植物園まで逃げろと、ライフラインは言っていた。
　植物園は別の棟にある、それまで持つだろうか。
　今の敵が、一瞬で二人を片付けたのは分かった。
　昨日のルサールカとは違う能力者。
　どんな攻撃をしてくるのか、予想も出来ない。
　別棟へと続く廊下を駆け抜ける。
　ぽん、と彼女の背中に何かが命中した。
　イリスは一瞬、それが何なのか分からなかった。
　そして、すぐに気付いて愕然とする。
　それは、おそらくはライフラインの上顎の骨だった。
「そいつ、自爆したわ」
　羊の角を生やした女が、後ろに立っていた。
　イリスはへたへた、とその場に倒れ込む。
　腰に拳銃を仕込んでいた。
　しかし、それを取るのを、まるで敵は待っているかのようだった。
「お前、何なの？　……昨日の女と同じように、あいつを狙っているの？　……」
「昨日の女？　……なるほど、誰かに既に襲撃されたわけね。私で何人目？」
　敵はへらへらとした顔をしていた。

　その眼は、まるで蛇やサメが獲物を狙うように、冷血そのもので。
　イリスは喋っていた。
「き、き、昨日は、る、ルサールカとかいう女が来た、お前は、彼女と関係があるの？」
「知らない名前ね。私の名前はキマイラ。貴方って、空間を凍らせる能力者？」
　何を言っているのか分からない。
「まあ、いいわ、ウォーター・ハウスは何処にいるの？」
　ウォーターのいる棟を、イリスは知っている。
　大体、どこら辺にいるかも知っている。
　これは教えてしまおう。
　そう、口に出そうとして。
「ホーリィ……、ホーリィに何をしたの？」
「ああ……、あのメイドか」
　ぽん、とキマイラと名乗った女は、何かボールのようなものを、そのゆったりした服の中から落とす。
　てん、てん、とそれはイリスの下へと転がっていった。
　イリスは徐々に頭の中が真っ白になっていく。
　……私も似たようなモノです。
　そんな事、言っていたっけ。
「ああ、ごめんね。男の方、始末する時、背骨の骨、外したにも拘らず、私を燃やしに来たから。仕方なくね。本当に、ごめんね」
　まるで、遅刻の言い訳でもするかのような口調。
　ホーリィは此処に来て、幸せだったのだろうか、とイリスは思った。
　二ヶ月間、幸せだったのだろう。
　二ヶ月間、人間として暮らした。きっともう、彼女を傷付ける者なんていない。
　首だけになった彼女は、笑っているようにも泣いているようにも見えた。
「まあ、貴方は殺すつもりないから。取り合えず、喋ってくれればいいのよ」
　イリスはショックで、全身を小刻みに震わせていた。
　キマイラはしばらく、そんな彼女を眺めていたが、やがて懐から煙草とオイルライターを取り出すと、煙草に火を付ける。
「……邪魔したわね。私は行くわ」
　まるで、イリスなど、何の障害にもならないといった態度で、キマイラは去っていく。
　キマイラは、窓を開いて、外を眺めた。
　此処は、中庭へと続く廊下のようだ。
　彼女は辺りを見回して、外の建物を見ていた。
　何かを思考しているようだった。
　彼女は吸い終えた煙草をその場に捨てると後ろに向かって言う。
「発砲したら、敵と見なすわよ。せっかく拾った命、大切に使いなさい」

音で、イリスが拳銃を握り締めて向けるのを知ったみたいだった。
イリスは怒りと悲しみで動揺していたが、今の言葉で全身を再び震わせる。
至近距離だ。頭部まで２メートルも無い。
絶対に命中させられる。
しかし……。
「当たるって思っているでしょう？　止めておけとしか言えないわ。たとえば、貴方が撃つよりも早く、一秒以内に貴方を殺せるのよ」
イリスは理解した。
まず、この女に敵と認識して貰わなければならないと。
仮に撃ったとしても、この女はイリスなど意にも介さずに、拳銃を奪って何処かへ行くかもしれない。それに、やはりあっさりとイリスを殺して行ってしまうだろう。
それではいけない。
何とかして、この女の興味を持たせなければ。
「……ウォーター・ハウス、言っていたわよ。この城中にトラップを仕掛けているって。あなた、私からそれを聞き出した方がいいんじゃない？」
声が震え、裏返っている。
キマイラはそれを聞いて、少し考えるような表情になった。
「なるほど。確かに貴方の言う通りだわ、でも」
キマイラは窓の外を指差す。
「あそこに幾つかランプの明かりが付いている場所がある。もしかして、私の侵入に気付いていないのかしら？　ルサー……なんだっけ？　そいつが昨日来たんだっけ。そいつのせいで、警戒しているわけね。もしかして、まだ倒してなくて撃迎するつもりでいるのかしら？」
キマイラは何かを理解したみたいだった。
「とすると、奴がこの城にいるのだけは確かね。実は留守っていう可能性も想像していたから。そして、凍らせる能力者が一人いる。ところで、貴方が向かっていた場所、ウォーター・ハウスのいる所とは違うわね。まだ誰か能力者がいるの？　それとも……何か罠に嵌めたかっただけかしら？」
しっかりと見抜かれていた。
キマイラが行ってしまう。
何とか、関心を持たせたかった。
そして、植物園にまで行けば、おそらく倒せる。
ライフラインから聞かされていた、あの植物園がどういう場所かを。
「……植物園にいる……」
イリスは呟いた。
「ウォーターは、植物園にいるわ……あそこの明かりが灯っている場所は、私の友達がいるの……、やめて……貴方の目的はあいつだけなんでしょ？」
キマイラはイリスの顔を眺める。

イリスは騙し通す、と決意する。
彼女はこれまでそうやって生きてきたのだ。
欲望だらけの世界で、他人の裏をかきながら生きてきた。
彼女の“物を入れ替える”能力も、そういった世界で汚い生き方をするうちに、いつの間にか発現していたものだ。
呼吸は乱していない。
いや、もちろん、ホーリィの死によって受けたショックは見せ付けてやればいい。
問題は、植物園まで連れて行く事だ。
「なるほど、分かったわ。教えて」
イリスは心臓が波打つ。
「……お前なんて、あいつにやられてしまえばいい……」
精一杯の憎しみを込めて、キマイラを睨み付けてやった。
何か温かいものが、眼の中から地面へと零れ落ちる。
キマイラは無感情で、イリスを眺めていた。
「位置だけでいいわ。教えて」
「連れていくわ、……あなたがあいつに殺されるのを見たいから」
再び、声が裏返っていた。
「ふうん」
と、キマイラは頷いた。
イリスは無言で歩き出す。
それから、頭の中が、半分、真っ白になりながら、植物園のある場所まで歩く。
まるで、一秒一秒が、何年にも何十年にも思えた。
こんな事をしているのは、いつ以来だろうか。
イリスがあの世界で働く前、暴力ばかり働く義父を間接的に殺した時。
当時、彼女は十二歳になったばかりだった。
義父に数年もの間、酷い事をされ続けて、とうとう、たまたま知り合ったマフィアに、法律的には何のリスクも冒さずに、殺す方法を教えて貰ったときの事だ。結局、そのマフィアは別件で、二年後に投獄されて自殺したらしいが、今でも恩人だと思っている。
マフィアは言った。
……ある場所で、抗争がある。そこにお前の親父さんを差し向ければいい。そしたら、どちらの組織の奴らも、敵と見做して撃ち殺すだろうよ。
マフィアは路地裏にいた彼女にたまたま話しかけて、たまたま入れ知恵をしてくれた。そいつにとっては、ほんの気まぐれだったのだろうが、やはり恩人は恩人なのだ。
イリスは義父を誘うとき、女の人があなたを気にかけているといった。そしてある場所で待っている、と話をした。抗争の場所は風俗街だったので、義父はすぐに騙せた。おそらく、飲み屋か男性の欲望を満たす店の女が彼を気に入ったのだろう。そう解釈したみたいだった。そういった場所で後に働く事になるとは、その時のイリスは思わなかった。

その時は、ただ義父を殺す事で頭がいっぱいだった。
結果、成功した。
その時以来、彼女は他人を騙してでも生きる事を誓った。
最初、此処に連れて来られた時も、あの変な男。ウォーター・ハウスを騙して、金でも奪ってやろうと思っていた。しかし。
……不思議な関係だったけれど、何だろう。私は此処を守りたかった。
守れなかった。……。
ホーリィは死んでしまった。殺された。
だから、せめて守りたかった場所を壊した奴を……。

†

モニカの能力の本質は彼女自身の精神の“不安定”さにある。
心の壁、他人を遠ざけたい願望。それとは別ベクトルで、他人に理解されたい、他人に認められたい願望。そのような感情がぐるぐると渦巻いて、複雑で不安定な状態がそのまま、能力として世界に現象されている。
ヨルムンガンドと名付けられた能力は、彼女の心の“弱さ”こそが、まさに彼女を守る壁のような強さとなって具現化されたものだ。
それは、空間をズラす事によって、温度を遮断していき、空間を凍結させる壁を発生させて、その余波によって、物質を凍て付かせる現象を引き起こす。
彼女の能力は、台風の目のように、対象が彼女に近付けば近付くほど、効果を発生させない、極めて不安定な能力だった。
彼女は弱いからこそ強く、その強さは彼女が弱い心を更に、保ち続ける事によって、決して、彼女に近付こうとするものがいないかのように、彼女を取り巻いている。
ウォーター・ハウスは、彼女の能力の全体像を全て理解しているわけではないが、おそらくは、自分と相性がよいだろうと、本能的に理解していた。
そして、彼女が彼女であるがゆえに、その能力は強いのだろうと。いつも不安定でおどおどしている彼女を、実に気に入っていた。
その性格故に、発動する他人への恐怖、心理的な壁。
それが、世界を取り巻くような巨大な蛇のような氷のシャッターとなって現れる。
彼を守る為の城壁として、これ以上のものは存在しないのではないか、そう思った。
……。
勿論、ウォーター・ハウスは、甘名とレイア、それからキマイラの侵入に気付いていた。
しかし、彼は他の者達には、それを教えなかった。

†

「相性が最悪よ」
　レイアが吐き捨てるように言った。
　憎憎しげにさえ感じ取れる。珍しく、彼女は苛立っているようにも思える。
「最悪なのか？」
　オレは訊ねた。
　ウォーター・ハウスの方では無い、まだ見ぬもう一人の強敵の方だ。
　城の中に侵入して、しばらく立って、オレがこの敵に関しての感想を訊ねた答えがそれだった。
「ええ。なんというか、この敵、腹が立つ。最低ね」
　どうやら、レイアはオレ以上に、この敵の本質を理解しているみたいだった。
「分かった事を教えてくれないか？」
「そうね。まず、こいつは感情的な生き方をしている。自分一人では何も決められない。自分では決断しない。自身をコントロールする事が出来ない。生きている事、自体、翻弄されっぱなしで。いつも思考がぐちゃぐちゃだ」
　レイアは右手を顎に置いて、眉間に皺を寄せていた。
「私にそれを理解させて、その事自体が既に“攻撃”なの？　こいつの能力は、他人の精神を掻き乱す作用さえ感じる。なんというか、あのルサールカとかいう女も腹立つけど、こいつもまた、胸糞悪い。やっぱり、女は胸糞悪いわ」
　そして、言いながら、また珍しく溜め息を吐く。
「……キマイラは嫌いじゃない。水月もだ。奴らは女女してないから。生き方、考え方が女々しくない。奴らはいつも理知的に生きている。甘名、こいつは、おそらくは、自身の“弱さ”それ自体が強さになっている能力だ」
　城の暗闇の中を、足音を立てずに歩いている。
　レイアはわざと、相手に声が聞こえるように少し大きな声で喋っている。
「“弱さ”がそのまま“強さ”？　要するに、ブラッドの『クラシック・ホラー』みたいなものか？　あれは、彼の他人に対する恐怖心を体現していると聞いたけれど」
「いや。私は青い悪魔は弱いとは思っていない。彼は強い。少なくとも、自身が何者であり、この世界にどういう影響を及ぼしていて、自分自身のスタンスをちゃんと理解している。能力の強さはこの際、関係ない。仮に、同じ弱さだとしても、こいつは全然、違う」
　オレ達は既に、敵の攻撃を受けている。
　城が迷宮のようになっており、まるでシャッターを押すように、所々に冷気の壁が立ち塞がっている。
　そんな状況なので、進もうにも中々、進めず、戻ったり、迂回したりをしながら、何とか目的の場所へと向かっている。
　そして、レイアはその状況に対しての苦言として述べたのがこれだ。
「こいつ、自分が何をしているのかまるで知らなくて。どういう影響を他人に及ぼすのか理解していなくて。自分一人では何も出来なくて、何も知ろうとしなくて。ただ、闇雲に能力を使って

いる。そこに目的が無い。自己保身のつもりみたいだけれども、別に自分がどうなってもいい、とさえ感じる。極めて不安定で方向性が無く、生き方の指針みたいなものがまるで無い。故に、自身の正義も邪悪さも欲望も何も無い。理念も思想も無い。こいつは強敵だけれども、倒す意味がまるで無い」
　珍しい、ものなのかもしれない。
　レイアが殺意でも敵意でも悪意でもなく、何というか、憤り、怒りすら感じている相手。それらは全部、所謂、負の感情でこそあるが、やはり決定的な差はある。
　レイアにとって、殺意や敵意などは、自分自身を価値観や存在の在り方を少しでも侮蔑しようとしてくるもの、だとするのならば。
　レイアが怒る対象というものは、何というか、おかしな感覚だが、彼女にとって、美学的に、彼女なりの正義なりで赦せない、というべきか。
　やはり、レイアはよく分からない。
　お互いがお互いの光と影といっても、やっぱりそれぞれ別々の人間なんだろうな、とも感じる。
「こいつの攻撃は無駄ばかりだ。そして、おそらく本人を前にすると隙ばかり。私はこんなに弱いんだ、と全身全霊でアピールしているに違いないわ。ウォーター・ハウスとかいうのに、利用されているようだけれども。別に利用されたっていいや、という感じがする。そして、何よりも、私の能力と相性が悪い」
　また、何度目かの氷のシャッターによる封鎖に行き着いて、ますます、彼女は剣呑になっていく。
「こいつと戦いたいとは思わないし、勝っても何も得られない。こいつには、敵意も悪意も殺意も憎しみも怒りも湧くべきではない。……甘名。私もまだまだね……」
　また珍しく、彼女は弱音を吐いた。
「いや、私自身が“限界突破”を果たしたから、むしろ不安定なのかもしれないわね。だから、こいつに心を掻き乱される。私の生き方は極めてシンプルだ、それは分かるわよね？」
「私は私だ、だろう？」
　……。
　さて、オレ達は城の中に突入したはいいが、思いっきり迷っていた。
　敵の元に辿り着けないのだ。
　暗い中だが、オレの空間把握によって、敵の位置は分かる。しかし、そこまでどうやっても、届かない。まるで、空間が歪曲しているかのように、その場所へは辿り着かない、オレは一旦、空間把握を解除して、あえて闇雲に部屋を当たってみたが、何故か、迷ってしまう。
　その事に関しては、おそらくは空間をズラしたりしているのだろうという事は分かる。では、どのように空間をズラしているのだろうか。確かに、この辺りは寒いが、寒さによって凍らされるという攻撃は受けていない。
　レイアは光を屈折させていると、言っていた。
　闇の中にも、光源を幾つか混ぜる事によって、かえって迷わせているのだと。

　そう、十数分以上迷った挙句、レイアは空間と冷気を操る能力者の能力を、ある程度、理解したようなのだった。
幸いな事にウイルスの散布はされていないし、それを媒介する生物も確認出来ていない。いや、逆に、ウォーター・ハウスの方が動いてくれた方が、事態の打開策にはなるかもしれないが、あえてそうしていない。
「そして、この敵の攻撃は不規則、ランダムだから、かえって打開策を立てても。いきなり、攻撃の癖を変えられるし。レイアの能力は、全体攻撃、無意識下の攻撃、姿が見えない敵には相性が悪いと。まず、敵を探さないとな」

†

　ウォーター・ハウスは、モニカを連れて、イリス達とは離れた場所にいた。
　モニカは蒼ざめた顔をして、まだ震えている。
　昨日の件が答えたのであろう。襲撃され、ウォーターとイリスは大怪我を負った。
　さて、離れた棟に、イリス達を置いてきた。
　彼女達は今、どうしているのだろうか。
　もし、ルサールカが襲撃するとすれば、ウォーターの戦力をまず削ぐ為に、あちら側に向かって、イリス達を倒しに行くだろうが。
　ホーリィが向こうにはいる。ホーリィは人を殺した事が無い。
　なので、充分に撃退出来ると踏んでいた。
　それに。
　ルサールカはもう、此処に現れないのではないか、と微かに疑問に思っていた。
　それは根拠があったわけではない、ただ、何となくの直感というべきか。
　モニカはがちがちと、蒼白な顔色を崩さない。
　モニカは彼の事をまるで知らなかったが、ウォーターの方は彼女の事を理解していた。
　そして、……。
　突然、植物園の方角から、物凄い音がした。
　罠が発動したのだ。此処の住民以外の、抗体を持たない相手が侵入した場合、植物園の中にある種子を飛ばす植物は、毎分二千発の弾丸を発射して、それが四方八方から撃ち込まれるものだ。更に、抗体を持つものが付近にいると、その人間に流れ弾が当たらないように設計されている。
　作るのに苦労したが、もしあの場所へ誘い込んだら、大抵の敵は一撃の筈だ。
「敵だろうな、ルサールカか……？　いや」
　更に、遠くから物音が響いていく。おそらくは誰かが階段を駆け上る音だ。
　もし、ルサールカだったら、分身が致死量の攻撃を食らった時点で消滅するし、更に言えば、彼女の性格を考えると、おそらくは本体をすぐ付近に待機させないだろう。
　……なら、新たな敵か？

　昨日や今日、という偶然は考えるだけ無駄だ。
　ルサールカが単独で侵入する理由は無いし、そもそもルサールカを更に追って、新たな追っ手が侵入してきているという可能性もある。更にいえば、すでにこの城は、あらゆる敵によって包囲されているという可能性も高い。
「俺は、甘かったな。平穏な生き方も悪くないと思ったが」
　彼はすぐに覚悟する。
　彼の平穏は簡単に脆く崩れてしまう吊り橋でしかないのだと。
　そして、彼が連れてきた者の何名かは、確実に生き残れないだろう、と。
　ちょうど、複数ある塔の中央の塔に、彼はいた。
　まず、正門の側の塔にイリス達がいた筈だ。そこで何か破壊音がして、その後、中庭の植物園の、トラップが発動した。
　正門付近の塔にて音がした時は、向かおうかとも考えていたが、敵は彼を狙ってくるから放っておくべきだろうと考えていた。ライフラインも付いている筈だ。どの道、彼を守るだけの力が無いならば、此処に置いておいても仕方が無い。しかし。
　妙な胸騒ぎと、胸の不安を強く感じる。
「俺の感情の変化か？」
　此処には、モニカもいる。敵ならば、なるべく寄せ付けたくはない。
　彼は少し迷ったが、取り合えず、植物園を見に行く事にした。
　その前に、窓の指の隙間ほど、開く。
　空の方を見ると、飛んでいる鳥達の様子がおかしい、明らかに何者かが侵入した形跡を感じる。
　すると、更に庭中に仕掛けていたトラップが発動したみたいだった。
　更に、射撃音が響いた。
　どうやら、彼が仕掛けたトラップが発動したみたいだった。
　手応えは無さそうだ。敵は避けたのだろう。
　モニカが傍らにはいる。
　迂闊に、部屋を離れるわけにはいかない。
「ライフライン辺りが頑張ってくれればいいんだが」
　分かったのは、確実に敵は最低二人以上はいる事だ。

†

　植物園の前まで着いた。
　キマイラ・ヘッドはしげしげとその場所を眺めていた。
　小型のビニール・ハウスだ。
　こんなものが、城の中庭に置かれている。
　中には、様々な野菜や花、薬草などが植えられているみたいだった。

　キマイラはビニール・ハウスの扉に手を置いた。
「奴の姿が見えないわね」
「入っていくといいわ。隠れているだけよ……」
「そう」
　キマイラは扉を開く。
　そして、明らかに舌打ちをした。
「お前……」
　イリスは即座に決断した。
　ほんの一、二秒、決断が遅れていたら、彼女は即座に殺されていた事だろう。
　イリスは能力を発動させていた。
　キマイラのいた位置と、ビニール・ハウスの中に入ってすぐ傍に植えられている苗木の居場所が入れ替わる。
　キマイラは植物園の中へと入れられていた。
　イリスは扉を閉め切る。
　そして、走って逃げた。
　背後で、戦闘機の射撃音のような音が響いてくる。
　ビニール・ハウスの中に大量に植えられている、抗体を持っている城の住民以外で、近付く者を散弾銃のように蜂の巣にする植物が植えられているのだ。
　更に追撃として、ウイルスに感染させた花や虫から、大量の病原菌がばら撒かれる。
　ライフラインからつい先ほど聞かされていたが、イリス達のような城の住民を除いて、近付く敵を攻撃するトラップはすでに至る所に張り巡らせてあったらしい。
　イリスは走って階段を駆け上って、塔の三階まで上る。
　そして、窓からビニール・ハウスを見た。
　……倒したか？
　確かに、手応えはあった。
　明らかに、攻撃は命中した筈だった。
　しかし。
　……キマイラの死体が見当たらない？
　イリスの顔は見る見るうちに蒼ざめていく。
　自分はもうこれ以上は何も出来ない。
　もう、後はウォーターに任せるべきだ。イリスの方こそ、彼を探しに行かなければならない。いや、むしろ身の安全を考えて隠れる場所を探すべきか？
　既に、足は動いていた。
　足は四階へと向かっている。
　そのまま、五階へと登る。
「どっちが間抜けだと思う？」
　声は下の方から響いてきた。

　イリスはまた頭の中が真っ白になりながらも、最上階の六階を目指している。そこから、別の塔へと移れる通路があった筈だ。
「まんまと貴方の策に引っ掛かった私と。そのまま私に見られながら、塔に入って隠れている貴方と。しかも、塔中に貴方の足音が盛大に響いているし。……困ったわ。やっぱり、ちょっとダメージが大きいわね……」
　声は、ぜいぜい、と息を漏らしていた。
　イリスは走って、走って、逃げた。
　気付けば、相手は追ってこなかった。
　最上階にある通路を渡って、別の塔へと向かう。
　ウォーター・ハウスの処までは、辿り着けないかもしれない。
　ならば、取り合えず、今は隠れてやり過ごそう。
　イリスは隠れる場所を探していた。
　しかし、何処に隠れても見つかる気がした。なら、やはりウォーターと合流する方が、一番、安全だ。
　彼女は先ほど、キマイラが言っていた、ランプの明かりが付いている場所を目指す事にした。また、そこまでしばらく走る。
　こつん、と明かりのある場所の辺りで音がした。
　彼女は自然と口元が緩んだ。
　きっと、彼に違いない。モニカの可能性もあるが、モニカは彼と一緒にいる筈なので、イリスの安心は揺ぎ無かった。
　しかし。
　イリスは思わず、膝を付いた。
　先回りされていた。……。
　壁の中から、腕が出てくると、それは人の形へと変わっていく。
　見る見るうちに、全身から血を流す、キマイラ・ヘッドが現れた。
「期待させて悪かったけど。……一度、塔を降りて。此処に来たのよね。貴方が行くとすれば、此処だろうし。さっきはちょっと、頭に血が上って思わず、追いかけてしまったけれども。……仮に貴方が此処に来なかったとしても、私が本当に殺したいのはウォーター・ハウスだけであって、貴方じゃないから」
　ぜいぜい、と穴だらけのローブを纏って血を流すキマイラは、懐から煙草を取り出した。
　壊れたオイルライターを床へと投げ捨てる。彼女は煙の出ない煙草を口にくわえて、吸い始めた。
「ねえ、貴方、煙草って吸う？　火、貸してくれない……？」
　キマイラの眼は、少し混濁していた。
「何の慰めにもならないかもしれないけど。……貴方って、奴の仲間？　配下？　なら、貴方は使命をまっとうさせたわ。……肺にダメージが通った。……腹の臓器にも。それどころか、……心臓にも。……ウイルスの散布は流石に避けたけどね。……」

　キマイラは口元を押さえる。そして、ごぼっと赤い液体を大量に吐いた。
「ああ？　……どうやってビニール・ハウスから逃れたって？　……地面を潜ったのよ。今みたいに壁をすり抜けたみたいに。お蔭で、ダメージを最小限に抑えたつもりだけれども……。それでも、やっと此処に来れただけで……」
　キマイラは、微妙にイリスのいる方角を見てなかった。
　まるで、一人でぶつぶつと呟いているみたいだった。
「多分、もうじき私は死ぬ。その前に奴を殺そうと思っていたんだけれども、困ったわ……」
　……今、何を言って……？　イリスは彼女が何を言っているのか分からなかった。
　……もうじき、死ぬ？　私はこいつを倒したのか？
「困ったわ。……貴方だけでも殺してやりたいんだけれども。……、もう『カクテル・パーティー』を使う力が残っていない……。というか、自身の命を繋ぐだけで精一杯だ。さて、どうしたものか……」
　キマイラはしげしげと、イリスを吟味するように眺めていた。
「いや、ほんと、これってやっぱり、……危険よね。臓器に開いた孔がちょっと多過ぎる。他の組織と接合していっても、間に合わない程に。今、意識を失わないように、喋り続けているんだけれど。……私の能力は再生や治癒じゃないのよ、ああ……畜生」
　そして、何かを思い付いたみたいだった。
「白血球とかが、攻撃するわよねえ？　確か……。異物だと見做して。ねえ、臓器移植って可能なのかしら？　私の能力にそういう使い道があるかどうかは試しておくべきだったわ。……でも、貴方には先に死んで貰わないと。拳銃貸してくれない？」
　拳銃。……。
　言われて、気付いていた。
　イリスには、まだ彼女に止めを刺す手段がある事に。
　さっき、キマイラに向けていた拳銃は落とした。
　けれども、もう一丁、ポケットに閉まってある。
　自然とそれを取り出していた。
　そして、発射する。
　入っている、弾数分、発射する。引き金を引く音。
　何発か、キマイラに命中する。
　キマイラ・ヘッドは、その攻撃で、地面に倒れた。
　勝ったのだろうか？　イリスは銃を落とす。
　途端、緊張感が緩んだ。
　口元も緩んで、声を出して笑いを上げそうになる。
　試しに、片方の靴を脱いで、キマイラの頭に放り投げる。靴はキマイラの頭に当たるとそのままぽん、と飛んでいく。
　……死んだ。
　イリスは手を叩いて、喜びそうになった。彼女が倒したのだ。

ホーリィの仇を取った。それがもう、嬉しくて仕方が無い。
ふと。
気付くと、キマイラの隣に一個の黒い鞄が置かれていた。
それは半開きになって開いている。
鞄は、このキマイラ・ヘッドという女が持っていたのか。しかし、それなりの大きさをしている、服の中に入れたにしては妙に大きい。鞄は、表面の一部に、先ほどのビニール・ハウスでの散弾によって出来たであろう攻撃の後が幾つも生じていた。
本来ならば、こんなもの、無視するべきだろう。しかし、イリスの心がそうさせなかった。彼女の性質が、今度は裏目に出てしまった。
鞄の中身が知りたい……。
お金だろうか？　それとも、何かの武器？　何か大事なものだろうか？　いずれにしても、こいつが大切にしていたものだ。凄い物が入っているに違いない。
イリスは喉を鳴らす。唾を飲み込んだ。
確かめずにはいられない。それは、彼女のこれまでの生き方において、覗かずにはいられなかった。そして、物によっては、奪ってしまおうと。……。
そして、彼女はそれを、即座に後悔する事になる。……。先ほど、敵を騙し通せたのは、彼女のこれまでの生き方によって得た経験による賜物だが、その生き方の裏の面として、彼女は物欲や虚栄心などの欲望のまま生きてきた。
それ故、彼女の運命は決まってしまった。……。
彼女はその鞄を開けた。
中には奇妙な物が入っていた。
それは腕だ。生々しい、まだ動脈と静脈が脈打つ、一個の人間の腕がガラスケースの中に入れられている。腕は絶妙なまでにワイヤーで吊られており、特に指先の辺りが、決してガラスの壁面に触れないようにしてあった。
その腕は気味が悪かった。本能で言っている、触れてはならないと。
「……何これ？」
しかし、好奇心に負けてしまい。ガラスケースの蓋を開けた。
そして、どくん、と心臓が脈打つ。
これは、ヤバイ、アイテムだと。
途端。
強い力で自身の腕を引き伸ばされる。
そのまま、右手が、鞄の腕に触れてしまう。
すると、イリスの右手は徐々に腐り落ちながら、崩れていく。
「あ、ああっ？　……」
愕然とした。自分の右手が無くなっていく。更に腐敗は服にまで移り、服もぼろぼろに消滅させていく。
腐敗が、肘の辺りまで来て。

　イリスは自身の能力を使って、自分の右腕をコードのように切り離す。
　代わりに、近くにあった拳銃が、彼女の腕があった空間に移動して、地面へと落ちた。
「へえ、そんな事も出来るんだ」
　確かに、倒したと思っていた筈の声。
　どん、と背中を何か強い衝撃が走った。
　イリスは地面へと倒れる。
　右腕に痛みが無い。おそらくは相当な激痛を伴っているのだろうが、脳がそれを遮断しているのだろう。以前、落下して足がもげた人間が、自身の足がもげたという事実に、しばらくの間、気付いてなかったという話を聞いた事がある。
「貴方の性格なら、鞄を覗くと思ったから……貴方にこのまま逃げられたら、追う余力なんて無いから。……苦肉の策だったんだけどね……。成功に賭けるしか、私には余力が無かったから……」
　……そう。……精一杯やったけれど、最後の最後に間抜けだったのは私なのね。
　ぼそぼそっと、囁くような弱弱しい声音を聞いて、イリスは、慢心していたのは、強敵を倒したと思い込んでいた自分の方だった事に気付く。
　キマイラは、ほんの短い時間で、イリスの性格をある程度、見抜いていたみたいだった。
　最後の最後で、権謀術数で敗北した。鞄を無視して、このままこの場所から逃げれば、彼女の勝ちだった。それなのに、鞄を開けに近付いてしまった。
　本当の意味での敗北。
　それを知って、イリスは安心した。それなら、納得出来ると。単純な強さや弱さじゃなくて、自身のもっとも得意な能力での敗北ならば、と。
　イリスは眼を閉じた。
　暗い深海へと沈んでいく気分。感覚。
「……やっぱり、臓器を接合するのは無理か。……」
　キマイラは、抜き取ったイリスの内臓を投げ捨てる。
　そして、彼女の腰の中からライターを見つけると、煙草に火を点けた。
「火、借りるわよ……」
　ぷはあっ、とキマイラは口から煙を吹き出す。
　そしてその後、また吐血した。
　キマイラは壁に寄り添って、腰を下ろす。
　もうこれ以上、身体を動かすだけの余力がなかった。
　彼女は、落ちているレッドラムの腕を見つめる。
「私も、……楽に死のうかしら？　……」

†

　……もう確実に、何名かは死んでいるかもしれないな。

ウォーター・ハウスはそんな事を考えていた。
悪い事をしたような気分だろうか？　分からない。
助けに行くべきだったのだろうか。
しかし、彼にとって、仲間とはどういうものか分からない。
くっ、と彼は奥歯を強く噛んだ。
やはり、みな、固まっていた方がよかったかもしれない。
傍らにいるモニカは怯えている、今にも泣きじゃくりそうだ。
まるで、彼女は人形だ。弱く、脆い。
その弱さ故に、彼女が強い事を彼は知っているのだが。
ぴたり、とモニカの顔色が変わった。
完全なる蒼白だ。
むっ、と彼は、彼女の瞳を見る。
そこには、一つの人影が存在していた。
その姿は、……形を認識する前に、人影は消えていた。
「私の相棒も聞いたと思うのだけれども」
何の感情も燈らない声だ。
「何故、人を殺したい？」
その声は彼が始めて耳にするものだった。
たった少しの言葉であるのに、その声からはあらゆる感情が消失したかのような、得体の知れない独特の迫力を放っていた。
「お前は何だ？」
その誰何を無視して、更に声は言う。
「私の質問に答えていない」
彼は部屋を見渡す。しかし、誰もいない。
ウォーター・ハウスはふうっと、溜め息を吐いた。
「言っている意味が分からないが？　俺が何故、人を殺したい？　そんなものは分からん。それよりも、お前の方が、俺を殺したいんじゃないのか？」
彼は辺りを見回した、声の主を探す。部屋の扉を開く、大ホール。まるで見つからない。
「何処に……？」
途端。
彼は、一階のホールへと突き落とされる。
地面に激突する瞬間、全身を回転させて、体勢を立て直す。
彼がいた場所は三階だ。
この塔は、四階まである。
四階の手すりの上に腰を下ろして。
そいつは存在していた。
黒い装束の上に、白いローブを羽織っている。萌黄色のショートボブの少女。

　その眼は、氷よりも何よりも冷たい。
　そして、口元は、傲慢さと、意志と、僅かながらの嬌然とした少女性を帯びていた。
　その姿を目視したのは、おそらくは僅かな時間だった。
　いつの間にか、彼女は消えている。
　途端。
　腹を強く、殴られる。
　そのまま、壁にまで吹っ飛ばされて、全身を痛め付ける。
　もう、……本来ならば、二回は死んでいる。
　屈辱感でいっぱいだった。以前までの自分は何処にいったのか。
「守るべき者が出来たからか？」
　よく、知っている声だ。
　そいつはよく知っている。
　二ヶ月ほど前に、別れて、彼が一度は完全なまでに勝利した相手。
　そいつは、彼の目の前に佇んでいた。
　白と黒の、ゴシック・ロリィタの服を身に纏って。
　白く光り輝く金髪を靡かせている。
　両手には、二本の剣が握られていた。
「お前は自由になれたのか？」
　彼はそう訊ねた。

†

　レイアの拳の一撃で、壁にめり込んでいた男は立ち上がった。
　以前のような、何もかもが無感動な表情は無い。
　今はむしろ、何処か温和で、まるで戦争を終えた老兵が、残りの人生を家族と共に過ごす事を決意したかのような。
　彼はあっさりと、レイアの『リュミエール』を食らって、彼女を見失い、二発も殴られたのだった。まるで警戒心が無い。
　彼は何処か、何もかもが上の空のようだった。
「おそらく、イリス達は死んだかもしれんな……、お前の仲間か？」
　キマイラの事を言っているのだろう、オレは彼の様子を伺い、彼の質問には答えない。
「植物園の罠が発動した音が聞こえた。その後も、何かが動く音が聞こえてきた。あの、罠で倒せなかった相手となると、彼女達には勝つ術が無い。今すぐ向かいたい所だが。お前との決着を付けなければならないらしいな」
　オレは肩を竦めた。
「見に行けばいいだろ」
「そういうわけにもいくまい」

「ああ、もう一人の女の子だったら。少なくとも、オレ達は危害を加えるつもりはない。駄目か？」
　彼は、ううん、と首を鳴らしている。
「ウォーター・ハウス、もう、お前には何の理由も無くなっているんじゃないのか？」
「理由？　何の事だ？　お前と戦う理由か？　……」
「お前が人を殺す理由」
　そう。
　オレは彼の言葉の何かに憤って、此処まで来たのだ。
「お前は言ったんだったな。人間は滅びるべきだ、だったか？　それとも、どんな理由でも人は人を殺してもいい、だったか？」
「……言ったな」
「平穏な生活を脅かされた今の気分はどうなんだ？」
　オレはそう、言った。
　結局の処、ウォーター・ハウスは他人の痛みが分からない。それに尽きるのではないのだろうか？　腹立たしい奴、嫌いな奴は殺していい。それくらいなら分かるが。彼にはきっと、守るべきものも、大切なものも無かった。それだけでしかなかったのだろう。
　彼は立ち上がると、首をこきりこきりと鳴らす。
　そして屈伸運動を始めた。
「ああ、楽しかったよ。人を愛する事や、仲間を大切にする事。しかし、残念だ。十代の頃を思い出したな、友人がいた。あるいは幾つだったか、恋人と呼ぶべき者も確かにいた」
　彼は腕もべきべきっと鳴らしている。
　レイアは二階の手すりの上に腰を下ろして、オレに向かって言い放つ。
「あいつ、戦闘態勢に入っているわよ？　何というか、“変身”している」
　オレはレイアの声に耳を貸さない。
　元よりそのつもりだ。オレは全力のこいつを倒すつもりでいた。
「まあ、私は貴方の決着なんてどうでもいいけどね。どうせ、さっき殴った時に、拳に、『修羅蓮華』を纏っていたら、あいつ殺せていたから」
　レイアはせせら笑っているかのようだった。
　オレは掴んだ剣を固く握り締める。
「レイア、オレは殺人者になれるだろうか？」
　彼女はふん、と鼻を鳴らした。
　オレはウォーター・ハウスに対しての話を続ける。
「その友人や恋人はどうしたんだ？　大切だったんだろう？」
「殺した。理由は、覚えていない……。何だったか」
「そうか」
　ウォーターは、足の骨を鳴らしていた。べきべきっという音が響く。
　分かる。こいつの全身から、先ほどには無い殺気が這い上がるように湧き上がっているのが。

まるで、炎が温度を上げて燃え上がるように。
　以前のウォーター・ハウスだ。
　彼は両手に纏った包帯をまず、外していく。
　それは、普通の人間の腕をしていたが、徐々に甲殻類を思わせるそれに変わっていった。
「平穏はもう充分に楽しんだ。俺はモニカと共に、向かってくる者を皆殺しにする。以前のように、“暴君”とまで呼ばれていた頃のように、この世界に君臨するつもりだ」
「言っておくけれど、もう始めていいか？　腹まで開放させるつもりはないぞ？　その瞬間に、お前の両腕を切り飛ばす」
　ウォーター・ハウスは、オレの眼を見据えた。
　彼の顔の筋肉が引き攣っていく。そして、まるで所謂、鬼や悪魔、悪鬼の持つ、歪んだ表情へと変わっていく。
「お前ごとき、腹を使う必要は無い。それに言っただろう？　お前の攻撃はもう見切っていると」
　オレとウォーター・ハウスの距離は、大体、六メートルほどだった。
　レイアが見かねたように、ナイフを中央へと投げ落とした。
　ウォーター・ハウスの眼からは、おそらくはいきなり空間にナイフが出現したように見えたのだろう。
　ナイフは地面へと向かって落下していく。
　それが戦いの合図だ、どうやらウォーターも理解したみたいだった。
　オレはナイフの落下の前に、既に瞬間移動していた。
　オレの振り下ろした剣を、ウォーターは片手で掴んでいた。
「お前の攻撃など、すでに見切って……」
　すでに、オレは掴まれた剣を離して、もう一本の剣を彼の脇腹へと振っていた。
　そして、脇腹から右胸にかけて切り裂いていく。
　その攻撃のエネルギーを、そのまま瞬間移動させて、ウォーター・ハウスの顔にダメージを飛ばした。腹も胸も、剣で軽くなぞっただけの衝撃が残る。
　ウォーターは、咄嗟に顔を守ろうとするが、オレは既に地面を蹴っていて、右脚で壁に強い蹴りを放っていた。その攻撃のエネルギーを、更に追撃として、ウォーターの顔面へと飛ばす。
　割られた顔面に、更に打撃を入れられて、彼の顔は血塗れになっていた。
　反撃の隙を一切、与えるつもりは無かった。
　更に、壁を蹴った右脚を軸にして、全身を回転させて左脚による、回し蹴りを放つ。その衝撃を、彼の喉元へと飛ばした。
　ウォーターは、仰け反る。そして、両足で体勢を立て直そうとする。させない。
　オレは懐から、ナイフを数本取り出して、適当な場所へと勢いよく投げ付ける。
　それは、そのままウォーターの両手両足、顔面へ飛んでいく。
　数ミリ単位、離れた位置に移動させた為、これもまた避けられなかったみたいだった。
　ウォーター・ハウスの両手、両足、そして喉の奥へと、見事にナイフが突き刺さっていく。

　更に、オレは地面に落ちていた、二本の剣を手に取る。
　それを、片方を彼の顔面を切りつけるフリをして、もう片方を空へと向かって投げた。そのまま投げた方の剣が、ウォーター・ハウスの脇の下から飛び出してきて、ウォーターの左腕を切断した。
　くるくる、と二本の剣を回転させ続ける。
　次は、両足を切断しようと、考えていた。
　刹那。
　突然。
　全身が動けなくなった。
　いや、動かす事は出来る。しかし、何か重い。
　オレは焦って、ウォーター・ハウスの近くから離れた。
　すると、全身の襲い掛かる重さは軽減されている。
　どうやら、肉体の所々が凍り付いているみたいだった。
　ウォーターの周囲には、氷の膜が張り巡らされている。
　もう一人の敵だ。
「こいつの能力の名前は『ヨルムンガンド』といってな。お前の『フェンリル』を意識して名付けたんだが。……それから、能力もまた、とぐろを巻いた巨大な蛇みたいでな」
　言うなり、ウォーター・ハウスは、壁に拳をめり込ませる。
　そしてそのまま、壁を破壊して、切断された腕を拾って、外の方へと出て行く。
　……逃げられた。
　二階では、レイアが苦笑するような顔をしていた。
「貴方、倒せていたわよ？　たとえば、ナイフを首に捻じ込んだりすれば、死んでいた可能性が高い」
「ああ、甘いなオレは。駄目だ……」
「どうする？」
「決まっている。追う」
　一応、言っておくけど、と彼女は告げる。
「体勢を完全に立て直されているだろうから。今みたいに翻弄、圧倒する事は無理だと思うわよ？」
「……分かっている」

第四章　大地を呑み干す獣達。

「で、お前は一体、何をしているんだ？」
　何処から入ってきて、いつの間にいたのか分からない。
　確かに、そいつはそこに存在していた。
　ブエルは、パソコン越しに、そいつの存在を感じている。
　何故か、皆、そいつの存在は知っている。
　捻じ曲がった金色の髪型。全身、真っ黒のドレス。
　円環と呼ぶ者もいるが。
　こいつは、主に『メビウス・リング』と呼ばれている。
　能力者である事は確かだ。
　ドーンの者達の間では、何故か、皆、知っている。
　それ自体、“認識を捻じ込む”、という彼女の能力なのかもしれない。
「君は何者だい？」
　ブエルは訊ねた。
「それは私自身も知らない。私はある能力者が、人間大の球体関節人形に意志を吹き込んだ物体でしかないからな。只、役割だけは与えられている」
　そいつは冷然と言い放った。
「『リフリジレイター』を発動させているのは、お前だろう？」
　冷蔵庫という意味のその名前。
　そいつが最近現れたのは、半年以上前、アイス・エイジという場所でだ。
　そこに冷蔵庫は現れて、炎猫というフリークスの女を媒介にして、この世界に混沌を撒き散らそうとした。彼女はその現象を止めた。
「メビウス・リング。君はやはり『神』なのかい？」
「……私にも分からない。お前の方が分かるんじゃないのか？」
　ブエルは黙る。そして、口元を三日月形に歪める。
「さあね？　でも、元々はチェラブの意思だよ。そして、ハーデスも絡んでいる。実は、僕は、この施設でやっていた事の引継ぎをしているだけなんだよ」
「単刀直入に述べる。私はお前を始末しに来た。死んでくれるか？」
　ブエルは声を上げて笑う。
「へえ？　神様自らが僕を？　神の秘密に近付いたからかい？」
「違う。お前がリフリジレイターを発動させようとしているからだ」
「何故、僕なんだい？　たとえば、先ほどのフレイム・タン、それからウォーター・ハウス、少なくとも、彼らは世界を滅ぼしたいと考えている。それは君が神様ならば、止めるべきだろう？
　それから、この世界の脅威は他にも幾らでもある。たとえば、青く悪魔。たとえば、デス・ウィング。彼らは君が始末するべき相手じゃないのかい？」
　メビウス・リングはまるで見下したように彼を見た。

　完全に見当の外れた事を言っている、そういった嘲笑。
「今、名前を挙げた者達は、リフリジレイターを降ろしていない。おそらくは、これからもだろう。私はそれ以外では出向くつもりは無いし。たとえ、この世界が亡んだとしても、私は干渉するつもりは一切、無い。おそらくは、私を作った人形師の意志が、私に受け継がれているだけだろう」
　彼女は、彼女しか分からない内容の話をする。
　しかし、ブエルは彼女の話を理解していた。
「この世界の秘密を彼女は持ち帰ってきた。この世界、多重の次元と空間が重なり合って。この次元中に溢れている能力者達、彼らは、“存在出来なかった”可能性、文明から降下してくるんだろう？　生まれなかった世界。生まれなかった可能性が、突然変異的に降りてくる。しかし、世界を滅ぼしても、次元が重なっている以上、一つや二つ、世界を滅ぼした所で、他の次元は滅びない。でも、可能なんだろう？」
　彼は嘲笑するように言った。
「たとえば、『リフリジレイター』ならば」
　メビウス・リングは、ふんっと溜め息とも舌打ちとも付かない声を放つ。
「一応、言っておくが。私は神じゃない。神が何なのか分からないが。そして、私と対を為す、リフリジレイターもまた、神ではない。しかし、確かにお前達の認識においては、それが近いのかもしれない。この世界の認識以上の存在。少なくとも、私達はそれを抱えている。しかし、お前が知ったといかいう秘密。存在出来なかった可能性とかいうのは、この世界の秘密の一つでしか無いんじゃないのか？　何故なら……」
　彼女は何かを言おうとしていた。
　それは彼女が握っている秘密だ。
　ブエルはせせら笑う。
「リフリジレイターとかいうのは、その『神の世界』を能力者に下ろす現象なのだろう？　そいつは君が人形師に作られたかのように、何かの起源があって、“道化師”の姿をしていると聞く。あの少女は、様々な情報を僕に持ち込んでくれた。しかし、君は残念だったね、もう“発動”させたよ」
　そう言った瞬間、この場の空間が捻じ曲がる。
　パソコンのディスプレイは完全に破壊されて、ブエルの肉体は、まるで雑巾でも搾り取るように、握り潰されていた。
　ブエルはそうやって、死を迎える事になる。
　肉体的には、完全なまでに死んでいた。
　ブエルの肉体は、部屋中に四散していく。
　彼女の『ウロボロス』という、空間を捻じ曲げる事が出来る能力によってだ。そして、ブエルの肉体はそのまま捻り続けて、圧縮していき、小さな塊へと変わっていく。
　それは、ベスティアリーの空間圧縮を、明らかに超えている力だった。
「この世界に“限界”は無い。この世界の流転は“無限”だ……。そう、たとえて言うなら、尾を食ら

う蛇のように。無限に在り続ける。それを拡散しようとする意思。世界をどれだけ破壊しようが、滅ぼそうが、その意思に比べれば、どれ程、可愛いものか」
　彼女は部屋を出て行く。
　何も無い、暗黒の空間が現れた。
　彼女は、その部屋へと入って、すっかり消えていった。

†

　ウォーター・ハウスはモニカを連れて、中庭へと向かっていた。
　彼女の足は遅いので、面倒臭くなって、背中に担いでいた。
　モニカは不安そうに、彼を見ている。
　まず、植物園を覗いておきたい。
　それから、イリス達の安否を確認しておきたい。
　甘名達と戦うのは、それからだ。
「あの女、あの女に殴られた時、俺は死んでいた可能性が高いな」
　植物園へと着く前に、敵の能力の分析を行っておきたい。
　あの女の表情。あの表情は、確かに彼をまるで高みから見下ろしているかのようだった。という事は、間違いなく、あの瞬間に、彼女は簡単に彼を手玉に取る事が出来たという事だ。ならば、彼女には彼を簡単に殺す事が出来る手段が存在する。
　そして、何よりも、一体、何をされたのか分からなかった。
　敵は、透明になる事が出来るのだろうか。
　あるいは、モニカのヨルムンガンドのように、微妙に光を屈折する事が出来るのだろうか。
「何か知らないが、かなりヤバイ相手である事は確かだ」
　この辺りには、蝿などの昆虫を片っ端から、ウイルスに感染させている。そのようなトラップも潜り抜けてきたという事は、それらが効果を発揮しないという事だ。
　植物園に辿り着く。
　やはり、明らかに攻撃の痕が見えた。
　抗体を持つ相手は避けるように調整して、全方向から植物の種が最新のマシンガン並の精度と速度で発射されるようになっている。それが、植物園のビニールを突き破って、幾つもビニールに穴が開けられていた。
　そして、明らかに敵に命中したらしく、血の痕が大量に撒き散らされている。
　ウイルスは、微妙な温度差によって、植物園の外に漏れ出したら死滅するように調整してある。となると、敵はおそらく、逃げ延びている。
　モニカが背中で震えていた。
　そう、他の者達の安否を確かめなければならない。
　彼はイリス達がいる場所へと向かった。
　そして、途中、“ある物”を見つけた。

　それは、彼がよく知っている“物”だ。
　ウォーターは溜め息を吐く。
　モニカは思わず、泣き出しそうになった。
　彼は彼女の口を押さえる。
「……イリスもおそらくは。この攻撃はルサールカじゃない……、まだいるのか」
　そして、おそらく、ルサールカの方は、もう此処にやってこないだろう。
　多分、背中の少女が始末したと思っている。
　彼は掴んだ、ホーリィの首の切断面を見た。
　綺麗な切り口ではない、何かで溶かされたかのような。
　ホーリィの首がこんな場所に転がっているという事は、ライフラインも敗れたという事だろう。それもあっさりと。
　モニカは、その場に蹲って、耳を押さえていた。
　彼は考える。
　どうしたものか。
　……モニカを連れて、この城から逃げるか？
　しかし、今、敵を全員、倒しておかなければ、どうせ後々に面倒臭くなるのは確かだ。出来れば、此処で決着を付けておきたい。
　彼は植物園から少し離れた場所まで来た。
　そこは、城の中には不自然に洞窟があった。
　彼はモニカをその中に入れる。此処は、シェルターとして作って置いた場所だった。
「此処に入っておけ、鍵は中から閉められる。決して、出るなよ」
　そう言って、ウォーター・ハウスは甘名達の方向へと向かった。
　モニカの能力の正体はもうバレている。なら、足手まといでしかないし、そもそも、彼は味方がいる事自体、弱み以外の何物でもないのだ。

†

　レイアは二階の、ウォーター・ハウスがいた部屋へと上がった。
　見ると、あの少女も何処かへと消えていた。
　窓は開いている。
「さて、どうする？」
　ウイルスは撒き散らされていない。
　本当に只、逃げられただけかもしれない。
「もし、私が奴ならば、どうするか？」
　レイアの存在はもう教えている。
　だとすれば、対抗策も練ってくる筈だ。
　しかし、彼女の能力の全容を理解しているとは思わない。

　甘名はこの部屋にまだ来ていない。
　というか、彼は此処に来る意味は無い。
　空間把握の能力で、この部屋がどうなっているのか知っているだろう。
　レイアは窓から飛び降りる。
　そして、ウォーター・ハウスが向かったであろう場所を探した。
　地面を見る。足跡が続いている。
　二人分の足跡が、途中から一つになっている。そして、足跡がより深くなっている。
　おそらくは、ウォーターはモニカを背負って逃げているのだろう。
　どちらにせよ、この足跡を辿れば、奴の下へと行ける。
「追う？」
　レイアは後ろにいる甘名に訊ねた。
「いや、……奴はおそらく、オレと決着を付けるつもりだ。遠距離からウイルスを撒き散らしてきたら、君の防御壁で止まるし。問題は近距離だな。もし、奴があの女の子を捨てて、一人で向かってきたら、ヤバイ……」

†

　ウォーター・ハウスは現れた。
　彼は既に、両腕の包帯を解いている。
　そして、腹の包帯も、半分、解けていた。
　オレは身構えた。
「仲間が全滅していてな。殺したのは、お前の仲間か？」
「……分からないが、多分、そうだろう」
「そうか」
　彼の眼は極めて、冷静だった。
　怒りも悲しみも感じない。
　オレはつい訊ねた。
　自分の中からはっきりと、悪意が湧き上がってくるのが分かる。
　暗い意思が、オレにもある。
「自分の大切な者達が死んだ気分はどうだ？　いや、はっきりと他人に殺された気分は？　自分の手で殺したなら、独占欲の延長かもしれない。しかし、他人に殺された場合はどうなんだ？理不尽だし、憤るだろ？」
「分からないな。……しかし、お前とは決着を付けなければならないらしい。面倒臭いからな」
　薄笑いすら浮かべている。
　彼との距離は、十メートル近くはある。
　オレは斬撃を飛ばした。
　ウォーターはそれを難なく避けると、自身の腹の包帯を解放した。

　殺人ウイルスが辺り一面に撒き散らされる。
　オレは包帯を解いた隙を突いて、更にもう一撃、斬撃を放っていた。
　ウォーターはそれも難なく避けると、こちらに近付いていく。
　オレは敢えて、後ろへと飛んでいく。
　彼は驚いた様子も無く、訊ねた。
「……ウイルスに感染しないのか？　何故だ？」
　オレは答えない。
「フェンリル。お前は俺を殺せないらしいが、もう一人の仲間にどうやら、俺を殺させたいらしいな。お前は最後まで殺人は犯さない、と。ほほう、随分と舐めていやがる」
「オレはお前を叩きのめせれば、それでいいからな。負けを認めさせたいんだ」
「なら、二対一というのは何だ？」
「二対二じゃないのか？」
「いや、ヨルムンガンドのモニカはもう使わない。彼女は今、安全な所にいる」
「そうか、なら何の遠慮もいらないな」
「そういう事だ」
　オレだけには見える、レイアの防御壁は徐々に腐敗するように剥がれていっているのが分かる。しかし、後、数分は充分に持つだろう。
「お前が一人だというなら、オレも一人で戦う。“彼女”には手出しをさせない」
　ウォーター・ハウスは、ふうっと大きく息を吐いて、溜め息と深呼吸、どちらにも見える動作をした。
「何で、ウイルスが効かないのかはこの際、どうでもいい。お前の首をへし折るなど、幾らでも殺す手段はあるからな。問題は、もう一人は一体、何なんだ？」
「答える親切心は、オレには無い」
　ふんっ、とウォーター・ハウスは、不満そうな顔をしていた。
「じゃあ、言うぞ。もし、一対一で戦うとしたら、俺を余り侮辱するな。二対一で掛かって来い。不愉快だ。お前の相棒がどんな能力者だろうが、纏めて殺してやる」
　こいつ。
　明らかに、先ほどよりも強い。
　いや、これがウォーター・ハウス本来の強さなのだろう。
　何も守るべきものが無い。何にも執着しない。純粋に人を殺す、敵を殺す、それ一点のみに到達した性格と能力。
「いいか。この前は悪かった。俺の切り札を見せずに戦って。先ほどもだ。言ったな、俺には、腹の先に更なる能力がある、と。お前がどういう方法で、俺のウイルスをガードしているのか何かどうでもいい。何かのバリアを張っているのか、それとも次元をズラしているのか。ひょっとすると、モニカみたいに、冷気で止めているのかもしれないな。いや、熱でウイルスを殺しているのかもしれない。しかし、どうでもいい」
　彼は首をこきりこきりと鳴らす。まるで禍々しさが辺りに浸透していくかのようだ。

　オレは攻撃を躊躇した。その際に、むしろオレの方に隙が生じるだろうからだ。
　こいつが、今、何をやろうとしているのかを見極めなければならない。
「本当は、ハーデス相手に使うつもりだった。奴のアトミック・ソードが何をやろうが関係無いくらいまでに、俺は“進化”したかった。お前ごときに使うのは少々、尺だが、ああ、それと」
　彼は背中に腕を伸ばす。
　そして、自身の皮膚を引っぺがした。
　そして、瞬時に、何かをオレの右上後方へと飛ばす。
　塔の上によじ登って観戦していたレイアは、難なく、修羅蓮華の拳でそれを弾き飛ばし、いや、殴って消滅させた。
　ウォーター・ハウスの背中からは、一本の尻尾が生えていた。
　それは、サソリのそれに似ていた。色はエビのようにも見えるし、蜘蛛の脚のようにも見える。
　毒針を飛ばしたのだろう。それも、レイアの位置を何らかの理由で察知して。
「時間を止めているわけではないんだろう？　もっとも、そんな事が出来る奴は聞いた事が無いが。それから、空間を操っているわけでも無さそうだが？」
「何を言っている？」
「もう一人の女の能力だ。透明になるとか、光を反射、屈折するにしては、そんなちゃっちい能力ともまるで思えない。一体、何をやっているか分からないが。俺が『脊髄』を開放してしまえば、まるで関係が無い」
「……甘名」
　レイアは叫んだ。
　その声は、ウォーター・ハウスには届いていない。だから、彼女は話す。
「そいつ、おそらく貴方の表情で私の存在、位置に気付いたわよ。多分、貴方の視線が、無意識のうちに、私のいる方向に行っていたか。視線でなくても、身体が何となく、私のいる場所を意識していたか」
　彼女は露骨に苦笑の溜め息を吐く。
「そして、そいつが言っている『脊髄』には気を付けた方がいい」
　言うなり、レイアの辺りに、毒針を飛ばし続ける。
　彼女は塔から飛び降りて、それら全てを避ける。
「私にそんなものが届くか」
　ウォーター・ハウスは、地面の辺りを眺めていた。
　透明になっているわけではないので、レイアが着地した瞬間の足跡も、彼の眼には認識出来ていない筈だ。
　しかし。
「ふん、そこにさっきの女がいると分かっただけで充分だ。お前らはもう終わりだ」
　彼は、尻尾を今度はオレへと向ける。
　そして、毒針の弾丸を飛ばし続ける。

　オレは、軽く移動して、それを割ける。
　更に、避けた場所に、毒針が飛んできた。
　ウォーター・ハウスの背中の尻尾は、今や二つになっていた。その二つ目の尻尾からの、毒針の攻撃だった。オレは、体勢が整わず、仕方なく、剣で全て弾き飛ばす。
　終わりだ、と言っておきながらも、こいつのやっている事は、牽制でしかない。一体、何を考えているのか。
　オレは、すぐに気付いた。
　こいつは、時間を稼いでいる。
「さっさと脊髄とやらを使わないのか？」
「……時間が掛かるんでな。まず、腹を解放する必要がある。それは既に、行った。……しかし、何故か、お前は腹が効いていない。……その後にも、自分自身に対して、抗体を作る必要がある」
　オレの周りの防御壁は、もうじき完全に崩れる。
　それに気が付いたのか、レイアが再び、オレの周りにエタン・ローズの薔薇を巻き付けた。再び、オレの防御は元に戻る。
　彼はぴくりと眉を顰めた。また、オレの微妙な表情の変化に気付いたのだろう。
「見えない、もう一人が何かしているのか？　まあ、いい」
　彼は地面を踏み鳴らした。
　そこから、キノコやカビなどの菌類が発生して、オレの元へと走っていく。更に、彼は口から何かを吐き出した。どうやらそれは、寄生虫のように体内に隠していたのだろう。ノミみたいだった。ノミが何体も、オレの元へと向かっていく。
　ノミはオレの元に近付くと、突然弾け飛んだ。
　そして、オレの周囲の細胞壁の一部を破壊していく。そしてその場所を中心に、更に、細胞壁が破壊されていく。
　オレは仕方なく、その部分を剣で切り離して、瞬間移動させた。
「なるほどな。見えないバリアがあるのかな？」
　言いながら、彼は背中の尻尾から、毒針を飛ばし続ける。
　オレは避けながら、剣を振って、彼の背中の尻尾を二つとも切り落とした。
　レイアはじれったそうにしていた。
「私も戦おうか？」
「いや……」
　そう言った瞬間だ。
　ウォーター・ハウスの全身が、一瞬、発光したように見えた。彼の肉体という肉体、血管という血管に、光の筋が走っていったような。
　オレは唾を飲んだ。
　来る……。
　ウォーター・ハウスは、自身の首の後ろに指を突き立てる。

　その瞬間、レイアは光の弾丸を飛ばす。
　オレも咄嗟に、剣撃を飛ばして、彼の腕を切断しようとする。
　しかし、彼は光弾こそ命中したものの、オレの攻撃は避けて、首の後ろの皮膚を引き千切った。
　その瞬間、明らかに周囲の空間がおかしくなっていく。
　ウォーター・ハウスを中心に、地面が抉れていく。
　その攻撃が何なのか分からないが、オレとレイアは咄嗟に距離を離した。
　レイアはウォーター・ハウスへと光弾を飛ばす。
　光弾は確かに、彼へと命中して、皮膚を焦がすが、そんな事よりも、明らかに命中する瞬間に、光弾は縮まっていた。
　レイアはオレを掴んで言った。
「甘名、もっと遠くまで飛んで。おそらく、あいつの『脊髄解放』とかいうのは」
　オレは彼女を連れて、瞬間移動する。
「ウイルスに感染しない存在を、感染させる。それが無機物だろうと、何だろうと。おそらくは、大気すらも食い破るのかもしれない」
　オレはそれを聞いて、思った。
　もし仮に、あいつに攻撃して、その衝撃のエネルギーすらウイルスが食い破るというのならば。……たとえば、爆弾による衝撃、それをウイルスでガードする事が可能なのか？
　分からないが、たとえば、周囲にウイルスを張り巡らせておけば。あらゆる攻撃を、擬似的にガードする事が出来るというのか？
「よく分からないけれども、たとえば、ウイルスは有機物と無機物の中間みたいなもので。生物と無生物の中間の存在。たとえば、銃で撃ったり、爆弾を爆発させる場合、そこに必ず、分子運動が起きる。その分子運動自体を破壊する現象を引き起こせるのならば……。詳しくは分からないけれども、とにかく、奴の脊髄解放とかいうのは、何でも感染させる力があると思った方がいい」
　まるで黒い竜巻のようだった。
　それが、ウォーター・ハウスのいる場所の周りに荒れ狂っている。
　地面は食い破られ、城も次々と腐敗するように崩れていく。
　レイアはふと何かに感付いたみたいだった。
「でも、多分、何でも食い破れるわけじゃない。おそらく、奴の能力はウイルスであり、ウイルスでしかないのだと思うわ。ウイルスが生物の細胞の隙間を浸食しているならば、奴の脊髄開放は、物質の分子の隙間に浸透していき、断裂を起こしている。無生物を、生物であるかのように、認識して感染させていっているのよ。だから、空間を断裂しているわけじゃない。空間自体を消し飛ばしているわけでもない」
　レイアは続けて、黒い竜巻へと向かって光弾を飛ばし続けている。
　それらは、竜巻に飲み込まれると、しばらく飛んでいくが、徐々に消滅していく。そして、更に黒い竜巻は霧のように辺りに広がっていく。

「ならば、『修羅蓮華』であの攻撃を破壊する事が出来る。けれども、拳大の攻撃じゃ、どうにもならないわね」
　問題は、ウォーター・ハウスをどうすれば殴れるのかという事だ。
　勿論、ウイルスは無差別攻撃なので、レイアのリュミエールの能力は役に立たない。
　オレ達は、城の外へと出ていた。
　なるべく、森の中へと移動していく。
　周囲から羽音が聞こえた。
　それは、蚊だった。こんな極寒の地に蚊が生息している。
　弾き落とそうと思って止めた。
　既に、こいつは感染している。
　おそらくは、殺せばウイルスが漏れ出て、吸血されると、体内にウイルスが入るのだろう。
　しかし、蚊はレイアを認識している。
　レイアは鼻で笑った。
　リュミエールが発動して、蚊は何処かへと飛んでいく。
　ウォーター・ハウスはレイアの能力の全容を理解していない、だからこんな遠距離攻撃を使ってきたのだろう。
　しかし、その認識は間違いだった。
　小動物だった。
　野うさぎが草木の中を跳ねていた。
　その野うさぎを、蚊は集まって刺していく。
　オレは蒼ざめた。
　野うさぎは見る見るうちに、身体が肥大化し、赤い斑点を作り出し、死んでいく。そして、それを起点にして、近くの草木や、それどころか地面もぐじゅぐじゅに崩れていく。
　更に。
　この辺りは、どうやらヨルムンガンドの圏内で、あの少女は、自身の能力をまだ解除していないようだった。
　入ってきた時と同じように、氷点下の壁が幾つも張り巡らされている。
　勿論、あの少女を探して、能力を止めさせる事に意味は無い。
　オレ達は、ウォーター・ハウスを倒しに来たのだから。
「そう、こうやって戦略的に逃げているだけで腹立たしい」
　オレはすぐに、この場所も離れた。
　もう、攻撃は竜巻ではなく、霧に見えた。その黒い霧に汚染されていない場所へと向かう。
　おそらくは、ウォーター・ハウスは城とこの辺り全てを、脊髄解放のウイルスによって破壊し尽くすつもりなのだろう。しかも、どうやら、ウイルスの流れは、彼が自由にコントロール出来ているようにも見えた。
「私の攻撃が途中で消滅してしまうって事は、細胞壁を作っても、すぐに破壊されるでしょうね……」

　彼女は何か、アイディアを思い付いたみたいだった。
「……倒す手段が無いわけではないわ。甘名、何処まであいつに近付けるかが問題ね」
「それは？」
「ええ、私達二人の能力ならあいつを充分、倒せる」
　彼女は光弾を飛んでくる、虫へと飛ばした。
「ねえ、私のこの光弾、瞬間移動出来るわよね？」
「それは勿論」
「なら、もう私達の勝機は揺るぎ無いわ」

†

　ウォーター・ハウスは、脊髄解放によって行われた破壊現象の中心にいた。
　彼の腹開放によって出現したウイルスが、更に脊髄から吐き出される特殊な細菌によって、腹開放のウイルスが進化を遂げるという能力だった。
　全ての物質が、有機物のようにウイルスが浸食し、食い荒らしていく。
　大気を食っている為か、周囲は暗闇となり、月の光を閉ざしていた。
　地面も抉られ続けるが、立っている場所が覚束なくなるので、地面へと向かう浸食は抑えつつある。
　そして、モニカのいる辺りの洞窟には決してウイルスが向かわないように、脊髄の能力をコントロールしていた。このままだと、この城と城の周囲全ては廃墟と化していくだろう。
　フェンリルの瞬間移動の能力は十二分に理解している。
　もう一人の女の方も、何をやっているか分からないが、少なくとも、彼のウイルスで倒せるだろう事は分かった。たとえ、姿を消そうが何だろうが、彼の能力に感染したら、ぼろぼろに崩れていく筈。
　突然。
　何かが飛んできた。
　いや、そこに現れた。
　フェンリルの斬撃ではない。
　いや、瞬間移動による攻撃なのだろうが。
　それは、彼の肩に命中する。
　彼の肩は、まるで砂粒のように崩れていった。
「……何？」
　明らかに、フェンリルの攻撃ではない。おそらくはあの女の能力だ。
　それが、瞬間移動して、飛んできている。
　避けるべきだったが、次々と攻撃を食らう。左腕、左足の一部が抉れていく。ぎりぎりで直撃を避けているが、間合いがまるで分からない。
　何をやっているのか、には気付いた。その攻撃が当たった場所は、どうやらウイルスが、一瞬

だけ死滅しているみたいだった。
……物質を分解しているのか？
ウイルスの大きさを考えれば、おそらくはこいつは、素粒子単位で物質を分解しているのだろうか？
……分解？　分解という事は離している、という事か？　こいつの能力は何だ？　いや、そんな事は今はどうでもいい。
問題は、どういう現象が起きているか、という事だ。
しかも。
どうやら、彼の位置は把握されている。フェンリルの空間把握の能力だろう。
彼のウイルスによる攻撃は、モニカのように空間自体を変質させているわけではないので、空間把握の能力が効果を及ぼすのだろう。しかも、視界を悪くしているのは、彼自身の能力の影響だ。
「という事は、一方的に不利なのは、実は俺の方なのか？」
彼は、一端、脊髄解放を止めようと思った。
抗体は既に作っているので、しばらくは即座に脊髄解放の攻撃に移せる。
そう考えているうちに、今度は脇腹を思いっきり抉られた。
……くっ。
彼は自分で作った黒い霧の中から、抜け出す。
周りを見る。あの二人の姿が見えない。
既に、腹開放のウイルスは撒き散っている。しかも、それも効果が無い。
辺り一面は静寂だ。まるで動くものが無い。
彼は自分を攻撃しているものの正体を見極める必要があった。
そして、それは現れた。
それは、まるで炎のようにも見えたが、炎ではない事はすぐに分かった。
それは、黒い。闇よりもなおも黒い花の姿をしていた。
確か、蓮という花だろう。その形に似ている。
それは、彼の目の前、数センチの所に現れている。
それを、認識した瞬間には、既に彼は、コンマ一秒以内で、その攻撃を避けていた所だった。その黒い蓮は、彼のいた空間をまるで飲み干すようにして、消えていく。
攻撃方法は分かった。
しかし、何処から攻撃しているのか。いや、何処からかは問題ではない、どうせ瞬間移動で場所を変え続けているに違いない。問題は。
どうやって打開するべきか、だ。
腕、背中の尾からの毒針。羽虫による感染。腹開放。そして脊髄解放まで破られてしまった事になる。
どうやって勝つ？　彼は自分が相手にしているのは、怖ろしい程の強敵である事をようやく認識していた。

しかも、もう一人の女はフェンリルと違って、彼を殺す事に躊躇が無いように感じた。だから、人を殺せない、というフェンリルの弱さに付け込む事も出来そうにない。
いや……。
まだ、負けたわけではない。
確かに、今は戦局が不利だ。彼が扱える能力の全ては打開された。
しかし、彼が扱えない能力ならば？
彼は、後、一つだけ。切り札を残している。
それは、果たして切り札と呼んでいいものなのか。出来れば使いたくないものではあったのだが。……。
そして、それを使って、一体、この世界がどのようになるのかはまるで分からない。
とにかく、使ってはヤバイ奥の手なのだ。しかし、使わずに死ぬのは悔やまれる。
敵は、彼の動きに不穏を感じたのは、先ほどの蓮の攻撃は撃ってこない。ひょっとすると、相手も攻撃に躊躇いがあるのかもしれない。こちら側に、何か策があるのではと邪推しているのかもしれない。
余り、期待は出来ないが、彼は植物園のある辺りへと向かった。
追撃は来ない。
彼は全方向に注意を払いながら、植物園へと向かった。

†

オレとレイアは、ウォーター・ハウスの脊髄解放の打開策は見つけたものの、決め手に欠けていた。
瞬間移動で飛ばす修羅蓮華の攻撃を、ウォーター・ハウスが紙一重で避け続けるからだ。
黒い霧が晴れていく。どうやら、ウォーターはあの場から移動したみたいだったが、何かを企んでいるかもしれない。
「何か策があると見せかけて何も無いかもしれないわよ？　逆に、策があるフリをして、騙して。こちらに隙を作らせようという手段なのかも」
ウォーターが向かっている場所は中庭の辺りだ。
オレが決断する前に、先にレイアがそこへと向かっていく。
「どの道、倒すから関係無いけどね」
中庭の辺りだ。
そこには、場違いにも、ビニール・ハウスがあった。
レイアはぴくりと、動きを止める。
「どう見ても、トラップにしか見えないわね」
「ああ、あそこにある植物全てが、何かしらの攻撃をしてくるんじゃないのか？」
空間把握を使う限り、ウォーター・ハウスはビニール・ハウスの中で待ち構えていた。
入って来い、という事だろうか。しかし、そんな馬鹿な事はとても出来ない。

　レイアはビニール・ハウスへと光弾を次々と放っていく。
　ビニール・ハウスに穴が開いていく。
　突然、ビニール・ハウスが炎に包まれていく。
　ウォーター・ハウスが火を放ったのだろう。
　レイアは何かに気付いたみたいだった。
「甘名、飛んで。しかも出来るだけ遠くに」
　オレはレイアを連れて、瞬間移動した。
　建物の中に移動すると、レイアはオレの頭を掴んで、地面に伏せた。
　すぐに、爆発音が響いた。
　ビニール・ハウスを中心にして、辺り一体が爆発したのだ。
　破片が飛び散っていく。
　おそらく、破片の一つにでも命中すれば、たちまちオレ達を取り囲む細胞壁のガードに穴が開き、そこからウイルスに感染したのだろう。
　ウォーターはどうやら、オレ達がどうやって、ウイルスを防御しているのか、大体、理解しているみたいだった。
　しかし、こんなものは小手先だ。
　オレは空間把握を使って、あちらを眼で覗く事無く確かめる。
　爆発に自らも巻き込まれて、破片で全身に傷を負ったウォーター・ハウスの姿が分かる。彼は何かをしているようだが、一体、何をしているのだろうか。
　どうやら、両胸を押さえているみたいだった。細かい事は、何をしているのか分からない。
　オレは窓から少しだけ、その光景を覗く。
　ウォーター・ハウスの胸は剥き出しだった。
　胸には両穴が開いている。腹の口腔と合わせて、まるで。
「……髑髏のようだ」
　両胸の穴と腹の穴を合わせた形、それは死そのものを連想させる、人間の頭蓋骨の形に似ていた。
　オレは呟いた。
　胸の穴。そういえば、彼は切り札として、胸の存在も明かしていた気がする。
　胸は一体、何をするのだろうか？
　脊髄は、何でも食い破るウイルスだ。では、胸は？
　胸から微かに、煙のようなものが見えた気がした。
　レイアは厳しい表情を見せていた。
　そして、彼女は自分と、オレに、更に防御の棘を巻き付ける。
　既に、攻撃は発動しているみたいだった。
　そして、どういった攻撃なのかも理解した。
　辺り一面が、月の光すら貪る暗黒へと染まる、そして壁という壁が食い破られ、破壊されていく。ウォーター・ハウスのいる地面もどんどん陥没していく。

　それは、先ほどの攻撃よりも、圧倒的に短い時間だった。
　時間にして、十秒くらいか。
　レイアは叫んでいた。
　オレは彼女を連れて、この場から飛び去る。
　しかし、間に合いそうにない。
　どんどん、棘は食い破られていく。彼女が防御壁を作る間を与えず、ウイルスの攻撃は早い。城を砂粒へと変えて、消滅させていく。
　そして。
　ウォーター・ハウスは地面に倒れて。
　ウイルスの攻撃が止まった。
　見ると、ウォーター・ハウスは上半身から腰元に掛けて、腐るように、粉々に砕け散っていた。

†

　彼は眼を閉じた。
　やはり、駄目だった。
　完全に、彼の敗北だ。
　自分の能力の全てが敗北した。しかも。
　最後は、自滅だ。
『胸』解放の能力は、ウイルスを促進させるものだった。腹開放で殺人ウイルスを撒き散らして、脊髄解放によって、ウイルスに感染しない物質をも感染させる。そして、胸の解放は、更にウイルスの感染の速度と威力を引き上げるものだった。
　胸解放によって、腹から出したウイルスを“進化”させるのだ。
　その進化が何処まで行き着くのか彼には分からない。おそらくは、自身の能力が成長し続ければ、この世界そのものを。全てを食い尽くすものへとなったのかもしれない。
　世界を滅ぼす事の出来るウイルス。
　それが彼の手を離れた時、一体、どのようなものになったのか。しかし、実際はウイルスは彼の手によってコントロールされており、彼の意思次第で、いつでも解除出来るものでしかなかった。
　しかし、彼はきっとそれを見る事は叶わないだろう。
　胸によって進化したウイルスに対する抗体を作る事が出来なかった。
　その為、ウイルスは彼の肉体を食い破っていった。
　腐るような腐敗ではなく、まるで内部で爆発でも起きたかのように、彼の上半身と下半身の多くは消滅していた。治癒など、とても不可能な程に。
　ウイルスは既に解除した。
　この辺りに撒き散らしたウイルスは、解除と同時に、死に絶えていくだろう。

　気付くと。
　二つの気配が近付いていく。
　彼は眼を開いた。
　フェンリルと、先ほどの女。いや、女というよりも、少女に見える。
「……お前にしては、あっけない最後だったな」
　彼は何とか、自身の声帯を震わせて、言う。
「フェンリル、……まさか、お前ごときに負けるとは、な……」
「いや、オレ達だ。オレ一人では勝てなかった」
　そう言って、二人はその場を離れていった。
　彼は、意識が途切れ始める。
　死の意味について、しばし考えた。
　彼がこれまでの人生において、散々、考えていた事を考えていた。
　かつて。
　友人を殺した事、恋人を殺した事。そこに何の意味があったのか。
　思い出す。確かに、その瞬間、瞬間には何か理由があった筈だ。
　それらは、きっと痛みとなって、胸の奥に根付いている。実はそうなのかもしれない。
　何もかもが分からなかった。
　地獄の世界とアサイラム、果たしてどちらが正しいのか。極端な二つの刑罰。
「結局、お前は何がやりたかったんだ？」
　白と黒のゴシック・ロリィタの姿をした美貌の青年は訊ねる。
「さあな、俺にすらも分からないのかもな」
　あるいは、世界中の構造自体を書き換えたかったのか。
　社会とはつまるところ、細胞のようなものだ。その遺伝子情報、構造を全て、入れ替えてしまいたかったのか。
　エリクサーとは錬金術における万能薬だ。
　ウォーター・ハウスが人間を只、傷付け、破壊する事ではなく、癒し、治療する事に特化させていけば、と。
　しかし、彼はそれを選ばなかった。
　彼の殺人衝動が一体、何を示していたのか。
　思い出したかったが、目の前が少しずつ、霞んでいく。
　全身の機能の殆どは、停止している。治癒能力も残っていそうにない。
　この世界に生きる者達の先を観たかったが。
　多分、もうそれは叶わない。
　彼は確かに何かを望んでいた。この世界を抜け出す方法かもしれない。
　檻を、突き破ろう、と。
　彼が幻視していた檻とは、一体、何だったのか。
　それは、彼自身にさえ分からないし、その何物かを伝える為に、檻と呼んでいたのは便宜上の

事でしかなかった。
　このまま、砂粒のように崩れ死んでいく。

†

　古城を後にする。
　そういえば、氷のシャッターはいつしか途切れていた。
　このまま、山を降りよう。
　オレは自分のポケットの中で、携帯が振動している事に気付く。
　手に取ると、通話ボタンを押す前に途切れる。
　見ると、着信暦は十数件に達していた。
　オレはその電話番号に掛ける。
「どうした？　ケルベロス。何があった？」
「……ブエルが死んだ。おそらくは、アサイラムに進入してきた、拳銃を使う女によって、殺された」
　オレは携帯を閉じる。
　何だか、面倒臭い自体が発生しているらしい。

『ディス・モーメント』と名乗る男が出頭してきた。
　投降といってもいいかもしれない。
　彼はアサイラムの職員の一人の携帯番号を何故か知っていて、それにかけてきたのだった。まったく、油断も隙もあったもんじゃない、とケルベロスは思った。
　ウォーター・ハウスがアサイラムで暴れた後に、脱走した四名の能力者のうちの一人だ。
　彼は安全の保証を提供してきた。
　何でも彼は、彼を襲撃したフレイム・タンのアジトを知っているらしかった。
　何度か殺され掛けたが、どうにか尾行によってアジトを見つけ出す事が出来たらしい。
　彼はそのまま、アサイラムに再び収監される事となった。
「あの女の居場所を教える。だから、俺を全力で守ってくれ」
　ケルベロスはそれに承諾した。
　そして、彼はその事をフェンリルに相談した。ケルベロスはアサイラムを動けないからだ。ルサールカまで死んでしまったとなると、もう後は彼しか残されていない。
　……。
　フレイム・タンがいる場所。
　その街は、ただ、“灰色の言葉”と呼ばれている。
　高い山脈によって囲まれており、気候やら何やらの関係で、真っ暗な闇の中に閉ざされている。そこは、高い科学技術が培われており、独自の発展を遂げていた。
　どうも、付近に別の街が無い為、この街だけで発展してしまい、資本主義が巨大化していって、ついこの間、ヒトラーやスターリンのような“独裁者”が死んで、街が自壊していったらしい。
　まるで、フレイム・タンは挑戦するかのようにも思えた。
　此処に隠れている、と。わざと、ディス・モーメントという男を泳がせて……。

†

　……。
「相変わらず、此処って腐った街よね」
　と私は呟いた。
『炎猫』が死んだ後、仲間や配下を集める為に訪れた場所の一つが此処だ。
　極端な資本主義社会、極端なヒエラルキーによって分けられていて、金持ちは豚のように超え太り、貧困層は餓鬼のように痩せ衰えている。
　コロンゾンと出会ったのは、この街だ。
　彼は此処でミュージシャンをやっていて、ヴォーカリストを務めた。此処の政権を破壊する為に、独裁をしていた者を倒したのだが、そいつが死んで、街は自壊していった。その途中で、コロンゾンの所属していたバンドの他のメンバーを失ったが、彼はその心情に関して吐露する事

を嫌がる。
　此処は、今や、貧困層からの暴動が多発しており、テロ活動も頻繁に行われているらしい。結構な事だ。
　私は携帯電話を取り出す。
　その携帯電話は、普段から持っているものとは別物であり、ある人物にしか繋がらない。
「ああ、ブエル？　灰色の街に着いたぞ？」
　電話の向こうの声は含み笑いを浮かべているようだった。
「ああ、君か。先にこれを渡しておいてよかったよ。でも、僕のメモリーは大体、消滅してしまったから、役に立たないかもしれないよ？」
　彼は無言になる、そしてまるで空しさとも哀しさともつかない声音で言った。
「僕の本体の方は、死んだ。メビウス・リングに始末されてしまったみたいだ、その情報が先ほど入ってきた。これで僕は完全なデータだけの存在となった、今の状態は、果たして、生きていると言えるのだろうか？　……」
「いや、いい。お前は至ったんだろう？　そしてあの炎猫も至った。メビウスと対極にあるらしい、冷凍装置を呼び起こす現象に」
「ああ」
「リフリジレイターとは一体、何なんだ？」
「一言で言うと。概念かな。メビウス・リングも概念が実体を持って歩いているだけなんだよ。メビウスの場合は、この世界が巡り回るように循環を願い。リフリジレイターは、この世界に断裂と混沌を生もうとする。アイス・エイジでは、炎猫が引き起こして。今回の場合は、チェラブだな。メビウスはリフリジレイター以外とは戦わないし、たとえば、この世界には世界を滅ぼせる可能性を持った能力者が何名もいるが、メビウスは救世主ではなく、あくまでリフリジレイターと戦う為に生み出されたプログラムでしかないんだ」
「なるほど、大体、分かった」
　チェラブとかいう奴がどんな人間だったかは知らない。
　アサイラムの副署長なのだろう。

†

　甘名が此処に来る事を渋ったので、代わりに彼女が向かう事になった。
　此処もまた、あの『アイス・エイジ』に似ている。
　だから、彼は生理的になるべく行くのを拒んだのだった。
　それにしても。
　此処に来るのは久しぶりだ。
　甘名と共に、かつて此処に存在していた独裁を行っていた者を、更に裏から支配していた存在を倒したのは、もう数ヶ月も前になる。名前はうろ覚えだが、『ミスリル・ブレード』とかいう組織だったか。

確か、能力者を人工的に産出しようとするドラッグを作り出していて、存在しない金属、ミスリルの刃に見立てて、名前を付けていたんだったか。
レイアは渡された地図の場所へと向かった。
暗いビルだ。
テロの爪痕が大きく、ビルは所々、破壊されていた。
周囲には、光り輝く電燈がまるで無い。
暗闇ばかりが続いている。
エレベーターは破壊され尽くしている。
非常階段は、大きな瓦礫によって閉ざされている。
この中の七階にいるという。
誘われたのは、甘名とケルベロスだったが、レイアが代わりに引き受けた。
ケルベロスという男は避けたがっていたらしい、罠以外の何物でもないだろうからだ。
彼女は瓦礫を『修羅蓮華』の拳によって分解していく。
しばらくして。
七階に辿り着く。
辺りはもう、何も見えなくなった。
暗闇。
「お前は何だ？」
まるで、この世界にあるモノ全てを憎悪するかのような響きを持った声。
暗闇の中、まるで見えはしないがそいつはいる。
「そうね。人に誰何する場合、まず自分から名乗り上げるのはどう？」
「私は、“闇の炎”。そう呼んでくれると嬉しいな」
「そう、私は“永遠の少女”。それでいいわ……」
フレイム・タンとレイア。
それが、彼女達二人の出会いだった。
互いに様々なカルマを背負った二人。
決して、その人生も、住んでいる世界も交差しない筈だったが、彼女達二人はこうやって出会った。
アイス・エイジという世界のゴミ捨て場に生を受けた、フレイム・タン。
この世界とは違い、遥か遠くに離れた異世界に生を受けたレイア。
二人は、すぐに理解した。
お互いに、決して相容れない存在だ、と。
一つとして、共通などしていない。
そして、だからこそ、互いを“敵”だと強く認識した。
同族でもなく、宿敵でもなく、好敵手でもなく。ただ。
決して分かり合えない故の、“敵”なのだと。
「なあ、永遠の少女。お前は、自分が何の為に生まれたのか、知っているか？　考えた事は？」

「そんなものは考え尽くしたし。決めた」
　決めた？　と、闇の炎は高笑いをする。
　そんなものが出来るのかとでもいうかのように。
「私はこの世界をぶっ壊す為に生を受けたんだ。貧困街で育ったのも、最低な人生だったのも。マフィアやらドーンやらと戦ってきたのも。全ては世界を丸ごとぶち壊す為に。そう、私は希望の無い所で生きてきた。だから、この世界を壊すしかない」
「ふんっ、私はこの世界と関わる必要なんて無い、と思っている。大切なのは自分でしかなく。他人や世界じゃない」
　暗闇の為、レイアからは分からないが。
　レイアはフレイム・タンを見下ろし。床に座るフレイム・タンは、暗視ゴーグルでレイアを見上げていた。
　まるで、彼女達二人の関係がそうであるかのように。
　レイアは世界を嘲笑し、自身のナルシズムにより自分を閉ざす。
　フレイムは世界を憎悪し、世界に自分の存在を分からせ、壊そうと。
　その考え方の断絶は決定的で、二人とも相容れるものは何も無かった。
　しかし、言葉は続く。
　決して、分かり合える筈が無いのにも続く。
「お前のその傲慢さに満ちた眼が、本当にムカ付くなあぁ？　まるで自分が出来ない事なんて何も無いと思っているし、自分が弱いなんて事が絶対に赦せないとかいうタイプ、本当に、その顔が歪むのが見たくて仕方が無いなあ？」
「はあ……。貴方みたいに、弱い自分を覆い隠す為に、周りを攻撃している人間は嫌なのよ。全部、他人のせいにして、世界のせいにして。一人や二人、嫌っていればいいものを、世界中全てを嫌悪していて。……もっとも、私は他人を愛せない人間だから、憎しみは愛の裏返しとかいうのが、根本的に分からないけどね」
　二人の間に、殺意が膨れ上がっていく。
　もっとも、レイアは個人を憎むのに対して。
　フレイム・タンは、世界全てを憎んでいる。
　故に、その殺意の形も噛み合わない。
　そして、しばらくの間、どちらも動かなかった。
　二人の距離は、四メートル弱程だ。
　しかし、どちらも相手の下へと踏み込まない。
　先に動いたのはフレイム・タンの方だった。
　がちゃり、と撃鉄を鳴らす音が聞こえる。
　暗闇の中、レイア目掛けて、弾丸が飛んでいく。
　しかし、レイアは既に全てを見切ったように、それらを避けていた。
　フレイム・タンは、レイアが彼女の下へと移動してくる事を期待しているが、レイアは冷然としており、必要以上にはまるで動く気配が無かった。

直情型のフレイムは、この少女はある意味で言えば、もっとも苦手とする敵だった。なりふり構って攻撃してこないし、敵意や殺意こそ感じ取れるものの、感情を完全に律しており、感情がまるで行動の乱れに繋がっていない。
その冷静さは、機械的ではなく、人形的でもなく、単純に、彼女は強いのだろう、と感じた。自らの意志を頑なにし、他人の言葉では決して揺るがない。
そしておそらくは、それこそが、彼女の本当の強さなのだろうと。たとえ、どれほど強力な能力を持っていたとしても、使い手の力量や精神に影響される。この少女は傲岸不遜でこそあるが、決して慢心などしないのだろう。
フレイム・タンは直情的に動いて、同時に、相手の感情の隙に付け込む事によって、これまでの戦いを勝ち抜いてきた。どんなに強い相手であっても、精神を揺さぶれば、それが隙に繋がる。
今、目の前にいる少女は、過去に戦ったどんな敵よりも、精神に付け入る隙が無い。
むしろ。
フレイム・タンの方が、緊張の余り、怪物コオロギの名を有するデザート・イーグル、『リオック』をぶっ放していた。
その瞬間、閃光が飛び散る。
少女は確かに、フレイム・タンの姿を見た。
少女がいた場所は、爆破炎上する。しかし、手応えが無い。
そして。
よく分からないが、明らかに敵は、攻撃を放棄していた。
……それが何なのか分からないが。敵は何らかの手段で、フレイムを攻撃出来た、しかし、それをやらなかった。それが意味する事は。
……私など、戦う相手としての価値が無いと思っている。
追い討ちを掛けるように、声が聞こえてきた。
「貴方と戦う意味を感じない。私はもう行くわ、後はそうね、他の者に任せる。それから、貴方ごときじゃ、この世界なんてとても壊せやしないでしょうね」
「待て、私を殺してみろ！」
何かを叫ばずにはいられなかった。それが届かないとしても。
しかし、もう敵は何処にもいなかった。
後には、酷い屈辱感ばかりが溢れ出してくる。

†

レイアは七階から飛び降りて、着地する。
そして、すたすた、とその廃ビルを後にする。
「待て」
背後で声が聞こえた。

　それは、丸顔の男だった。
　美青年だ。髪をシャギーに切って、黒いジャケットを羽織っている。
「お前はあいつの敵なんだろう？　なら、俺もお前と戦う必要がある」
　レイアはまるで彼を意に介さなかった。
　青年は、彼女に攻撃を仕掛ける。
　それは、フレイム・タンが誇りにすら思っていた、対象の存在そのものを消し飛ばす、消滅空間だった。
　レイアは、まるで攻撃の軌道を読んでいるかのように、それを難なく避ける。
　彼の放った攻撃は、闇に擬態している為、見える筈が無かった。しかし、まるで彼女は見えているかのように、彼の攻撃を避け続ける。
　地面が四角や球形に抉れていく。
　薔薇の花が辺りに舞っていた。
　それが、彼の消滅空間の中へと入り、消し飛ばされる。
「なるほど、大体、能力は分かった。貴方の名前は？」
「俺はコロンゾン。能力は『エグリゴリ』という、今はフレイム・タンの相棒として行動している」
「コロンゾンか。雪中の古城にいた少女は、能力に、ゲルマン神話で世界を取り巻く巨大蛇、『ヨルムンガンド』とか付けられていたけれども、貴方も名前負けしているわよ。　トート・タロットを使う際に聞いた事があるわね。その名前は魔術師アレイスター・クロウリーが召喚したとされる悪魔で、確か、魔術によって引き起こるコントロール出来ない強迫症状の総称だったかしら？」
「名前は、生まれ付きのものだが。能力もそうらしい……フレイム・タンいわく、この世界に絶対無の空間を作り出す事が出来るらしい。俺には分からないが。何でも、俺の能力はまだ成長途中で、能力が進化していく先には、世界を丸ごと無の空間へと飲み込む程の可能性があるらしい……」
　レイアはまるで値踏みするように、青年を眺める。
「“絶対無”の空間？　そんな能力、弱いわ。せめて、命中したものそれ自体を消失させないと。たとえば、脚に命中するだけで、脚だけでなく、その敵自体を消滅させなければ意味が無い。しかも、貴方の能力って、概念も消し飛ばしているわけじゃないから。脚を消し飛ばしても、脚という概念を消しているわけじゃないから。脚を再生させる事も出来るわよ。しかも、どうやらサッカーボールくらいの大きさの攻撃しか作れないみたいだし」
「そこまで理解したのか……？」
「ついでに、攻撃のスイッチは、声帯から発しているみたいね？　微かに声を発する事によって、それが能力の引き金となっている。それで生み出した消滅空間を、そこら辺に設置させて、敵に命中するのが戦法みたいね」
　どうやら、短時間の間で、彼女は彼の能力を分析し切っていたみたいだった。
　更には、彼は知らないが。彼女は、フレイム・タンが先ほど、彼の血を使って発動させた、エ

グリゴリの消滅空間のトラップも、すぐに見抜いて、踏み込まなかったのだった。
「しかしまあ、貴方の能力よりも、貴方の性格の方が面白そうね。あの古城にいた少女も生きているなら、名前相応の能力に成長するかもしれない。貴方も、せいぜい自分を磨く事ね、そしたら、また相手してあげるわ」
　半分、面倒臭そうな口調だった。
「俺の性格……？」
「何で、あの女に付いていっているの？　貴方は何も無いんじゃない？　生きる希望も、守るべきものも。倒すべき相手も。勝ち取るべき意味も。自分自身ですらもどうでもいい。しかし、生きた屍にもなりきれないし、ましてや自殺すらも出来ない。あの頭がおかしい女に付いていっても、きっと何も無いわよ？」
　コロンゾンは何も言えなくなった。
　自分の信じるべきものを信じず、自分が信じないという事を信じていない。
　彼の生き方は虚無そのものであり、その先にはおそらく何も待ってはいない。
　自分の能力で何かを破壊したいわけでもなく、守りたいものも、もはや存在せず。
　ただ、流れるまま、世界を壊したいと考えているフレイム・タンに連れ添っている。それだけだ。
「まあ、いいわ。どっち道、貴方が何らかの形で成長したならば、また相手して上げるわ」
　そう言って、彼女はすたすたと踵を返して行ってしまう。
　コロンゾンは何かを言おうとしたが、言葉に何も出てこない。
　全てが空虚だった。
　全てに意味が無い。
　何処まで行っても、彼には虚無しかない。虚無の景色しか見えない。
　だから、自分が強くなる理由すら実は無い。
　今、どのような感情を発露させればいいのか、彼には分からなかった。
　だが、ふと思い出したように、彼は言った。
「お前の名前は、何だ……？」
　少女はすぐに返事をした。
「私の名前はレイア。覚えても忘れても、どちらでも一向に構わないわよ。私は、貴方達に余り興味が無いから」
　と、余計な罵倒を含んだ物言いだったが、コロンゾンは気付いた。
　それは、まるで自分自身に言い聞かせているような節がする、と。
　興味が無いのではなく、興味を持ちたくない、のか。

†

　ケルベロスは小さな小型のゲーム機をオレに渡してくれた。
　何でも、ブエルがオレに渡すように言っていたものらしい。

　どうやら、ゲーム機のようだが、オレはこの種類のものを知らない。外国で流出しているものかもしれない。
　電源のスイッチを入れる。
　すると、画面に男の顔が現れた。
　ブエルだ。
「やあ、こんにちは」
「ああ……」
「君がこの機械の電源を入れたという事は、僕はきっと死んだのかな？」
「ああ、死んだみたいだな」
　ああ、残念だなあ。と彼は別に自分の死を悲しむでもなく、何処か面白そうに呟いた。自分の死など想定内だとでもいうように。
「まあ、単刀直入に言おう。チェラブの頭脳をベースにして、ハーデスの『アトミック・ソード』の中にチェラブの『サイレント・クォーク』を仕込んだのは僕だ。きっと、ブラッド・フォースは今頃、能力が使えなくなってきているんじゃないかな？」
　話を聞いても、驚かない。
　大体、こいつが絡んでいるのだろうという事は予想していた。
「ブラッドは能力が封じられただけか？」
「まあ、彼の場合はそうだね。ただ、問題はこれは、アサイラムの最重要機密なんだけれども、最終的にアサイラムのやろうとした事は、能力者全体の制御と、新たに生まれてくる能力の封印。そこまではいいかな？」
「ああ」
　だんだん、興味を無くしてきた。
　はっきり言ってしまうならば、オレにとってはもうどうでもいい事だった。
　ブラッドの受けた攻撃は、死に至るものじゃない。それだけで充分で。どうやら、彼は自身の能力を捨てる事を願っている。
　ただ、彼の症状はとても気になっていた。
　彼の肉体を、謎の黒い模様が日に日に増え続けている。
　体調も余り、良くないらしい。
「問題は、ハーデスも自分自身の能力がどれだけヤバイものか分からなかったみたいだね。彼の能力の本質は、“核爆発”じゃない。“人類の兵器に対する恐怖”を実体化させる、だ。彼の能力の行き着く先は、人類の恐怖と連動して、進化していったんじゃないかなあ。でもまあ、今となっては分からないけどね」
「そうか」
「チェラブとハーデスの能力を融合させて、その後、メビウス・リングが『リフリジレイター』と呼んでいる、外側の力を混沌として持ち出せる意思を、チェラブの脳に降ろした。これは一体、どういう事になるんだろうね？」
「何を言っているかは分からないが。オレに何をしろと？　つまり、それはどういう事になる

んだ？　お前が何かして、それを止めて欲しいのか？」
　少し、苛々した。
「アサイラムの囚人達、職員を媒体にして、リフリジレイターが降ろされる。それを発端として、おそらくは世界中、様々な次元中の能力者に、チェラブのサイレント・クォークが感染していき、全ての能力者の能力が封じられる」
「……いい事じゃないか」
　投げやりに返した。
　正直、関わり合うのが面倒臭い。
「いや、おそらくはそれだけでは終わらない。その感染を受けた者は、次々と肉体が癌化していき、多分、畸形児化するとか、生きた死体となって動き回るとか、そんな風になっていく。まあ、基本的に僕が仕組んだんだけれども、こうなるのは、アサイラムと、チェラブの底の浅さにあるんだけどね。でもまあ、アサイラムは外界から遮断されているから、そのままアサイラムという絶海の孤島だけが、沢山の犯罪者達を封じたまま、永遠に死の世界として存在し続けるんじゃないかな」
「……よく分かった、やはりオレにはどうでもいいな。ケルベロスには、あんなところは、もう見捨てるように言っておこう」
「ああ、ちなみに青い悪魔だが、このままだと、その影響で間違いなく死ぬよ。ついでに、アサイラムにいた、君もケルベロスも、漏れなく、サイレント・クォークの影響を受けているから、間違いなく君達も死ぬ」
　ブエルは、余りにも爽やかな笑みを浮かべていた。
　だから、ブラッドにはあのような謎の症状が出ていたのか。
　確かに、そうだよな。
　何故ならば、かつて歴史上で、核を受けた街の人々の後遺症はどうなった？　……？
　オレは少し、感情を押さえつけられなくなった。
「死ね」
　オレは勢いよく、小型ゲーム機を地面へと叩き付ける。
　そして、何度もゲーム機を踏み付け、蹴り続ける。
　こいつはもう、何か、嫌いだ。
　世界の危機よりも、オレにとっては友人の方が大切である事に気付く。
　そして、何よりもまず、自分の命と人生が大切だった。
　たとえ、世界の危機だったとしても、オレは一歩も動くつもりはまるで無いが、自分の命と大切な友人の命の為ならば、動くし、戦う事が出来る。
　オレは投げ捨てたゲーム機を拾う。
「それで、オレは一体、何をすればいい？」
「……酷いな。壊れていたら、どうするんだい？　君はレイア君と違って、ちょっと感情的だね。そうだねえ。メビウス・リングがもし僕の考えているものならば、リフリジレイターに感染した媒体、もう少し言えば、依り代を全て破壊する事で現象を止めるだろう。それが彼女の役割な

のだから」
「依り代、奴の球体関節人形の肉体って事か」
「ああ、その通りだ」
　事も無げに言う。
　メビウスの恐るべき能力を、その身で受けたにも拘らずだ。
「さて、僕には目的がある。神の存在を手に入れたい。チェラブの脳内に侵入して、リフリジレイターまで解析したけれども、それは片方の側だけだ。そして、君の目的と僕の目的は一致する」
　……依存は無い。
「メビウス・リングを倒せ。秩序の方も無くなれば、混沌が誕生しなくなる。あの二つは、おそらくは同一の神の裏表なんだよ。だから、片方を破壊すれば、もう片方は無くなる。メビウス自身も気付いていないだろうが、彼女の存在こそが、まさに概念として敵を生存させ続けているんだよ」
　こいつは、何もかも知っているらしい。
「そして、可能ならば、彼女の肉体のパーツが欲しい。それを解析するならば、あるいは世界の裏側にいるであろう神が何なのかを知る事が出来るかもしれない」
　ブエルは強い好奇心が剥き出しの声をしていた。

†

　コロンゾンは自分自身について考えていた。
　結局の処、成り行きで彼はフレイム・タンに付いて行っている。
　きっと、そこには彼の胸の穴を埋めてくれるものが存在すると信じてだ。
　先ほどの少女は、彼の能力を正確に言い当てていた。
　しかも、どうやら、フレイム・タンが彼の血液から採取した情報によって、彼の中に眠る潜在情報も、断片的には理解しているみたいだった。
　そう、フレイム・タンは言う。
　彼の能力は成長途中であり、その先には“概念”自体を消滅させられる可能性があるのだと。その分かりやすい例を、あの少女は説明してくれた。
　たとえば、脚を消し飛ばして、“脚”という概念自体を消し去る可能性がある。それは、おそらくは脚を再生する力がある相手も、二度と脚を戻す事が出来なくなるだろうと。トカゲの尻尾を消滅させれば、そのトカゲは二度と、尻尾が生えなくなるのだ、と。
　しかし、その能力に至るには、彼には自身の意志や願望が希薄だった。
　フレイム・タンのような、世界に対する憎悪と無限に湧き上がるかのごとき、殺意の執着が無い。
　かつては、仲間達と共に、ステージの上では人気スターであり、絶大なカリスマ性を持っていたが、今は抜け殻みたいなものだ。
　自分には、何も無い。
　その空虚さを、埋められる意思が無い。
　一体、自分は何を求めるのか。
　いや、今は生きているとさえいえるのか。
　全てが空っぽだ。
　戻ってみると、フレイム・タンは少し荒れていた。
　何もかもが、腹立たしいといったような顔だ。
「ああ、クソッ。何なんだ？　あいつは」
　彼女は、明らかに苛立っていた。
　いつも通りの彼女だ。
　彼女の燃えるような憎悪は彼には無い。
　彼には、空洞のような、感情それ自体が抜け落ちてしまったかのような、そんな感覚しかない。
　フレイム・タンは、がちゃがちゃと拳銃を弄り始めた。
　そして、他の銃器も念入りにチューニングを済ませる。
「あの女、殺してやる」
　コロンゾンはふと気付く。
　彼女の憎悪の中に、まるでアンヴィバレントな感情として、歓喜さえ感じ取れた。

　まるで、彼女はずっと宿敵の存在を探し求めていたかのように。
　宿敵を殺害する事によって、彼女は自由を手に入れているかのように。
「あんなにイラ付いたのは、炎猫以来だ。全然、タイプは違うけれども。あいつだけは……、私のこれまでの人生に掛けて、殺してやる」
　彼女は、机の引き出しを開ける。
　その中には、彼女がこれまで採取してきた能力者達の血液が入っていた。血液は一つ一つ、瓶の中に入れられて、彼女にしか分からない記号を振られて、分別されている。
「……クソッ、冷静になれ、私」
　彼女は瓶の一つに指を浸す。
　爪の中に血液が浸透していって、他の能力者の能力を複製していく。
　破壊音が部屋中に響き渡る。
　彼女は自分の中のストレスを吐き出す為に、複製した能力を意味無く使う癖がある。
　そしてそれを、平気で無駄に消耗して、せっかく奪った血液をすぐに消耗品へと変えてしまう。まるでガソリンをゴミのように消費するパワーばかりのエンジンのようだ。
「相手がどんな敵でも、勝てる戦い方がある。これで始末してやる」
　もし、彼女に性格的な欠点が無ければ、もっと強い能力者なのだろうな、とコロンゾンは思った。

†

「ちょうどいいじゃない」
　レイアは例の部屋の中で、壁に寄り掛かりながら言った。
「私が戦おうと思っていた者の中に、そのメビウス・リングとかいうのも入っているから」
　灰色の街にて、フレイム・タンと会った彼女は、まるで面白くなかった、とそれだけ言った。きっと、あいつに世界を壊せる力なんて無い、とも。
　相変わらず、酷薄な笑みを浮かべている。
「メビウス様を倒すの？」
　ブラッドは少し不安そうな顔をしていた。
　そういえば、彼はメビウス・リングに憧れているらしかった。
　そんなブラッドの全身には黒い呪詛の模様が渦巻くように回っていて、これが彼の生命に危機を齎しているのは確かだった。
　彼は今や、傷口が開き出して、頻繁に呼吸困難に陥っている。
　このままだと死ぬのは明らかだった。
「分からないわね。でも、私は戦うつもりよ」
　その眼には明らかな自信があった。
　しかし、オレは別の事も改めて訊ねたかった。
「フレイム・タンの印象はどうだった？」

　それは、レイアの個人的な感覚を別として、という意味を含めて聞いた。
「そうね。会話をし続けるのは、危険な相手ではあるわ」
　少し、賞賛の混じった声で言った。
「彼女の本当の才能は、他人の感情に付け入る事のような気がする。正直、苦手よ。彼女の場合、おそらくは他人の心を掻き乱す才能がある。自分自身の憎しみを他人に伝染させたり、不安に付け入る事が出来る。それに比べたら、他人の能力を血液から複製出来る事なんて、些細なものなのかもしれない」
「強い相手と戦いたいんじゃないのか？」
「いや、……彼女の場合は、強いとか弱いとかいう概念じゃなくて。……交流した後の、得体の知れない後味の悪さが残る事にあるのかもしれないわね」

†

「フェンリル、俺は何の為にいる？」
　ケルベロスは歯噛みしていた。
　彼はまんまと、フレイム・タンをアサイラムから逃してしまった事を酷く悔やんでいるみたいだった。
　更に、ブエルの話を彼に告げた。
　ハーデスが残したもの。
　オレは彼の師匠に関しては、ろくに知る事も出来なかったが。彼にとっては掛け替えの無い、恩師だった。そして、いつかは超えなければならない大きな存在。
　きっと、父親みたいにも思っていたのかもしれない。
　そういえば、オレは彼らの繋がりをろくに知らない。彼の事は、実際、未だによく分からない。互いに知らないのだ。
　しかし、お互いに相手の事が分からないならば、分からないなりのコミュニケーションもある。
「ウォーター・ハウスを倒した。今のオレなら、君の相手になれるかもしれない」
　数分、沈黙が続く。
　その後、彼は口を開いた。
　彼はオレを浜辺へと誘った。
　アサイラム付近の小島の一つへと、一緒に向かう。
　彼には強くなる理由があった。
　そして多分、その強さは、レイアともウォーター・ハウスとも、ブラッド・フォースともデス・ウィングともオレともまるで違うものなのだろう。
　何ていえばいいのか分からないが。
　彼は真っ直ぐなのだ。オレは歪み、レイアも狂気、そういったものによって強さを得ようとしている。ブラッドや水月も考えるまでも無い。そう、みんなこの世界の真っ直ぐさに反抗し続け

ているといったものなのかもしれない。
　けれども、彼は違う。オレの知り合いには逆にまるでいないようなタイプ。
　謹厳実直というべきか、多分、普通の幸せとか正義感とか優しさとかを大切にしている。決して、本来ならばオレのような人間とは分かり合えない男。
　オレはどうやら、この男に好感を持っているらしい。
「フレイム・タンは、俺が倒す……」
　彼は忌々しげに、未だにドーンの賞金首リストにおいては、Ｄランクの座に位置し続けている女に対して呟いた。
　オレは嘆息する。
　フレイム・タン、実際、オレは今はもう、彼女に対して深い興味を無くしつつあった。楽園の廃墟で邂逅してから、これといった感情が無い。
　実を言うと。
　最初会った時、多分、オレはこの男には勝てないだろう、と思った。
　実際、能力の相性的にも自信が無い。今でもそれは同じだ。
　それよりも。
　オレは基本的に人格が歪んでいる人間だ。それは意識している。
　しかし、彼は何処か真っ直ぐだった。
　多分、普通に人を愛し、周りの人間を愛し、この世界のシステムを守りたいと思っている人間なのだろう。だからこそ、法を巡視するし、それの持つ信念も信じていた。
　しかし、だからといって、オレのような明らかに屈折した人間や、ウォーター・ハウスの持つ思想も、相容れないならば、相容れないなりに尊重しているのだろう。
　何だか、少しだけ。
　ある意味、羨ましくも、憎らしい……。
「すまない、ケルベロス。オレは君に勝ちたくなった。君の信念をこの手で切り伏せてやりたい、君が正義の味方を気取っているなら、正直、痛々しいぞ？」
「正義かどうかは分からないさ。この世界にとっての正義は分からないが、アサイラムの正義は俺が守らなければならないらしい」
　と、彼はオレの軽口にも真面目に答える。
「じゃあ、始めようか」
「ああ、全力で来てくれ。俺達は強くなる必要がある」
　白と黒のゴシック・ロリィタの服が、海風に靡く。
　以前、ケルベロスから動きにくくないか？　と問われた事があるが。別にそんな事は無い。戦闘でも同じだ。
　オレは自分自身のスタイルを確立している。それが一番、戦いやすい。
　辺り一面は、海と砂浜ばかりだ。それから、岩礁がある。
　始めようと言っておきながら、オレはまるで動かない。
　ケルベロスとの距離は、大体、６．７メートル程、開いている。

さり気無く、開始の合図の後、距離を稼いで移動した。
既に、戦闘は始まっている。
オレはまず、空間把握を張り巡らせて、辺りの大まかな地形を確認する。それから、地形を利用しての攻撃手段を把握していく。
ケルベロスはおそらく、必殺の攻撃は撃ってこないだろう。たとえば、肉体に触れて、胸骨をナイフに変形させて、オレの心臓を突き破るとかはしない。だろうから、オレも剣は使わない。
正直、ただの模擬戦闘でしかなく、以前、ハーデスと戦った時の方が、遥かに差が開いていたのだが。むしろ、実戦の殺し合いや、ハーデスとの戦いの時よりも、重圧感を感じる。それだけ、彼が真剣だという事だ。
先に動いたのは、オレの方だった。
攻撃を仕掛けるわけでもなく、悠然と、脚を少し斜め後ろに踏み出す。
ケルベロスはオレに近付こうと、前に出た。
オレは、後ろへ、後ろへと移動していく。
ケルベロスの場合は、相手の近くへと移動する事を重視しなければならないが。むしろ、オレの場合は距離を離して戦う事を基本としていた。
移動しながら、オレは地面から貝殻を拾い集める。
そして、それを彼の元へと投擲する。
彼は軽く、それを避けようとするが、途中で瞬間移動させて、彼の顔面付近へと差し向けた。
彼はすぐに、それに気付いて、顔を屈めるが、本命の方の砂粒を後から、投げ飛ばして、移動させる。
目潰しが軽く決まる。
カルマ・タワーで彼の事は大体、分かったが、彼はパワー・ファイターなのだ。変な小手先を使わず、力技だけで突っ込んでいく。勿論、彼の『アケローン』の能力は、決まれば、一撃必殺なので、そんな事は大した欠点にはならないが、今回は殺し合いじゃない。
しかも、考えてみれば、オレにとって有利な地形だ。
砂粒や小石さえあれば、幾らでもオレに有利な状況へと持って行けるし、海まであるので、相手だけ沈めて、自分は空中辺りを飛んでいればいい。
そう。
オレは地面を蹴り飛ばす。
その攻撃のエネルギーを、彼の背中へと瞬間移動させる。
ケルベロスは咄嗟に、それを避けるが、避けた場所を察知して、追撃として、全身を回転させながら、蹴りのエネルギーを飛ばし続ける。彼の背骨や脇腹に、攻撃は確実にヒットしていく。
ケルベロスは、全身を丸めて、攻撃を凌ぐ。
すぐに、オレは気付いた。ダメージがまともに通っていない。
彼は自身の骨格を変形させて、ダメージを凌いでいるのだろう。しかし、オレは続けざまに連撃を入れる。どうであれ、ダメージは蓄積されていく。
ケルベロスは両腕から、円月刀のような刃物を出す。

　オレはそれに気を取られずに、更に空中の何も無い空間を蹴り続ける。喉や鼻腔、耳、顎下、後頭部、側頭部、頚椎、鳩尾、胸部。幾つかは、まだ変形によるガードが終わっていないらしく、明らかにダメージが入る。
　しかし、このままではジリ貧だ。正直、攻めあぐねてもいる。足元にも攻撃を飛ばしたが、おそらくは足の裏から刃物を根っこのように出して突き刺しているのだろう。まるで体勢を崩さない。
　オレは続け様、瞬間移動による連撃を入れながら、その攻撃を海中へと向ける。水しぶきが跳ねる。それを転移させて、ケルベロスの全身に、濡れた砂を撒き散らしていく。
　全身に砂がこびり付いて、それが重石になる筈だ。
　そして、次の手段としては、彼を海の中へと叩き込もうと考えていた。
　オレは一気に、決められる攻撃は何か無いかと考える。
　ぼそぼそっ、と呟き声が聞こえた。
　それはか細い声でよく聞き取れなかったが、何とか言葉を繋ぎ合わせる。
　そして、それを頭の中で反芻する。
「全力で来い。それでは俺を突き崩せんぞ？」
　呟き声の内容を理解して、少し、頭に来た。
　しかし、挑発されたからといって、直接、叩きに行くような愚行はしない。あくまで、オレは遠距離から、彼の攻撃の手段を全て封じて屈服させるつもりでいた。
　オレは両足を地面に付ける。
　渦を描くようなイメージ。
　全身の力を数瞬、脱力させる。
　ケルベロスが能力でガードしようが関係無い。
　オレは体勢を可能な限り低くして、片足を軸にして、空中目掛けて蹴りを放つ。そして、そのまま瞬間移動して、百八十度回転させた身体が落下していき、地面へと膝蹴りを放った。
　その攻撃のエネルギーをケルベロスの左頭部へと飛ばして叩き込んだ。
　幾ら、頭蓋骨を変形させてガードさせてようが、彼が脳味噌を移動でもさせない限り、ダメージは脳にまで浸透する筈だ。彼はかつて自分の心臓を移動させて敵の必殺の一撃を防いだ事があるが、変形の動きをしっかりと見ていれば、臓器を移動させたとして、すぐに移動場所は分かる。
　オレは何度も、彼の頭蓋を狙って蹴りを打ち込み続ける。
　このままだと、仮に攻撃が致命的にヒットすると、一歩間違えれば彼を殺しかねないが、それでもなお、攻撃の手を止めなかった。
　ふっ、と。
　足元から微かな音がした。
　オレはとっさに、全身を移動させてその場所から離れる。
　オレがいた地面から、大量のナイフが生え出してきた。
　ケルベロスは、にやり、と口元を歪める。

移動した場所からも、地面からナイフが生え出してきた。
なるほど。
彼は足の裏から刃物を伸ばし続けて、まるで樹木の根っこのように辺り一面に張り巡らせていたみたいだった。
そしてどうやら、彼の周りには、大体、それが張り巡らされている。
「ケルベロス。いいものを見せてやろう」
数回、地面に着地した先で、ナイフが足元に刺さろうとした時だ。オレは敢えてブーツを脱ぎ捨てて、素足をナイフの山へと向けた。
オレは彼からの攻撃のエネルギーを反射するかのように、瞬間移動させる。そして、そのダメージは、彼の脇腹の辺りへと飛ばす。鋭利なナイフの攻撃が、彼の腹を掠めるように抉った。血が滴り落ちる。
そしてオレは彼のナイフの上に足の裏を置き続けて、全体重を掛けてそれを踏み続ける。ナイフが突き刺さるエネルギーをそのまま、連続して飛ばし続けた。
まるで散弾を撒き散らすかのような攻撃。
無数の見えない風の手裏剣が、彼の胸と腹に大量に打ち込まれ続けている。
「どうした？　その程度なら、あのウォーター・ハウスにまるで及ばないぞ？　法を守る番人とかいうのに、お前はなれないな？」
あえて、嫌味ったらしい口調で言った。
挑発に乗ってくれれば、隙を突きやすくなる。
勿論、彼ほどの精神力ならば、そんなもの易々と乗ってくれはしないだろうが。それでも、何かしら精神を掻き乱してくれればそれでいい。
オレは地面に降り立つ。
ずぶりっと、地面が沈んでいた。
まるで流砂のように沈んでいく。
まさか、地面深くにある岩盤を突き崩したのか？
オレは呆れたような顔をする。
力技でこんな事まで出来るなんて。
オレは急いで、十数メートル先へとジャンプする。
浜辺一帯が沈んでいく。
砂浜全体を、回転するノコギリのような刃が、流砂の中で回っている。
ケルベロスの攻撃が届かない場所まで瞬間移動した為、二十メートル以上も彼から離れる事になった。
攻める手段を失ってしまった。
この距離だと、オレの攻撃は届かない。かといって、これ以上、踏み込めば、今度はオレが攻撃される。
オレは溜め息を吐いた。
「ああ、止めだ、止め。食事にでもしよう」

　駄目だ。まだまだ彼の方が強い。

†

「ケルベロス。君と会った時の事、それからこれまでの事なんだけれども。それらを考えていて、思ったんだけれども。賞金首狩りの事、それはおそらくはハーデスが、君を成長させたくて計画した事なんじゃないだろうか？」
　海鮮鍋の中に、折ってきた木々を突き刺して食べる。
　鍋の中には、エビや貝、魚や海草などを適当に突っ込んで煮ている。
　砂混じりの鍋だが、身体を動かした後は、とても美味しかった。
　ケルベロスは海水で消毒して、全身の打撲、切り傷のある場所に包帯を巻いている。
　そういえば、オレはまるで怪我をしていない。
　何だか、一方的に彼を痛め付けてしまったみたいだ。
　しかし、彼の方は平然としていた。
　骨にも幾つか亀裂が入っていたみたいだが、アケローンの能力ですぐに修復したらしい。どうも、オレには一撃必殺の攻撃に欠ける。相手に守りを決め込まれたら、もう駄目だ。
「成長、というと？」
「だから、成長の為だ。アサイラムの後継者を作り出す為の」
「そうなのか？　……？」
「ああ。アヌビス、カルネイジ。それから今回の件を考えて、今回の仕事はおそらくは、ハーデスは彼の後釜が欲しかったんだろう。もう年齢も年齢だし、何より、病気に侵されていた。その中で、ウォーター・ハウス、ルサールカ、そして君。その辺りの中で、時期後継者が欲しかったんじゃないだろうか？」
「……そうか」
「カルネイジからはブエルが欲しかった。アヌビスの場合は後継者になる者に、『地獄の世界』を見せたかったのだろう、アサイラムが現在の形になる前はどのような刑罰が行われていたのかを。そうだな、後はデス・ウィングにも会いに行こう。それで元々会った、Ａランク賞金首狩りの全てが終わる筈だ。試練を課したんじゃないかな？　時期、後継者の為の」
　彼は複雑そうな顔をしていた。
「ハーデスは君に期待していたんだよ。勤まるのは君しかいないと思っていた」

†

　屍峠の辺りまで来た。
　水月の店へと向かいたいのだが、どうしても、その場所へと辿り着けない。
　辺りにはゾンビがうようよと徘徊している。
　ケルベロスは眉を顰めていた。

「確かに、この辺りなのか？」
「ああ、その筈なんだけれども」
　どうも道を間違えたのだろうか。
　しかし、分かりやすい道だった筈だ。
　ふと、捩れた木々の間に人影が見えた。
　どうやら、生きた人間のようだ。
「やあ、水月さんに会いに来たのかな？」
　影はエイジスだった。
　ケタケタと、小さな笑い声を上げる。
　エイジスは妖艶な美少年だった。そういえば、彼はいくつなのだろうか？
　彼は今回、踊り子の格好なのか、女物の民族衣装なものを身に付けて、ばっちりと濃い目の化粧を施していた。
「やあ、エイジス。ところでお前は本当に男なのか？」
「フェンリル、君が言う？」
　ケルベロスは吹き出す。
「ねえ、そこの人。彼は相変わらず、自信満々でおかしい事言うよねえ。そうだ、あなたは何て名前なのかな？」
「ああ、俺はケルベロス。確かにフェンリルはおかしいよなあ、うん」
　二人して笑い合った。
「水月は元気か？」
「ああ、元気だよ。ただね、傑作」
　エイジスは、オレとケルベロスを店へと案内した。
　そこは以前にあった場所とは違っている。
　しかし、何処か相変わらず禍々しい。
　水月の店に辿り着いた。
　扉には閉店のプレートが掛けられている。
　エイジスは構わず、扉を開けた。
「やあ、水月さんいるかい？」
　人影があった。
　水月は小さな陶器の数を数えていた。
　間違いなく危ない商品だろう。聞くとまた頭が痛くなるので、別の話題を振る事にした。
　カウンターの近くに来て、驚く。
「何か、あったのか？
「んんっ……」
　デス・ウィング、水月の下半身は消失していた。彼女は空中を上半身だけ浮遊させながら、商品を吟味している。
「これでも、かなり再生したんだけどね。……ああ、襲撃を受けて。この様だ。ドーンのハンタ

ーらしいけれども。最近は凄い奴がいるもんだね、まだまだあそこも捨てたものじゃないんだね」
　どうやら、こいつを追い詰められる程の能力者がやってきたらしい。
　スリーＡが聞いて呆れるものだ。
「しかし、何でもタラスクの奴が返り討ちにあって殺されたそうじゃないか。君は知らないかもしれないけれど、私とエイジス、ナーギャは彼とそれなりに仲が良くてね。正直、私のこの状態よりも彼の死の方が痛ましい」
「ふうん、そいつが何者なのかオレには興味は無いが、復讐とかするのか？」
「いや。タラスクもあれで散々、人を殺したり都市を破壊したりしてきたから、まあ、仕方無いだろうね。私やエイジス達に会って、多少、変わったらしいけれど。処で、今日は何の用だい？
　勿論、ただ顔見せに来ただけでも大歓迎だが。そちらの彼は初見だね？」
　ケルベロスは落ち着かず、店の中を眺めていた。
「フェンリル、もしかして、こいつ……」
「ああ、ランクＡＡＡのデス・ウィングだ。オレ達が組んだチームが倒さなければならない者の一人だったな」
　もっとも、少々、抜けている処も感じるけどな、とオレは口まで出掛かって言わずに置いた。
「ん、君はアサイラムの関係者かな？　済まないが、私はあそこに二度と収容されるつもりは無いぞ？　あそこの能力者全員の能力でも私を殺しきれなかったからね」
　水月は淡々とそう言うと、商品の手入れに戻った。
　オレは肩を竦めた。
「まあ、そんなアサイラムももう終わるんじゃないかって話だけれども」
「そうなのか、まあ、『地獄の世界』よりもマシだったんだ、頑張ってくれればよかったのにな」
「ああ、そうそう、君は彼の友人か何かなのかい？」
　水月はケルベロスに言う。
　ケルベロスは苦笑する。
「まあ、そんなところかなあ、一応、同僚でもあるみたいだ」
「気を付けた方がいいぞ。彼、相棒の少女よりも、よっぽど性格悪いから」
　オレはむっ、と眉を顰めた。
「ちょっと待て？　オレがレイアよりも性格が悪いって？」
「ああ、レイアは戦いたいだけって感じかな、後は口が悪いだけ。君の場合は、そうなんていうか、物凄い歪んでいて、他人に対する悪意や敵意を感じる」
　ケルベロスはそれを聞いて、声を出して笑った。
「ふん、いい度胸だ。レイアの次に、今度はオレが相手になってやろうか？」
　水月は盛大な苦笑を漏らす。
「私が全快したらね。ところで、レイアは今日はいないのかな」
「今は誰とも関わりたくないんだろう。彼女の思考はオレにも分からない。ただ、基本的には独

りが好きなんだろうな」
　大体、オレですら彼女の性格の全貌は分からない。
　強い相手と戦いたい反面、それ以外はペシミストで気まぐれだ。
　そして、いつも難解な事を思考し続けている。
　後、自分がもうどうしようもなく好きだっていうナルシスト。
「君が私と戦う意味は無いよ、ただアサイラムの話をしてあげよう」
　水月は陶器や硝子細工を丁寧に布で拭いている。
「アサイラムの話？」
「そう、アサイラムの話。何十年前かなあ。ハーデスと戦ったのは」
「師匠は強かったか？」
　水月は笑った。
「ああ、強かったよ。とても強かった。ただ、彼は心が強いから能力はあれ以上、強くなれなかったのかもね。世界を破壊出来る核兵器を複製する能力、それを完全に自分の意思で制御しようとした。彼にとっては、自分自身に勝ちたかったんじゃないかな。それこそが、人類にとっての勝利であるかのように」
　何処か、尊敬の意すら感じる。
「そうか」
　と、彼は呟いて。
　そして、複雑な表情をする。
「フェンリル、Ａランク狩りの目的は。使命を理解させたかったんじゃないかといったな？　俺も本当に、そう思うんだ。今、それが分かった。アサイラムは、俺が継ぐ」
「ああ……」
　元々、そういう風に動いていく予定だったのだろう。
　ケルベロスは、霧が晴れたような顔をする。
「デス・ウィング、いつかお前を檻の中に入れてやる。俺が強くなる日まで、待っていろ」
　彼は挑戦的な視線を、スリーＡへと向ける。
「んん。ああ、いつでもおいで。私は私を殺せる能力者をずっと待っているから」
　水月は破顔一笑する。
　……勿論。
　勿論、Ａランク狩りは後継者の成長を考えていた、という事はオレの後付、勝手な解釈にしか過ぎないのかもしれない。
　単純に、アサイラムは一連のＡランク者達を一掃して置きたかった、それだけは間違いがなく。どうしても、超えなければならない難題だったからだ。
　アサイラムがこの世界において、“秩序”でいる為の。
　しかし、ケルベロスの決意の眼を見ていると、満更、嘘も方便というべきか。
　ハーデスはきっと、彼の成長をとても望んでいた筈だ。

†

「神なんだろう？　メビウス・リングもリフリジレイターも、レイアが遭遇したとかいう、その『自由に死を。』ってのも」
　ケルベロスが先に帰った後。
　水月は文庫本を引っ張り出して、読んでいた。
　読んでいる本の名前は『隠し部屋を査察して』、見るからに悪趣味そうな表紙をしている。
「さて、此処に来たのはもう一つ、理由があるんだけれど」
　ぱたん、と水月は文庫本を閉じた。
「オレは正直、弱い。オレの能力が、だ。ケルベロスにも負けているし、ウォーター・ハウスも、レイアがいなければとても勝てなかった。オレは強くなりたい。何か、いい方法は無いのか？
　此処にある品物で」
「……強さの方向にもよるんじゃないかな？」
「なら、オレの能力を進化させるものは無いか？　レイアいわく、オレの能力は、まだまだ、完成していないらしい。その先に幾つもの可能性がある、と。それを引き出す事は出来ないのか？」
「なるほど」
　水月は、オレの顔をまじまじと見て、何か納得した、といったような顔をしていた。
　彼女の眼から見ても、オレには秘められた可能性とやらがあるのだろうか。
「そうですねえ、じゃあ、これなんてどうです？」
　水月が差し出したのは、カプセルの錠剤が大量に入った瓶だった。
「これ、何だ？」
「青酸カリです」
　水月は満面の笑顔でそれをオレに勧める。
「……今すぐ斬られたいのか？　お前は？」
「死に掛ければ、成長する場合があるんですよ。自身の中の潜在能力が、そういうケースも多くて、実際、人体実験とかにも毒薬で無理やり眠っている才能を呼び起こさせる事ってあるらしいですよ」
「もっと安全な方法って無いのか？」
　丁重に、危険な薬物の瓶を返す。
　水月は別の小瓶を出した。
　中には、何の液体も入っていない。
「これを飲めば、おそらくは可能性があるかも」
「この小瓶には何も入ってないようだけど？」
「この世界では知覚出来ない物質が入っているとか。だからこそ、貴重らしいです」
　なるほど、面白そうだ。
「幾らだ？」

　水月は指を二本、突き出す。
「二百円で。ちょうど、飲み物代が欲しくて」
　オレは一万円札を二枚、置く。
「すまない、今は紙幣しかない。釣りはいらない。そのまま飲んでいいのか？」
「ええ」
　オレは小瓶に口を付ける。
「効果は？」
「自分自身の中に眠る才能に呼び掛けてあげてください。色々な場面で、そういう霊的なエネルギーに関与するものです」
「プラシーボ効果だろ？　これ……」
　オレは大きく溜め息を吐いた。
「バレましたか？　仕方ないですよ、そんな品物、私の店ですら扱ってませんって。どちらかといえば、それこそアサイラムやカルネイジなどの組織がそういった開発に力を入れているんじゃないですか？」
「まったく、金返せよ。やっぱりダメか。まあ、仕方ないか」
　水月はふと何かを閃いたような顔をした。
「あるかもしれませんよ？　もしかすると」
　オレは溜め息を吐く。
「いや。いいよ、無理しなくて。オレが悪かった」
　部屋の中を、一瞬、風が吹きぬける。
　彼女は右手の中に小さな旋風を作り出す。
　見ると、彼女の右手の中には小さな小刀が生まれていた。
「私の能力である『ストーム・ブリンガー』を結晶化してみました。この刀は、私の生体波動が送られ続けているので、もしかしたら、そこから貴方の潜在意識に干渉し続ける事が出来るかもしれません。これ、お貸しします」
「お貸しますって……。どうすればいいんだ？」
「持ち歩いているだけでいいです。私の能力は何ていうか、自分で言うのも何ですけれども、強大なので、周囲にエネルギーを干渉し続けます。だから、そのエネルギーの詰め込んだ物を貴方が持ち歩いていれば、貴方自身の能力を引きずり出せる可能性があります」
「なるほど、要するに、強い敵やライバルがつねに周囲にいる事を意識し続けるってわけか？」
「ですね、それに私の能力の一部も使えるかと思います」
「レンタル料は？」
　水月はクスリと笑った。
「一万八千八百円で」

†

「ウォーター・ハウスの時と違って、今回は巧く占えそうよ」
　レイアはタロット・カードをめくっている。
　そして、何枚かのカードを広げた。
「二日後に行きましょう。場所はブラッドとハーデスが戦った場所、裏・原宿の地下世界からそう遠くない。というよりも、あの放射能が巻き散っている場所の辺りに何か仕掛けるつもりみたいね」
「どうする？」
　彼女は一枚のカードを眺めていた。
「ワンドの騎士か。彼女、どうしても私と決着を付けたいみたいね。仕方無いわ。甘名、貴方はメビウスの方と先に戦って」
「オレが、か？」
「ええ、私も彼女と決着を付けたら、そちらに向かうから」

「レイア、オレには分からない。世界を滅ぼしたいフレイム・タンと、正義を行いたいケルベロス、彼らのどちらが正しいかが」
　もうどうしようもなく、オレは歪んでいるし、世界のルールなんて信じてはいない。
　そうやって、悩んで迷った先には何があるのか。
　……。
「甘名。私は光と闇は両義だと思っている。神と悪魔がそうであるように。神話ってのは、異国の神を悪魔に変えたり、神と悪魔が同義だったりする。人間は数千年も何が正しくて、何が悪いのかを議論し続けてきたのだけれども。結局、その答えが出なかった。何故、出なかった？　それは自分と他人は決定的に違うんだ、という事じゃないかしら？」
　彼女は朗々と語る。
「正義と悪が相反するものじゃなくて、同じものの裏表にしか過ぎないのだと思う。だから、私は白と黒が好きなのよ。白だけが好きではなく、黒だけが好きでもなく。白と黒が好き。でもそうね」
　レイアは顎に手を置いた。
「もし、正しくも悪くもない存在があるのだとすれば。それはきっと無以外の何物でもなくて。正しいだけの存在があるのだとすれば、それはきっと狂っていて。悪いだけの存在があるのならば、きっとそれは世界にとっての可能性」
「……そうなのか？」
「いや、……単なる思い付きよ」
　二人共、苦笑する。

†

　ハーデスがアトミック・ソードを撃ち込んだ場所は、死の空間となっていた。
　放射能によって一面が満たされて、所々にあった建造物は倒壊し、骨組みが剥き出しになっている。
　レイアはウォーター・ハウスのウイルスを遮断した時と同じ細胞壁による膜を、オレの全身に張り付けてくれた。
「便利な能力、というか肉体だよなあ」
「貴方が不便な身体なのよ、……見つけたわ」
　レイアは遥か遠くに指を差す。
　その辺りに、そいつはいた。
　黒いドレスの、金色の髪が捩れるように巻いた女。
　メビウス・リング。
　人間と等身大の球体関節人形の肉体を持った能力者。

　神を肉体に降ろした者。
　砂煙が舞った。
「ひさしぶりね、神様」
　レイアはそいつの前に立つ。
　メビウスは憮然とした顔でこちらを見た。
「アイス・エイジの時も、そういえば、世話になったな」
　オレは言う。
　それから、この前、青い悪魔と一緒に、一度顔見せ程度に会ったんだっけ。
「此処に、もうすぐリフリジレイターがやってくる。私はそれを倒さなければならない。君達は、離れていてくれないか？」
「……知っている。お前と対になっているんだろう。対消滅を引き起こせる力を、お前は持っている、と。しかし、お前が奴を倒したら、奴の媒介となったチェラブやハーデスの能力の余波を食らった奴は、皆、死ぬそうじゃないか」
　メビウスはまるで、オレ達に興味を示していないみたいだった。
「私は、奴を倒さなければならない。そういう風に、作られた」
「そうか、オレ達はお前ごと倒しに来たんだけどな」
「……人間じゃ私に勝てない。諦めろ」
　まるで、オレの言葉を意に返さなかった。
　レイアは腕を組んで、せせら笑うように言った。
「大丈夫、甘名。こいつは、倒せる。こいつよりも、明らかに青い悪魔や死の翼の方が強い。私達はその辺りの能力者とは次元が違うのよ、貴方が神の一部が降下したものなのだか何だか知らないけれども、私達なら倒せるわ」
　レイアは明らかに楽しそうだった。
　強敵と戦える。それに胸の高鳴りが止められないのだろう。
「邪魔をしないでくれないか？　リフリジレイターを放っておくと、いずれ、この世界は混沌に呑まれていく」
「別に世界が滅びる分には構わないけれど、オレは自分や自分の友人だけが世界の為に死ぬのが赦せなくてな。それくらいなら、世界ごと滅びればいい。だから、お前はオレ達に、倒されろ」
　メビウス・リングは動かなかった。
　そして。
　オレ達もまた、動かなかった。
　いや、動けなかった。
　少なくとも、オレは。
　周囲の瓦礫が空中に浮き上がる。
　そして、それがまるで視認出来ない速度で動き、爆裂した。
　メビウスの能力、空間を捻じ曲げるらしい、『ウロボロス』が発動したのだろう。
　気付くと、オレはレイアに手によって引っ張られていた。

突如。
閃光が撒き散っていく。
そして、催涙弾と、照明弾が束のように投げ付けられた。
一人の人物が、そこに現れる。
何と、防護服も何も無しで、ゴーグルとジャケットだけで現れた。
そいつは、巨大な拳銃を握り締める。
そして、レイアは走った。
拳銃を持った女は、明らかにレイアを挑発していた。
レイアに向けて、砲撃を続ける。
「予知通り、甘名、メビウスは一旦、任せた。私はあいつと決着を付ける」
レイアは毅然と言った。口元は笑みの形に歪んでいる。

†

『裏・原宿』の地下迷路。
そこの一角を、彼女達は決着の場所へと選んだ。
巨大な鍾乳石と石柱に囲まれながら、何故か古いビルが並んでいる。
かつて、人間達が栄えたであろう場所。
レイアは敵であるフレイム・タンを探していた。
「引き付けるつもりが、逆に誘いこまれたわ。私とした事が」
レイアは敵の姿を探す。
もし仮に、何らかの情報によってレイアの能力を知られていた場合、敵はそれを踏まえた上での攻撃をしてくるだろう。
問題は、フレイム・タンが彼女にとって不利な能力を使ってくる場合だ。
……まあ、何をやってきても私が勝つけれど。
レイアはわざと、敵に見えるような位置に移動する。
おそらくは、牽制として使ってくるのは銃火器の類だろう。
なら、分かりやすく的になればいい。
レイアはすぐに、敵からの殺気に気付く。
彼女が先ほどまで立っていた場所が、銃弾の嵐となる。
ガトリング・ガンでの攻撃だ。案の定、芸が無い。
銃弾の嵐が地面を抉っていく。
ぼんっと、何かに命中して、地面が爆裂する。
ガトリングの弾丸によって、どうやら地面に予め埋め込まれていた対戦車地雷を爆破したみたいだった。
レイアは一瞬、怯んで、物陰に身を隠す。
辺り一面が爆裂していく。

　どうやら、無差別に攻撃してくる戦法を取っているみたいだった。
　エタン・ローズの弱点を、まるで知っているみたいに。……。

†

「……それで、あの女の能力は教えてくれないの？」
「残念だけれどもね。彼女とは一時的に仲間だった事もあるから、それに関しては裏切れない。ただ、一つ言える事は、『シャドー・フレア』といったかな？　君の他人の血液を奪う能力。それは、効かないじゃないかな？」
「何故？」
「彼女に血液が存在しないからだよ。生身じゃない。彼女は精神エネルギー体として、この世界に存在している。君のシャドー・フレアは血液を媒介にするんだろう？　ならば、彼女から能力は奪えない」
「……それで、他には教えてくれない？　あいつが一体、何なのか、を」
「すまない、僕は答えられない」
　こいつは、本当にクソの役にも立たない。
　私は携帯電話を閉じた。
　それにしても。
　敵は今までの中で、一番の強敵だと見るべきだろう。
　未だ分からないが、あの女の能力、それが何なのかを突き止めなければならない。
　牽制として。ガトリングと地雷の二つを使ったが、おそらくはまるで効果が無いだろう。
　能力を出させなければならない。
　そして、可能ならば、その対抗策も練らなければならない。
　さて、問題は、だ。
　敵の方も、私の能力を知りたいだろう。おそらくは、私が他人の血液を奪って他人の能力を複製出来る、くらいは知っている。問題は私がどんな能力を奪っていて、どんな攻撃をしてくるか、を予測したいだろう。
　今、手元には他人の血液の入った数十個の瓶があるのだが、おそらく役に立つのは、数個あるか無いか、だ。
　勿論、様々な能力者達の血液は用意してある。
　炎、冷気、竜巻、電撃、……しかし、どれもが通用するような気がしない。
　まずは、敵の能力の正体を知らなければならない。
　相手の態度などから察するに、おそらくは自分の能力にある種の絶対の自信を感じる。ならば、それから幾つか予測出来る。おそらくはどんな攻撃が来ても対処出来るという自信だろうか。
　ならば、何らかの理由において、不死身の可能性が高い。
　たとえばデス・ウィングとかいう奴は、気体になっても再生出来るらしい。
　私は携帯電話を開いた。

「ねえ、本当に教えられないのか？」
　携帯の中の声は言った。
「教えられないよ。何ていうか、まあ義理があるからね」
「ふうん、でも私にヒントくらいは言ってくれてもいいんじゃないのか？　正直、アンフェアだ。奴は、私が他人の能力をコピー出来る事くらいは知っている。私の方は、彼女の事を何も知らない」
「そうだね、じゃあ要点を。彼女は殺しても死なない。何故なら、おそらくは彼女の近くにいるもう一人を殺さなければいけないからだ。フェンリルと呼ばれる彼だね。彼を殺さないと、何度でも復活出来るらしい。それから、彼女は青い悪魔ですら倒そうとした。結構、いい勝負に持ち込めたらしいよ、ギリギリまで追い詰めたらしい」
「……なるほど。フェンリルの方は分かった。でも、あの女、一度、私が殺さないと気が済まない。媒介となっている奴の方を殺すのは、あの女を一度でいいから倒してからだ。問題は、青い悪魔……奴を倒せる能力は限られてくる。奴の『クラシック・ホラー』の攻撃を防げる能力じゃないといけない。そんな能力者がいないからこそ、青い悪魔は、ドーンのＳランクというふざけた地位にいる」
　クラシック・ホラーの刃物の攻撃は光の速さで飛んでいるとかそんなふざけた事を聞いた事がある。そもそも、青い　　悪魔の能力は時間や空間軸をすら突破しているとも。
　物理法則すら平気で破壊する能力を攻略する手段は限られてくる。
　では、そんなふざけた攻撃はどうすれば回避出来るのか。
　簡単だ。その光の速さとやらと同じ速度で動ければ問題ない。
　更に、あの女の身のこなしから考えて、どうやら体術に長けているようにも見える。ならば、それに付随された能力か。
　おそらくは、こちらを直接、殴ってくる可能性が高い。
　私は、ふと気付く。
　兵器の類で牽制をしているが、奴は攻撃を普通にかわしているだけだ。何かの能力を見せている素振りは無い。それは余裕の表れ、というよりも、むしろ私を認識しなければ、能力を使えないみたいだ。奴はどうやら、私を探しているようだが。
　私を直接、見つける事が出来なければ、どうやら攻撃出来ないかのような。
　……。
「認識、……？　ひょっとすると、奴の能力は認識に関係しているのか？」
　直感、というか閃きだったが、何だかそれが正解のように思えた。

†

　ガトリング・ガンの砲台を蹴り壊す。
　先ほどまで、このフロアにいた事は間違いない。
　なら、まだこのビルの中に隠れている可能性が高い。

……困ったわね。やっぱり、敵も真っ向から挑んでくる程、馬鹿じゃないか。
　此処も、探られる可能性を見越しての事だろう。
　ご丁寧に、すぐに痕跡を消せるように、時限爆弾が仕掛けられている。爆弾はどうやら、ビルごと吹き飛ばせるようなもので、ビル中の柱という柱に仕掛けられており、一つが爆発すると次々と誘爆するようになっているみたいだった。
　別にそれだけでは、全身防御でガードすればいいだけなのだが、問題は何かを狙っている。
　敵がどんな攻撃を使ってくるのか。
　大体は予想が出来ている。
　おそらくは、コロンゾンの絶対無の攻撃を使ってくる。
　それで、彼女を抹消するつもりだろう。
　問題はそれに至るまでの過程だ。
「アサイラムに行ったって事は、そこの囚人達から奪っているわよね？　ならば、私に有効なものは幾つかある筈」
　敵は間違いなく、彼女を消滅空間に放り込みたい筈だ。
　コロンゾン達の言っている事が本当ならば、コロンゾンの能力は彼女の存在自体を消滅させる事が出来る可能性が高い。
　まずは、こちらの状況を有利な方向へと持っていかなければならない。
　彼女は窓を開けると、飛び降りた。
　そして、落下途中で地面を蹴る。
　後方が爆発して、爆風で全身が吹き飛んでいく。
　そして、そのままビルから十数メートルは飛ばされる。
　彼女は先ほど、ビルの中で拾って、砕いたものを周囲に撒き散らした。
　ガラスの破片だ。
　ガラスの破片を辺りに撒き散らす。
　そして、落ちていく破片の中から、一つの影を見つけた。
　レイアの方も、敵を視認する。
『リュミエール』が発動させた。
　周囲の景色が歪む。
　空中を見ると、ゆっくりとしたペースで、ロケット・ランチャーによる弾丸が飛んできているところだった。ビルから落ちた処を狙撃するつもりだったのだろう。
　彼女はそれを難なく、かわす。
　もう、敵はレイアの姿を追えない筈だ。
　後は、一撃で決めにいくだけでいい。

†

　ビルから落ちてきた、あの女の姿が、いきなり見えなくなった。

おそらくは、私の視覚的な問題に影響されているのだろう。
今の攻撃で、私は彼女の攻撃のスイッチを押してしまったという事になる。落下途中で、ガラスの破片を撒いていた事から、三百六十度に渡って、私の姿を探して、そして見つけた。
そして、何かが発動したのだろう。
ふと。
煙の中から、あの女が姿を現す。
私は反射的にロケット砲の中にもう一発、弾を詰め込む。
しかし。
今、見えているあの女は、本当に本物なのか……？
私はライフル・スコープから目を離した。
確かに、肉眼でも見えている。
しかし、奴が認識に関わる能力を持っているのだとすれば、私の脳の方が、勝手にあの女の姿を捏造している可能性が高い。
既に、こちらの居場所も察知されている。
となると、本物の方が、こちらに向かっている可能性が高い。離れなければならない。
どういう攻撃なのか。
対抗策が思い浮かばない。
どうすればいい？
私はふと。
何も無い空間に向かって喋り始めた。
「此処にいるんじゃないの？　今から私をぶん殴って殺すの？」
何も無い空間に向けて、語り続ける。
「私を追い詰めたんでしょう？　今から倒せる、でも私をこのまま殺していいのかなあ？　お前はきっと凄く強い信念があるんだろう？」
もう、此処に来ているかどうかは本当は知らない。
ただ、私はいる事を前提に考えて喋り続ける。
こいつが耳を貸せば、私の勝ちだ。
私が今まで生き延びてこられたのは、能力の強さなんかじゃない。私の本当の力は、相手の心の隙間に入り込む事が出来る技術。
「もしかしたら、お前には凄い正義が存在しているのかもしれない。守りたい者があるのかもしれない、それは尊敬に値するし。素晴らしいのだろう。人間としての強さ、誇らしさを持っているんだろうな」
ふっ、と気配を感じた。
部屋の隅に、そいつは立っていた。
まるで幽霊のようにすうっと。
「私は人間じゃないわ。それは捨てた。正義も信念も無い」
そして、一瞬、そいつの姿は消える。

次の瞬間。
私の暗視ゴーグルが砕け散る。
その光景が見えたと同時に。
私は他人から“借りた”能力を発動させていた。
暗視ゴーグルは吹っ飛んだが、私は地面へと吸い込まれるように引っ張られる。
一撃目は避けた。そして。
部屋全体が、震えていく。
そいつは姿を現した。
私から、数メートル程離れた場所だ。
私は電気の明かりを点ける。
そう。
此処は、ビルの中の巨大なフロアになっている。
中央には、コロンゾンの『エグリゴリ』を予め設置しておいた。
そして、奴は私の挑発に乗って、何らかの手段で遠距離攻撃を仕掛ければいいものを、私を直接叩こうとした。
だから、私は攻撃を受ける直前、発動させた。
ベスティアリーの『イモータル・ホワイト』を。
まるでブラック・ホールのように、圧縮されていき、彼女は黒い点へと向かって引き寄せられていく。
彼女は手から棘を出して、それを近くの柱へと巻き付けていく。
しかし、私はその棘をエグリゴリで消滅させた。
念入りに。
私は圧縮空間の回りに、エグリゴリを大量に設置し続ける。
彼女は何か喋っていたが、圧縮空間によって音波が遮断されているので、彼女の言葉は聞こえない。しかし、少し悔しそうな顔をしていた。
コロンゾンの能力は怖ろしい。
私は彼から血液を取った時に、彼の持つ能力の力と可能性を知った。
おそらくは、存在している、という概念すらも消滅させる事が出来る可能性を秘めた力。それはずっと先の未来に彼が成長を遂げた先にしか発現されないだろうが。確かに、その能力は世界の構造を変革するであろう力であり、そこに存在しているのならば、そいつを消し去る事が出来る力。
存在自体を抹殺出来る力。
存在という概念を消し去る事が出来るであろう、世界の構造を監視する異形の力だ。
今の力でもなお、目の前の、レイア、を、消し去る事くらいならば出来る筈だ。
「お前がどんな存在だろうが、この世界から消滅する。さあ、時間だ、消えろ」
私は一瞬、目を疑った。
彼女の両手の拳から、黒い炎が生まれて、彼女は地面を殴り付けた。

彼女の周辺の地面はまるで水に溶ける砂の城のように崩れていく。
そして。
彼女の背中には、何かがスポンジのようなものが生まれる。
まるで、エアー・バッグのように。
彼女を地面の穴の中へと弾き飛ばしていた。
当然、地面にはエグリゴリの消滅空間を設置していない。
しかも、イモータル・ホワイトの圧縮を抜け出すくらいの衝撃で、地下へと落ちていった。
私は呆けながら、穴を見ていた。
「まるでアリスの兎の穴だな……」
私は自分の周囲に、エグリゴリの消滅空間を作り出す。そして、それを私の移動と共に、動かし続ける。一種のバリアーだ。
取り合えず、穴の近くから離れなければならない。
私は外へと飛び出した。
そして、なるべくその場所から離れるようにする。
地中から出てくる処を叩きたいが、そんな隙を見せるだろうか？
しかし、奥の手があっさりと破られてしまった。
どうやって戦うべきか。

†

メビウス・リング。
ドーン内において語られる存在。
ドーンの創始者とも言われている、何者か。
おそらく、攻撃を一度、食らってしまえば終わりだろう。
オレはメビウスに向かって、斬撃を飛ばす。
その攻撃は、メビウスに命中せず、まるで廻るかのように、彼女へと届かずエネルギーが飛んでいく。
こいつの能力は、ドーンでも情報が出回っているくらいに有名だ。
すなわち、円、輪、渦を作り出して、物質や空間を曲げる事が出来る、と。
幸い、こいつは人間ではない。だから、オレは人を殺す事に対する恐怖が無い。
こいつ相手には勝って、倒す事が出来る。
オレは水月から借りた、小刀を召喚する。
普段使っている二本の剣の一本を、小さな刀に差し替える。
刀を通して伝わってきた。
こいつは、その『ストーム・ブリンガー』とかいう能力がオレの中に流れ込んでくるようだった。ストーム・ブリンガー……オレは読んでいないが、水月が好きな小説から取った名前。
竜巻を巻き起こす、魔剣。

全身に力が漲ってくる。
やはり、オレはそうだ。いつも誰かと一緒に戦っている方が、強い。
オレはくるくる、と小刀を回転させる。
すると、メビウスの周囲に大量の風の刃が生まれた。
そして、オレ自身がまったく視認出来ない速度で、メビウスを攻撃していく。
しかし、メビウスの方も、全てそれを弾き飛ばしていく。
辺りは、ほぼ何も無い砂漠の荒野だ。
ここでなら、まるで躊躇う事無く、この能力を最大限まで引き出す事が出来る。
全身がまるで、風そのものと同化していくような感覚。
辺りには砂塵が舞っている。
気付けば、オレはいつしか砂塵の舞い落ちるスピードが遅くなって感じるようになった。
全身が余りにも、軽い。いや、軽過ぎる。
オレはストーム・ブリンガーで無い方の、剣を振るった。
斬ったエネルギーが衝撃波を放っていく。
そして、それはさながら辺りの空間自体を破壊して斬り付けるかのような威力を放っている。そう、ソニック・ブームを引き起こしているのだ。
そして、その光景を更に、オレはスローモーションで眺めていた。
レイアのエクスターズ・ワールドの世界。彼女が拳銃などの使い手を視認した時に起こりえる、所謂、音の壁を超越した世界。
更に、全身の速度が上がっているみたいだった。
このまま、何処までも飛んでいきそうな。
オレ以外の何もかもが遅かった。
風の刃によって生まれた余波が、遠くにある建造物の残骸を貫く。すると、それはまるで砂粒のようにさらさらと崩れていって、空中へと溶けていく。
いつしか周囲の全てに、風の刃が発生する。それは竜巻となって、周囲全てを飲み込み、切り刻み続ける。竜巻というよりも、さながら核爆弾の暴風のような。
メビウスはその中で、平気で立っていた。
そして、どうやらオレの攻撃にも対応出来ているみたいだ。
オレは小刀を突き出すように振るう。
すると、数十、いや、数百、数千発もの風の弾丸がメビウス目掛けて向かっていく。更に、オレはその攻撃をゆっくりと鑑賞している。
これが、デス・ウィングの能力。
レイアは、ハーデスやブラッドは、こんな奴と戦っていたのか。
こんな奴、ドーンやアサイラムの奴らが幾ら束になっても勝てないだろう。
それほどに、オレが手にした力は余りにも強く、余りにも規格外で怖ろしい。
ドーン、賞金首スリーＡの確かな実力だった。
ただ、問題は。

敵であるメビウス・リングに、一撃も入れられていない、という事だ。
まるで、空間そのものを切り取ったかのように、風の刃は廻りながら、別の方角へと飛んでいく。
どうやって、回転の防御を抜けるべきか。
オレは大地を抉り、削る。
大地の岩盤を切り抜いて、巨大な四角形のブロックを地中から作成する。
大体、数十メートルはあるブロックだ。
それを、メビウスへとぶつけてみる。
しかし、やはりそれも壮大な爆裂音と共に破壊される。
このままだと埒がまるで明かない。しかし、有利な点もある。
どうやら、お互いに攻めあぐねている。
オレがダメージを与えられないのと同じように、相手もこちらに攻撃を与えられずにいるみたいだった。
しかし、オレの方が、多少、有利かもしれない。
フェンリルの能力で、捩れる空間を瞬間移動させて、それに合わせて攻撃を叩き込めばいい。
問題は何処まで近付けるか、だ。
ストーム・ブリンガーはこのまま遠距離から攻撃し続ければいいが。
フェンリルの瞬間移動では、十数メートル近くまで近付かなければならない。
それをクリアしなければならない。
オレは地面を刳り貫き続ける。
大地が抉れ、まるで渦潮のように辺り一体が飲み込まれていく。
周辺全てを切り刻む刃だ。
このまま地面を切り続ける。
断層を破壊し続けた。
地響きが鳴る。
巨大な地震が起き、次の瞬間、地面が割れた。
そして、地面からは炎の柱が噴出していく。
溶岩流が辺りを飲み込んでいく。
メビウスのいる一帯だけ、溶岩や今なおも送り続けている風の刃が避けて通る空間が作られている。
そして、その大地の惨状を囮にして。
オレは可能な限り、メビウスの元へと近付いた。
メビウスの周りにある、回転の空間を何処かへと消し飛ばすつもりだった。
……。
「……来た」
メビウス・リングは、それだけ言った。
その声は、音波という空気の振動ではなく、まるでオレの心に直接響いているかのようだった

。
　そして、理解する。
　こいつにとって、オレとの戦いは時間潰しに過ぎない。
　もう、本当の敵は現れているのだ。
　アイス・エイジ以来、だ。
　あの時は、擬似的な宇宙空間を召喚されたんだったか。
　そして、今回。
　リフリジレイターとかいう存在を召喚したのは、一体、誰だったのか。
　ハーデスだったのか、チェラブだったのか。
　オレには分からない。
　もうひょっとすると、誰にも分からない。
　空が、朱色に染まっていく。元々、余り綺麗な色はしていなかったが。今は、真っ赤な景色が世界に塗り潰されていく。
　そして、その景色の中から、まるで無数の怨念のように、幽霊のように崩れた顔達が姿を現して、巨大な骸骨を形成し始める。それは茸雲の形に似ていた。
　そして、何処か、この世の何もかもを嘲笑う、道化師の顔にも見えた。
　道化師、そう道化師のような姿をしているのだ。
　世界を停止させる、冷凍装置とは。
　ハーデスとチェラブ、この世界の混沌そのものと一体化したのは、どちらだったのか。もう、今では誰も分からない。
　アイス・エイジで見た、この世界とは異なる、あの世界。
　メビウス・リングは、首を回して、こちらを見た。
「もう、時間だ。そして、お前は私が片付ける」
　オレは、どうやら、気付けば。
　メビウス・リングの攻撃を食らったみたいだった。
　オレの全身は地面へと向かっていく。
　溶岩の中だ。しかし、竜巻の刃と瞬間移動で溶岩の中に孔を穿ち、ガードする。熱も炎も、オレには届かない。だが。
　オレは地中深くへと向かっていった。
　まるで、地中深くへと埋め込まれていく。
　オレの周りは空洞のようになっている。
　まるで、永遠に地面の中へと落ちていくかのようだった。
　気付くと。
　落ち続けていたと思うと、いつの間にか孔から抜け出していた。
　それは、オレが穿った孔だった。メビウスの姿がちらりと見える。
　そして、オレはそのまま空へ向かって落ち続ける。
　まるで、無限の閉じられた空間みたいだった。

決して、抜け出せそうに無い。
まるで、メビウスの輪、クラインの壷、エッシャーの絵画のように。
同じ場所を廻り続けた。

†

遠くで、破壊音が響く。
この地下迷路は、幾つもの次元が折り重なっている。それを超えて響いてくる音、という事は、それ程の規模を誇るものだろう。
いや、今はそんなものはどうでもいい。
ひとまず、物陰に隠れていたが、完全に敵を攻略する術が無い。
まるで火が付いた導火線のように、感情を剥き出しにしながら戦いを仕掛けたのはいいが。
今では、まるで冷め切ったストーブのように心の中は冷静だった。
今回は撤退と言いたい処だが、どうやら私は意地になっていた。やはり、何処か屈辱的で悔しかったのだろう。
何処か、客観的に遠くから自分自身を見つめている感じだ。
さて、武器はまだ幾つかある。
戦えない事は無い。
この廃墟ビルの世界には、まだ敵を封じる為のトラップを幾つも仕掛けてあるし、攻撃する為の兵器類も隠して置いてある。
充分なくらいに戦える。
こつん、という音が聞こえた。
まるで、私のいる場所が簡単に察知されているかのように、そいつは姿を現した。
ちょうど、私に見えて、彼女には見えない位置。
彼女はぽつりと喋った。
「もう時間だ。私は行くわ、またね」
まるで興味を失ったように、そいつは迷いなくこの場所から去っていく。
私は思わず飛び出して、彼女へ向かってリオックを突き付けた。
「待て、お前、私との戦いは？」
「好きにすればいい。私はこれから甘名を支援しに行く」
彼女は振り向く。
彼女と私は目が合った。
そういえば、彼女を間近で見るのはこれが始めてか。
彼女はまるで、冷徹そのもののような紅い眼と、淡い黄緑色の髪を靡かせていた。美貌なのだが、何だか、作り物のような。この世界に存在するのがそもそも不可思議といった。
対する私は、顔面に昔からの酷い火傷痕が映って見える。
いつもはメイクで隠している、顔面に沁み込まれた火傷の痕。どんな能力でも治癒する事が出

来ない。おそらくは心に刻み込まれた傷。
　瞬間、彼女の姿が消し飛んだ。
　彼女の能力が発動したのだろう。
　このままだと、……私は死ぬ。
　彼女によって、殺される。
　しかし。
　一分近く経過しただろうか。
　まるで、私への攻撃は無い。
　そして、更に、数分の時間が経過する。
　そして、はっとなるかのように気付いた。
　彼女が私との戦いを完全に放棄して、先ほどの場所へと向かったのだと。
　全身から力が抜け落ちる。
　追う気になれなかった。

†

　温和そうな老人の顔が現れる。
　そういえば、オレは彼とどんな話をしたのだったか。
　そいつはオレの前に立っていた。
　彼は死人だった筈だ。
　オレはぽつりと呟く。
「オレは死んだのか？　お前は冥界の王なんだろう？　なあ、ハーデス」
　老人は言う。
　ジョージと呼んでくれ、と聞こえた。その通り名は嫌いだ。と。
　オレは苦笑する。
　本当にそんな事に拘って。普通の人間らしい人間でいたかったのかも。何だか取っ付きやすい、好々爺で。
　しかし。
　オレもやはり、死んだのだろう。冥王というよりも、まるで地獄からの使者みたいだ。
　そんな事を口にする。
　老人は笑った。
　リフリジレイターとは何だ？
　オレはふと、そんな事を考える。
　秩序の反対。あるいは正義の反対。この世界の理の反対。
　この世界の基盤そのものを崩しかねない可能性。
　ひょっとすると。
　ウォーター・ハウスの『胸解放』や。

レイアの『亡びの光』。
それらも、近しい存在なのか……？
……。
気付くと、何度目かの回転だろう。
オレは今度は背中から地面へと向かって、落下して行く所だった。
水月の能力も解除出来ないせいか、溶岩に飲まれて死ぬ事も出来ない。
しかし、何故だか心は安らかだった。
メビウス・リングは再び、こちらを振り向く。
それはオレが再び、地中深く落ちていく瞬間だった。
一瞬、時間が停止したかのような感覚。
「お前は、一体、何なんだ？」
メビウス・リングは確かにそう言った。
それは、彼女の口からはまるで信じられないといったような。
レイアが何度も、オレに告げた。
デス・ウィングが何らかの手段によって引きずり出した。
オレの、フェンリルの空間移動の能力が。
その本来の力の片鱗が。
『自由に死を。』の世界で、レイアが『亡びの光』に目覚めた時のように。
オレの能力の先にあるものが。
この世界に姿を現した。
……。
瞬間移動は確かに引き起こった。
オレは結果として、メビウス・リングの攻撃から抜け出す事が出来た。
しかし、抜け出した、というのか。それとも、破壊し尽くした、というのか。
まるで、オレ一人がぽつんと取り残されたかのように。
空の、巨大な孔の開いた大地の上に、浮かんでいる。
メビウス・リングは信じられないといった顔で、オレを見つめている。
彼女の姿は遥か、後方にある。
地面を見ると、巨大な亀裂が地平線の向こうまで走っている。これは、このオレが引き起こした現象だというのか。
世界自体が、まるで断層をズラしたかのように、ズレていた。くっ付いた二つのブロックをズラすかのように、ズレた。
溶岩の濁流の中に、オレはぽつんと佇んでいた。
明らかに、熱によって燃え、溶かされる筈なのに、まるでオレの肉体を避けるかのように、溶岩はまるでこちらに届いていない。
自分自身の周囲だけが、切り取られているかのようだった。
勿論、ストーム・ブリンガーの防御は無くなっている。

「リフリジレイターとは、“能力者の能力の先”にあるものか……」
　ようやく、それを理解する。
　だからこそ、秩序に対する対極。
　メビウス・リングが創り出され、怖れている能力者の先に存在する力。
　アイス・エイジで炎猫が作り出した世界。
　そして、ハーデスかチェラブのどちらかが到達した世界。
　どうやら、オレは。
　空間を切り分けているみたいだった。
　自分自身ですらも、何をやっているのか分からなかった。
　空間に断層を作り出して、いわば、世界を切り分けて、別々の世界へと変えている。
　オレの中にこんなものが眠っていたのか。……。
　自分で自分が分からない。
　そう、自分が何者なのかもだ。
　そして。
　どうやら、閉ざしているみたいだった。
　紅い空、骸骨の姿の茸雲。
　そのリフリジレイターと呼ばれる現象そのものを。
　それを見て、メビウスは驚愕している。彼女以外では、どうにかする事の出来ないらしい現象。神の一部の片鱗を。
　空間全てが、シャットアウトしている。
　いや、それは空間というべきものなのか。
　次元、とでも呼ぶべきなのだろうか。
　オレはメビウス・リングの元まで、飛ぶ。
　次元と次元を渡り歩く、オレのフェンリルの瞬間移動の能力。
　それを発動させて。
　オレはメビウス・リングの前に立った。
「さて、倒されてくれないかな？」
　メビウス・リングは肩を竦めた。
「私を倒したら、確かに今、起こっている目の前のリフリジレイターの現象は収まる。確かに、その通りだ。ブエルという男が至ったみたいだな。しかし、私を倒しても、今の現象が終わったとしても。次の現象を止められるものはいなくなるぞ？　そうなった場合、世界を飲み込む混沌の力を抑えられるものなど存在しなくなる」
「ほう？　だからって、オレが犠牲になれと？　オレの友人達も？　悪いな。世界なんて壊れればいい。オレ達が犠牲になるしかない世界なんてな、すまないな。オレに正義なんて無い。オレはエゴイストだ。だから、お前も消えて無くなればいい」
　メビウス・リングはオレが茸雲を閉じ込めた空間を見る。
　骸骨のような茸雲は、次元の隙間を超えて、こちらの世界へと浸透していく。

「あれを止められるのは私しかいない。悪いが、君の事情なんてどうだっていいんだ。私は、只、創られただけだからな。あれを倒すように設定されている。そして、私の命の消滅を代価として、あれを消させるわけにはいかない。私が消えたら、後続のあの現象を止められるものはいなくなる。分かるかな？」
　オレは剣を構えた。
　まだ、ストーム・ブリンガーの小刀もこの手にある。
　そして。
　オレは切り分けた空間を、さらに“切り分けて”、道を作っていく。
　それは、“通り道”だ。
「メビウス・リング、言っていなかったな。もう、お前なんていなくても、この世界に溢れ出る混沌を消滅させる手は考えている。なあ、もうお前は終わりなんだ。神なんていらない。全てはこの世界に在るべきじゃない」
　切り分けた空間を歩いて、彼女は現れた。
　薄い黄緑色の髪が揺れる。
　少し、遅かったな、とオレは思った。
　レイア。
「お疲れ」
　オレは言った。
　彼女は頷いた。
　メビウスは理解不可能な顔で此方を見ている。
　レイアのエタン・ローズの更なる先の能力。
　それが、始めて、この世界の中で発動する。
　それは、夢の目覚めのようだった。
　それは、神を倒せる能力だと、彼女は理解した。
　メビウス・リングは少女を見る。
　少女を認識する。
　そして、赤い茸雲もまた、彼女を認識しているようだった。
　その理解、認識の仕方が空に現れる。
　それは巨大な“眼”だった。
　空中をナイフで薙ぐように、ぽっかりと開いた、巨大な眼が現れる。
　それがオレとレイアを見つめていた。
「『亡びの光』は神に私を認識させる。そして、私は神の認識の裏側へと回り込む事が出来る。すなわち、神を超え出る事が出来る。これを使うのは初めて、でも使い方は分かっている」
　レイアは拳を掲げた。
　大量の薔薇の形を象った光。
　光の渦。
　それを、赤い髑髏の茸雲に向かって放つ。

　それは光に飲み込まれて、分解されていく。
　そして。
　彼女はメビウス・リングの前に立つ。
　メビウスはどうやら、彼女を“見失った”みたいだった。
　容赦は無かった。
　そして、これがオレ達の計画だった。
　レイアの拳が黒いドレスの女の頭をぶち抜く。
　そして、胸も貫き、腹を薙いだ。
　途端に、世界の変貌が終わっていく。
　空は淀むが、只の放射能が撒き散った後の廃墟の世界へと変わり、未だ流れ続ける溶岩が大地を食らい続けている。
　そして、バラバラに破壊された神の死骸は、ただの球体関節人形の部品へと変わっていた。何も変わりは無い、セルロイドで作られた人形。
　それは、溶岩の濁流の中へと飲み込まれて、沈んでいく。
「……帰りましょうか、甘名」
　少女は詰まらなそうに、下らなそうに言った。
　オレは同意した。
　ストーム・ブリンガーの風の力によって、オレとレイアは空中を飛ぶ。
　そして、レイアが渡った道を通って、オレ達はこの世界を脱出した。
　……。

†

　ストーム・ブリンガーの能力の一部である小刀を水月に返して以来、オレのフェンリルの先にある能力は発動させる事が出来なくなっていた。
　思えば、メビウス・リングと戦っている途中でも、既に使えなくなっていたような気がする。
　水月いわく、どうやら、オレが無意識の内に、自身の能力を制御し、封印しているらしい。今回は、水月の能力の共鳴、共振によって強い波動を送り続けて、無理やり引き出したみたいだった。
　レイアに亡びの光があるように、オレにも能力の先がある。しかし、オレは自分自身の力の先を少し厭っていた。
　……。
「貴方の先にある能力、何か名前を付ける？」
　レイアとオレは、今は例の部屋で休んでいた。
　結局、裏・原宿の地下迷路の一つにあったあの次元は、それごと何処か遠くの彼方へと消し飛んでいってしまった。
　あれ以来、オレの力はまるで発現していない。

デス・ウィングは顛末を聞いて、楽しそうに笑っていた。
また彼女から、ストーム・ブリンガーの一部を借りて、練習してみたのだが、発動しない。
「甘名、貴方のそのフェンリルの力、先にある能力に新たな名前を付ける？」
「いや、いい。それにもう、オレは何だか、馬鹿らしくなった」
自分自身で制御出来ない能力。
しかも、制御出来たとしても、使い道がまるで思い浮かばない。
「さて、どうするかな、ケルベロスにでも会いに行こうか？　彼は新しい、アサイラムの署長を務める事になるみたいだし」
「それがいいわね」
レイアはアップル・ティーを口にする。
当面の目的はまるで無い。
メビウス・リングを、……神を本当に倒してしまって、オレ達はもうどうにも言えないニヒリズムに陥っていた。
あの科学者が言うには、秩序の側であるメビウスを倒せば混沌ごと消滅すると言っていた。しかし、メビウスは自身を倒してもまた、混沌は誰かを依り代にして現れるだろうと言った。
どちらの主張が正しいのかはどうでもいい。
科学者に疑問を呈しようにも、そいつの意思を宿したゲーム機は完全に機能停止してしまった。一秒も映らなくなってしまった。
きっと、寿命が来たのだろう。
まあ、また混沌が現れても。
レイアには、神を倒せるらしい『亡びの光』が在る。
だからどうでもいいんじゃない？　と彼女は言った。
そんな事よりも、最後まで混沌と同化したのは、ハーデスの方だったのか、チェラブの方なのか分からない。そんな事をオレは考えていた。
……。
青い悪魔、ブラッド・フォース。
メビウス・リング、リフリジレイターを倒して以来、全身に回っていた黒い模様は消えていき、彼は回復していった。
それから、世話になったと言って、この部屋を出て行った。
レイアの占いでも、彼の心理的防御が働いているからか、引っ掛からない。
青い悪魔は何処に行ったのだろう。
ともかく、この件はこれで終わりだ。
オレの目的はしばらくの間、何も無い。
ドーンに戻ろうかと思ったが、特に狩りたい敵もいない。
そういえば、ウォーター・ハウスの賞金を貰っていないのだが、正直、どうでもよかった。

†

……。
もうすぐ夜が明けるのだろうか。
ウォーター・ハウスは朦朧としながら、月の光を眺めていた。
どうやら、まだ生きて意識がある。
彼の肉体はどうやら、常人としての構造をとっくに超越している為、本来ならばとっくにその生命が終わっている筈なのに、まだなお、命は続いていた。
勿論、肉体の生態機能が著しく低下し、再生、治癒の能力はもう使えない。
死ぬのは時間の問題だった。
彼は、これまでの人生の記憶を振り返っていた。
死ぬまでの時間潰しだ。
心臓が停止するまでの時間潰し。
彼は思考する。
殺人衝動とは一体、何だったのかとか。
大切な友人などはいたのだろうか、だとか。
冷たい死が迫り、冷たい大地に横たわりながら、考えていた。
自分が此処で朽ちる事に対しての感傷は無い。只、死は安らぎにしか過ぎない。
それにしても、月がとても綺麗だった。
目の前が霞んでいく。
ぼんやりと。
一人の少女が彼の隣にいた。
そして、必死になって、涙を流していた。
「……モニ、カ……？」
彼は声にならない声で、誰何する。
少女は頷く。
「……俺、の為……に。涙を流して……いるの……か？　……」
その意外な事実に、彼は何とも言えない焦燥が湧き上がっていく。
そんなものは、見当違いだ。
彼はゆっくりと息を吸う。そして、何とか声帯器官を安定させて、話す。
小さく、自分でも驚く程にか細い声。それはまるで
「俺の為に泣くべきじゃない。まあ、所謂、裁かれたって奴じゃないのか？　別に俺自身は特に感慨が無い。他人の死にもそうだったように、正直、自分の死すらもどうでもいい。ただ、お前が無事だった事は喜ぶべきだろうな。俺には分からない、俺はどっちだったのだろう？　もしかしたら、何かを切り開きたくて、殺人はその過程にしか過ぎなかったのかもな」
ただただ、モニカは泣きじゃくっていた。
やはり、彼女には悪いが、男のような強さも必要だな、と彼は思った。
自分が死ぬ分にはまあいい。しかし、自分が死んだ後、彼女にはどうやって生きて貰うべきか

。おそらくは、他の者達も死んだのだろうと思うが。
　彼はそんな事を考えていると、意外な声が聞こえた。
「へえ、いいザマで転がっているじゃない……」
　それは刺々しいが、何処か抑揚の無い、そして彼同様に死期の近い者のか細い声だった。
　そこには、羊の角を生やした、ローブを纏った女が立っていた。
　全身、血塗れで、肉体は孔だらけだった。ぱっと見て、心臓を含めた内臓に、多大なダメージを負っているように見えた。
　しかし、彼にはまるで死神のようにも見えた。
「俺に、止めを入れに来たのか？」
「……そうね、貴方には、間接的に弟を殺されたし……、でも、もういいわ。……」
　彼女はその場に蹲り、彼同様に空を眺めていた。
　モニカは泣き続ける。
　そして、少女はあろう事か、羊の角を生やした女に、まるで懇願するように、女の服の裾を引っ張って、何かを訴え続ける。
　女はぽつり、と呟いた。
「そこで転がっている男、確かに私の能力なら助けられる可能性もあるかもね。一時的に、肉体と、地面の泥でも掻き混ぜてしまえば。……肉体を治癒出来るまで回復するかもしれないわね……」
　ウォーター・ハウスは言った。
「なあ、頼む。……そいつを、モニカを連れて行ってくれないか？　そいつは一人では、生活していけないだろう、な。俺の面倒に付き合わせて済まないと思っている。なあ、連れていってくれないか？」
　女は意識を失いかけていたが、彼の言葉に反応を示す。
「馬鹿、じゃないの？　私にそんな力、もう残されてない。……見れば分かるでしょ？」
「……治してやる。……頼む」
　この女は悪人だろうと、彼は見抜いていた。彼同様に、他人に対して容赦が無い。
　おそらくは同種なのだ。
　しかし、だからこそ、縋ろうと思った。
「分かったわ」
　彼女はそう言って、そのまま口を噤む。
　生命の灯火が、もう尽きている。
　彼は嘆息する。
「モニカ……」
　彼は未だ泣きじゃくる少女に言った。
　彼女は彼を見る事もせず、泣いている。
「モニカ、聞け。俺はもう駄目だ。けれども、後、一人分くらいの命を助ける余力は残っている。……その女は、きっとイイ奴だ。俺が保証する。だから、治してやるんだ。お前の為だ。その

女を、俺の元まで運んでこい……」
　彼は喋った。もうじき、彼の生命は尽きる。
　しかし、その前に為すべき事がある。目の前でもう冥府の底に入りかけている女を、無理にでも現世に引き戻して、……一人では何も出来ない少女のお守りをして貰うしかない。
　彼に残されたやるべき事。
　ひょっとすると、彼はこの瞬間の為に生きてきたのかもしれない。
　生命を食い殺す毒薬でしかなかった、これまでの人生。
　今は只、一人の生命、一人の人生を救済する為の霊薬であってもいいのではないのか、と。思ってしまった。
　彼の意識は、少しずつ、無くなっていく。いよいよ、時間らしい。
　頭を強く抱き抱えられたような気がした。
　気付くと、上半身ごと、彼女は彼を持ち上げている。
　そして、倒れている女の前まで連れて行った。
「上出来だ。俺の方を連れていくなんてな……」
　ウォーター・ハウスは、女の肉体を見る。
　既に、呼吸もしておらず、心臓も止まっている。
　もう、死体といってもいい。
　しかし、彼は女の身体に触れて、残っているエリクサーの力を使い切る。
　数分程、経っただろうか。
　女は目蓋を開いた。
　ぼうっと、微かに意識が戻る。
「……向こうの世界ってあるじゃない。……やっぱり、私は地獄行きか。まあ、仕方無いか、……」
　彼女は辺りを見渡す。
　そこには、一人の少女が、もはや完全に死体となった、干乾びるように崩れている男に泣き付いている。もう、どうやっても助からない死体。
　女……キマイラ・ヘッドは、復讐すべき相手によって、命を助けられた事を知る。
　そして、何故、彼女を死の暗闇の中から引きずり出したのかも理解する。
　キマイラは少女を見て言った。
「私は、甘くないわよ？　お嬢さん。でも、宜しくね」
　今夜はもうどうしようもないくらいに、月が綺麗だった。

†

「結局、私は何も出来なかった。それが悔しくて溜まらない」
　私は電話機を破壊する。
　神の世界を見てきた科学者の意識を取り込んだ電話機はそこで破壊された。

いや、私がそれを破壊する前に。
その機械はもう二度と、喋るのを止めていた。
コロンゾンに会いに行こうか。
私は溜め息を吐く。
結局、私は何も成し遂げられていない。
でも。
私は手に入れたものがある。
裏・原宿の向こうにある、屍峠。
そして、そこを更に進んだ場所にある臓物の草原。
そこで、あの少女と青い悪魔が戦ったという事実を、私は知っている。
そう、あの戦いを見た目撃者は何名もいる。
それは、小さな無数の悪妖精や小鬼達、魔物達であったが、確かに彼らはそれを目撃していた。私は彼らの話を便りに、その場所を探った。
そして、見つけたのだ。
少女に傷付けられて、血を流した血痕の後が。
まるで、それは忌まわしい痕跡であるかのように、血を啜り、舐める怪物達も、その場所を避けていた。
青い悪魔の血。
私はそれを入手した。
そう、この臓物の草原では物が腐敗しない。
微生物が極端に少ない為、分解する速度が異常に遅いのだ。
それが草花などにこびり付いている。
私は可能な限り、その血痕を採取した。
そう、私はあの、恐るべきドーンＳランクの殺人鬼の能力、『クラシック・ホラー』を手に入れたのだ。
私は採取した血液を使って、試しに広い街へと赴いた。
そこは平穏な街だった。犯罪件数も少ない治安の良い場所らしい。
幸せそうな顔をした者達が、沢山、歩いていた。
実験には丁度いい。
私はほくそえむ。
私の憎しみ。それはもうどうしようもない程に、この世界でいつも笑っている奴らが大嫌いだった。こいつらがいるせいで、きっとバランス的に不幸に闇の牢獄に閉じ込められている沢山の人々がいる。
だからこそ、私はこの世界を憎んでいた。
かつて、私自身の幼少時、神がいなかったように。……。
こんな平和な街があるから、あのゴミ捨て場、アイス・エイジが存在するように。
私は、悪そのものに為ろうと。

……。
この街で、私は試しに殺人鬼の力を“発動”させてみた。
巨大な暴風雨のように、大地に眠る鉄分、金属からナイフやら刀剣やらが創られる。
私のイマジネーションが赦す限り、いや、私がこれまで見てきた様々な形状の、様々な用途の刃物達が、大地から生誕し続けていく。
それが、まるで疫病のように街へと向かっていき。
そして住民達を無尽蔵に殺していく。
制御出来ない能力だった。
無尽蔵の死人達。
沢山、歯止めが効かず、人々が死んでいく。
圧倒的なまでの無差別殺人。
余りにも、純粋で何もかもを殺し尽くす暴力。
私は理解した。血液を奪うという事は、その人間の持つ情報もある程度、知る事が出来るのだ。……。
青い悪魔の持つ感情、感性、思考。
それは、他人に対する恐怖そのものであり。
同時に、自分の行為に対する“贖罪”を欲していた。
しかし、彼は未だ贖罪の仕方をまるで見つけられず。只、生きている。
猛烈な強い悲しみの感情ばかりが伝わってくる。
それは精神を爆裂させるように、胸の鼓動を引き裂き食い破るように。
感情の洪水。
そして、この世界に生きている他人に対する恐怖そのものだった。
他人が怖い。多分、彼の最初のきっかけはそれでしかなかったのだろう。
それが、今は、世界中の人間から憎まれている。
その感情の洪水が、私の世界に対する憎悪と融合するかのごとく。
青い悪魔の能力は、様々な者達を巻き込んで、無制限に発動し続けていた。
こいつは、きっと生きていてはいけない存在なんだ。
そのような感情に襲われると同時に、何故、彼が生きていてはいけないのだろう？　そんな二重の相反した感覚に襲われる。
人間が大量にバラバラに解体されていく。
細切れに。
無意味な死へ、肉塊へ。
どんな価値ある生命も、この攻撃で簡単に朽ち果てる。
強い、強い、狂おしい程の世界を破壊し尽くす、殺人。
殺す事以外の何物でも在り得ないだろう、無制限の無差別殺人行為。
それが、世界に降下していた。
命あるものは、いずれ逃れられない死へと向かっていく。そして、その死はきっと絶対的なも

のなのだろう。それは、人類がきっと死という概念そのものを認識した時から起り得た、あの絶対的なまでの感覚、死への恐怖。余りにも古典的であり、余りにも古過ぎる起源を持つ。古い、古い、太古の昔からある恐怖そのもの。
　クラシック・ホラー……。
　街は粉微塵に砕け散っていた。いや、そうとしか表現出来ない。
　建造物は人間を殺す刃物へと分解され変えられ、当の人間達は粉微塵の死体へと変わっている。何度も何度も、細切れに切り裂かれ続けて。
　圧倒的なまでに無意味な死。
　神話に登場する神の人類への裁きそのもののような。
　破壊と死。
　私は、一人、何も無くなった空間を見て、へたり込んでいた。
　今や、採取した血液の全ては使い切ってしまっている。歯止めは効かなかった。
　私が壊したかった、世界。余りにも脆過ぎる。
　この攻撃は、近隣の街にまで及んでいる。
　死者の数は。……考えたくない。
　此処まで圧倒的な殺人行為を引き起こしたのは、私のテロリズムばかり行っていた人生の中でも始めての行為だった。此処まで、意味も無く殺し尽くしたのもまた初めてだ。
　私はせせら笑う。
　私自身を。……。
　もう、戻れない。
　いや、とっくに戻れなくなった。地獄の扉。
　私は“赤い竜”に為る。神と敵対したサタンの化身。
　赤い、赤い、竜。レッド・ドラゴンに。
　神の、敵対者に。
　……。
　私は何も無くなった場所で哄笑し続けていた。
　人々も、街も跡形も無く何も無い。それを成し遂げた刃物達も、役目を終えて、砂粒へと変わり、地中へと還っていった。
　見事なまでに、何も無い。
　虚無。そのもの。
　きっと、混沌は私の元へと降りてくるのだろうか。私はそれを望んでいる。
　世界を壊す力が欲しい。絶対的な虚無が。
　私は笑い続ける。
　白い、真っ白に何も無くなった世界に対して。
　自分の命と引き換えに、この世界を壊し尽くす事が出来ればと。
　願い続けながら。
　私は笑い続けた。

他人の血を求め続ける、吸血鬼の声は響き渡る。
闇が全身を優しく、とても優しく。包み込んでいくようだった。

ＥＮＤ